

平野の小宇宙

富山県南砺市城端の生活文化

地域社会の文化人類学的調査 21



富山大学人文学部文化人類学研究室

ISSN 2186-8956

目 次

はじめに（竹内潔）	1
1. 地域の概要	3
2. 曳山祭	
2-1. 曳山祭の概要（小山彩恵）	13
2-2. 曳山祭を支える人々（小山彩恵）	25
3. 地域コミュニティにおける祭りの役割（小坂ゆう香）	41
―野下町獅子舞の事例から―	
4. むぎや祭	
4-1. むぎや祭の概要（寺田未佳・羽鳥良斉）	59
4-2. むぎや祭をとおして変化するコミュニティ（寺田美佳）	63
4-3. むぎや祭が持つ楽しさと束縛（羽鳥良斉）	79
4-4. むぎや祭における「じゃんとこいむぎや」の役割（霜鳥祐希）	93
5. 婦人会が地域に果たす役割（藤村沙樹）	111
6. 神社・伝説・祭りから見る人々の「郷土観」（吉浦翔）	129
7. 城端の食文化におけるナレズシ（木山侑希）	141
8. 農村部と町部の家屋構造と居住者の認識（石附かおり）	151
9. 国道の拡幅と再開発による住民生活の変化と住民の城端像（河合智香）	165
10. 生活施設に関する意識調査から見る城端のイメージ（田村駿裕）	177
11. 絹織物に対する住民の意識と生産者の取り組み（近藤奏絵）	185
12. 理休地区における水車と住民の関係（佐野あずさ）	195

はじめに

富山大学人文学部文化人類学研究室では、1979 年の研究室創設以来、教育の一環として北陸の一地域を選んで調査実習をおこない、得られた知見をまとめて報告書『地域社会の文化人類学的調査』を刊行してきました。この報告書は、第 21 巻となりますが、昨年度に引き続いて、富山県の砺波平野の地域社会についての実習調査の成果をまとめました。昨年度は、中心地域の都市化が進むいっぽう、農村部では少子高齢化や郊外化が進行している砺波市での実習調査の成果を報告しましたが、報告の多くは地域社会の急激な変容に関わるものでした。今年度は、古くから絹織物の町として栄えた南砺市城端と周囲の農村地域でおこなった実習調査の報告を編みました。城端もまた、様々な社会経済的な変容の過程にあります。自律的な地域としてのまとまりを色濃く残しており、実習に参加した学生たちの関心は、自ずと城端の「伝統」へと惹きつけられていきました。かつて、米山俊直先生は、町と周辺の農村、山地帯で構成される盆地の自律的な社会文化を日本文化の多様性を産み出す「小宇宙」と表現されました（『小盆地宇宙と日本文化』、1989 年、岩波書店）。城端は平野にありながら、有機的なまとまりをもった社会文化を維持しています。この報告書のタイトルを「平野の小宇宙」としたゆえんです。

学生たちが調査に取り組んだテーマは多岐にわたりますが、どの調査においても、城端の人々が主体的に関わっている「伝統」的な生活文化や地域のアイデンティティを支えているイメージが主題となりました。いずれの報告も未成であり、事実認識に不十分さが、考察に未熟さが残っていることと思います。しかし、文化人類学は、文献に飽き足らず、自らの身を「現場」に運んで、そこで当該の社会の文化を自らのうちに取り込み、理解を組み立てようと自分の視野からの跳躍を試みる学問です。調査した学生たちのなかには、城端の祭りに踊り手として参加させていただいた者もいますが、どの学生も城端に何度も足を運び、自ら計画して合宿をおこない、城端の中に溶け込もうと試みました。たとえ、学生たちの努力がつかない跳躍であっても、その軌跡は文化人類学を通して、他者を理解することの困難と楽しさを体得した証だと言えます。

この報告書のなかに、学生たちが城端の人々との邂逅を通して、生活文化を支える地域の民衆の力を看取していった様子を読み取っていただければ、これにまさる喜びはありません。

2012 年 1 月 20 日

富山大学人文学部 竹内潔

謝辞

これまでの実習調査でも調査地の多くの方々のご助力を賜ってきましたが、今回の城端での実習調査では、とりわけ、暖かいご支援をいただきました。城端曳山会館館長の小山昇様には、調査の開始から終了まで変わらぬご厚意を賜り、学生たちが懇切なアドバイスをいただき、また、休憩の場を提供していただきました。教念寺の高桑様、傳栄寺の大村元様、大村忍様とご家族には、長期にわたって合宿の場として部屋を貸していただき、家族同然のように学生たちを遇していただきました。

厚く、お礼を申し上げる次第です。

また、多くの城端の方々に対して、それぞれの報告で学生たちの謝意が表されておりますが、みなさまのご助力がなければ、実習調査がこのような報告書として結実することはありませんでした。心からの謝意を表したいと思います。

1. 地域の概要

1-1. 城端の地理と気候

富山県南砺市城端は、県の南西端に位置する南砺市の中央にある(図1)。面積は65.03平方キロメートルであり、地形的には、庄川と小矢部川に挟まれた扇状地¹で田園地帯が広がる砺波平野と、山地によって構成される。城端の面積のおよそ三分の二が山地で、南東には、^{たかしみずやま}高清水山などの高山が連なる(図2)。袴腰山と小瀬山の山麓から山田川が、高清水山の中腹にある縄ヶ池の一带から池川が流れている。山田川と池川に挟まれた河岸段丘²上に中世から絹織物で栄えた城端の旧町がある。また、この二つの川は城端の町周辺の農村地帯に用水を供給している。



図1. 南砺市と城端の位置
(南砺市役所ホームページより)

<http://www.city.nanto.toyama.jp/webapps/www/map/index.html>

¹河川が山地から低地に移り、流れがゆるやかになる所に堆積物が積もってできる扇形の地形。

²河川に沿う階段状の地形。川の浸食作用によりもとの河床が現在の河床より高い台地になっているもの。土地の隆起や水量の変化などにより生じ、その回数に応じて何段かの段丘を形成する。



図 2. 城端旧町と周囲の地形

(google map を使って作成)

城端の気候は、典型的な日本海側気候で、冬は寒く、降水・降雪量が多い。平均最低気温が 0 以下になる月もあり、山間部では最大積雪深が 3 メートルを超えることもある。また、旧町の周辺の農村地域では春先の強風、冬期の雪、夏の日差しを遮るために、敷地内に「カイニヨ」と呼ばれる屋敷林を持っている世帯が多い。

1-2. 人口と産業

次に城端の人口と産業の概要を見てみよう。

富山県の 2011 年 (平成 22 年) 8 月現在の統計資料によれば、南砺市全体の世帯数は 16980 世帯、人口は 58140 人である。このうち調査を行った城端地域の世帯数は 2776 世帯、人口は 9472 人で、南砺市全体に占める割合は、世帯と人口がそれぞれ 16.3 パーセントずつである。

城端地域の人口の 1920 年から 2005 年までの推移をそれぞれ図 3 に示した。1950 年代に人口が増加しているのは、城端町と周辺の^{じょうはなまち}大鋸屋村・^{おおがやむら}北野村・^{きたのむら}南山田村・^{たむら}蓑谷村、^{たにむら}福光町の一部と合併したためである。その後、1960 年代以降、人口は減少を続けている。

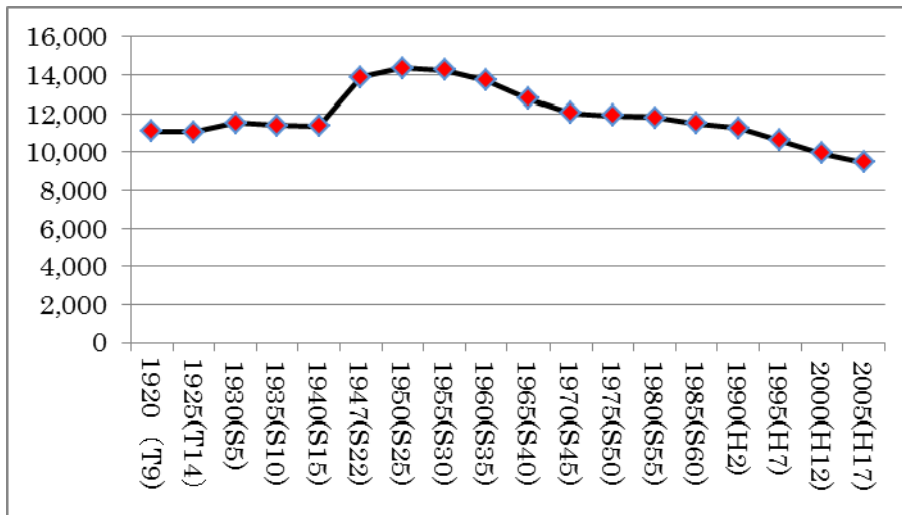


図 3 . 城端地域の人口の推移

(富山県ホームページ統計データ

http://www.city.nanto.toyama.jp/webapps/www/secfolder/johoseisaku/tokei_top.htm 2011 年 8 月 14 日閲覧をもとに作成)

近年の人口動態を詳しく見てみると、人口の継続的な減少に比して、世帯数はむしろ増加しており、一世帯当たりの員数が減少していることがうかがえる (図 4)。

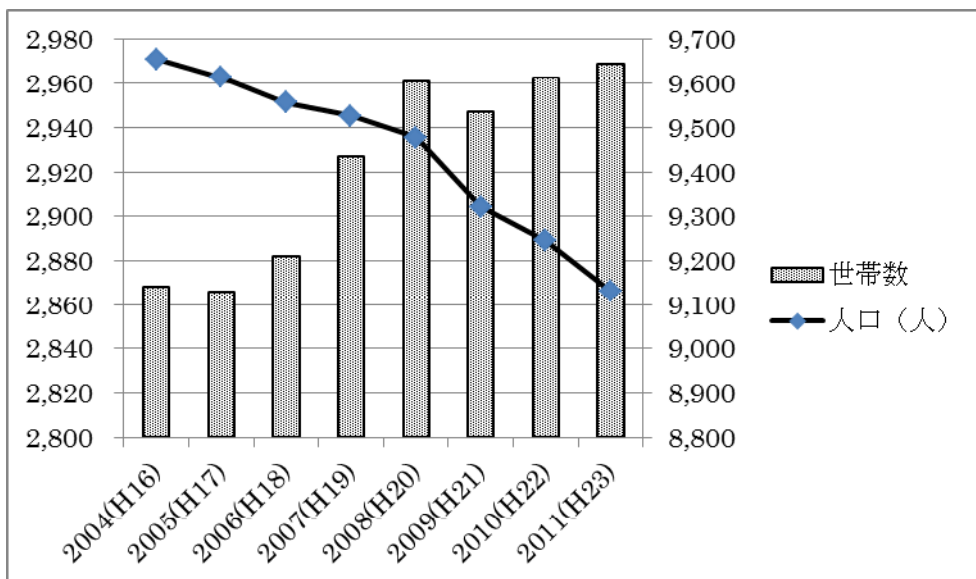


図 4 . 城端の人口・世帯数の推移 (2004-2011)

各年 4 月 1 日現在、H16 のみ 11 月 1 日現在

(南砺市ホームページ「南砺市の統計」

http://www.city.nanto.toyama.jp/webapps/www/secfolder/johoseisaku/tokei_top.htm 2011 年 7 月 29 日閲覧をもとに作成)

2011 年 (平成 22 年) 8 月現在の世代別人口を見てみると (図 5) 20 歳未満の人口

が全人口 9472 人のうちの 14.9 パーセントである一方で、65 歳以上の高齢者世代も 30.8 パーセントを占めており、いわゆる超高齢化社会である。また 0-64 歳までの世代では男女比にあまり差はないが、65 歳以上の世代では、高齢化を反映して女性の割合が男性の割合の 1.5 倍を占めている。

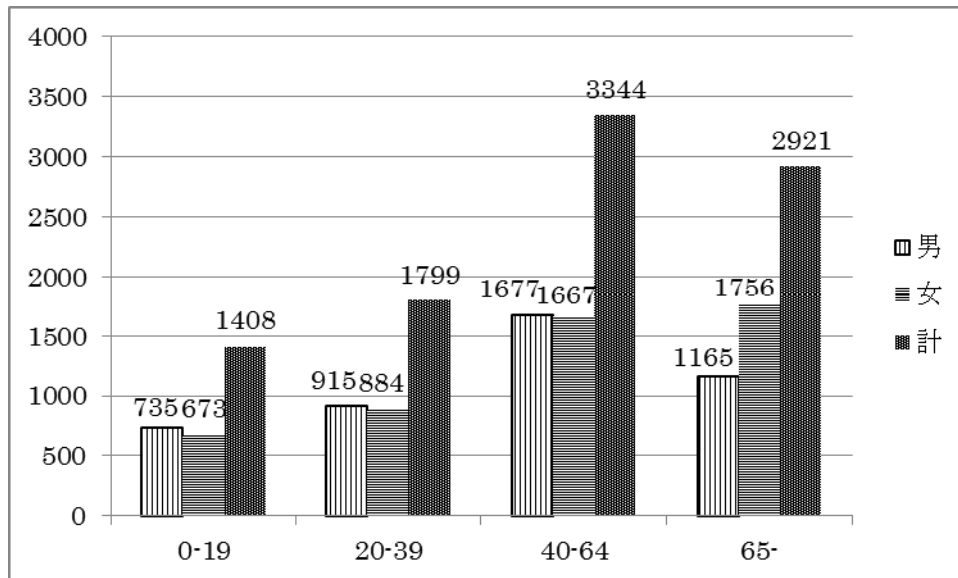


図 5．世代別人口構成

(富山県ホームページ統計データ

http://www.city.nanto.toyama.jp/webapps/www/secfolder/johoseisaku/tokei_top.htm 2011 年 8 月 14 日閲覧をもとに作成)

図 6 に城端の産業別就業者人口を示したが、第 2 次産業と第 3 次産業が全体の 9 割以上を占めている。

城端の第一次産業の就業者数が全体の就業者数に占める割合は 7.5%である (図 6)。就業者数は 385 人で、うち 381 人が農業に従事している。城端は「名水コシヒカリ」などの米の産地であり、ほかに干し柿や赤かぶなどの生産がさかんである。

第二次産業の就業者 2310 人のうち、最も就業者の多い業種は製造業で 1680 人が従事している。城端は、室町時代以降、伝統的に絹織物の産地であり、また、なれずし (アユやサケ、サバなどを用い、酢を使わず、米と塩、米麹などで発酵させて作られるすし、詳しくは第 7 章参照) といった独特の食品の産地でもある。しかし、1960 年代中葉まで 10 数軒あった絹織物工場は、現在は 2 軒までに減少している (詳しくは第 11 章を参照)。

第三次産業の就業者 2432 人のうち、卸売、小売業の従事者が最も多く 663 人、次いで医療と福祉が 490 人となっている。これは、城端は高齢者に対する施設や在宅サービスなどの充実を図る「福祉ゾーン」に指定されていて、介護施設などの福祉施設が多いためである。

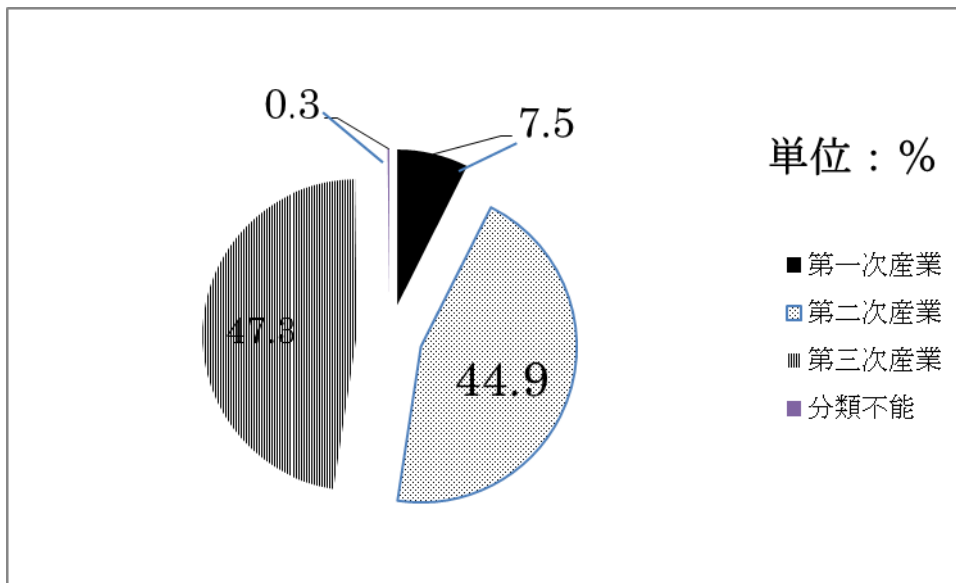


図 6. 城端町の産業別人口の割合

(富山県ホームページ統計データ

http://www.city.nanto.toyama.jp/webapps/www/secfolder/johoseisaku/tokei_top.htm

2011 年 8 月 14 日閲覧をもとに作成)

図 7 と図 8 に、城端の中心商店街である西商店街と東商店街の事業所数、従業員数、年間販売額の推移を示したが、いずれについても年々減少の傾向にある。商店街のなかには、年々、空き店舗も増えてきているという。

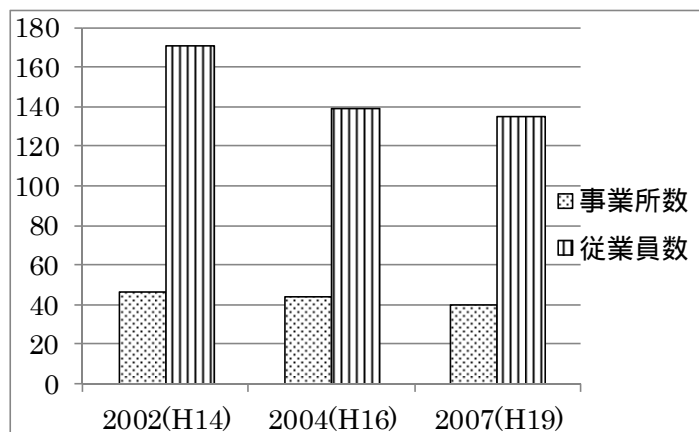


図 7. 城端西町商店街と東町商店街の事業所数と従業員数の推移

(南砺市商工課からのデータをもとに作成)

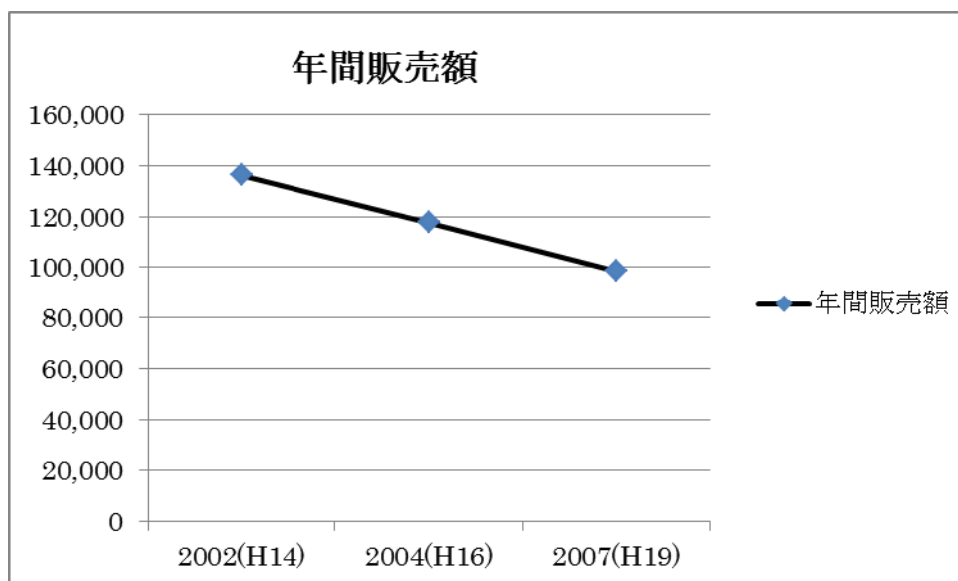


図 8. 城端西町商店街と東町商店街の年間販売額の推移
(南砺市商工課からのデータをもとに作成)

1-3. 歴史

城端の歴史について、かんたんに紹介しておきたい。室町時代の 1467 年、現在の善徳寺境内が存在するところに城ヶ鼻城が建てられた。東の池川、西の山田川が自然の要害になっており、守りやすく、攻め難い城であったと伝えられている。また、現在もそうだが、この善徳寺付近は南から北に突き出した天狗の鼻のように細長く、見晴らしのいい高台だったので、この土地のことを「城の建っている鼻」ということで「城ヶ鼻」(じょうがはな)と呼ばれるようになったと言う。

善徳寺は加賀国河北郡井家の庄砂子坂に創設され、その後、越中国法林寺、石黒の庄山本村と移転を重ね、1532 年ごろに福光村から城ヶ鼻城荒木大膳の招きにより現在の場所に移ってきた。この荒木氏は、おそらく当時の在地土豪だとされる。「城ヶ鼻」という地名はそれ以後使われなくなり、「城ヶ鼻善徳寺」と呼ばれるようになった。その後、さらに「越中城端善徳寺」と呼ばれるようになった。城端の町は、戦国時代末期の 1573 年(天正元年)にこの善徳寺の門前町として開かれた。

善徳寺の門前に開かれた町は、福光や井波方面、また五箇山方面より善徳寺へ参詣する通路となっていたため、江戸時代に入ると一ヶ月の間に 9 回の市が開かれる「九斎市」が行われるなど、市場町として発展し、1693 年には 700 軒近い家屋を擁するようになった。また、江戸期に入ると、加賀藩の下で絹織物生産が保護され、城端の主要産業と

して発展し、多くの絹商人を輩出した。

明治を迎えて、1889 年 4 月 1 日より市町村制が実施された。富山県は 2 市（富山と高岡）31 町 338 村に編成された。この時に、第 12 章で取り上げられる農村地帯の^{りきゅう}理休

地区が城端町に合併され、第 8 章で取り上げられる同じく農村地帯の^{これやす}是安地区は 1952 年の「昭和の大合併」で城端町となった。2004 年 11 月に「平成の大合併」により、城端町は、新たにできた南砺市の一部となった。第 9 章で詳しく報告するが、1990 年代半ばから城端町を貫いて通る国道 304 号線が拡幅され、また、同時に伝統的な町並みを意識した再開発が行われている。

1-4 旧町の概要

上述のように、城端町は 1573 年に浄土真宗城端別院善徳寺の寺内町として開かれ、市場町、門前町として発展した。本報告書では、この町の地域を農村部に対して、「旧町」または「町部」と呼ぶことにする。また、次章で報告することになる曳山祭は、町人の財力をもとに江戸時代享保年間に始まった祭礼であるが、この祭りに参加する 6 つの町は、現在の城端の住民の呼称にしたがって「6 町」と呼ぶことにする。ここでは、『城端町史』（城端町史編纂委員会、1969）と『城端曳山史』（城端曳山史編纂委員会、1978）に拠って、旧町の歴史についてやや詳しく触れておきたい。

永禄年間(1558～70 年)までに、善徳寺の門前に、上町と総称される西上町、東上町が誕生する。この上町は、福光や井波など砺波の他の地域から善徳寺への交通路にあたり、また、五箇山方面からの参詣のルールとともにあった。安土桃山時代には、上町の 2 つの町が六カ所に分けられて、六回市が開かれた。上町に引き続いて、その後下町も成立し、市が開かれ、城端は砺波平野の市場町としての地位を確立した。さらに、周辺の農村地帯からの来住者が増加して、いわゆる在郷町としても発展し、1693 年（元禄 6 年）には戸数 686 戸、人口 3809 人を数えている。慶安年間（1648-1651 年）頃には、大工町、新町、野下町、出丸町が誕生し、さらに周辺の西新田町、東新田町も城端に編入され、城端は、東上町、西上町、東下町、西下町、大工町、新町、野下町、出丸町、東新田町、西新田町の十カ町で構成されることになった（図 9）。この 10 町が本報告書で「旧町」と呼ぶ地域である。なお、この 10 町以外の農村地域は、城端では「里」と呼ばれている。

江戸期には新旧の町が城端を構成していたが、町の性格は均一ではなかった。1653 年（承応 2 年）の東上町と西新田町の町民の職業を比較してみると、もっとも古く開かれた東上町の 43 軒のうち、専業と兼業あわせて絹商売を営む世帯が 36 軒であるのに対して、西新田町の 125 軒のうち、もっとも多いのは兼業、専業あわせて 38 軒の農作であった。新しく城端に加わった西新田町は、いまだに農村の色彩が濃かったことがうかがえる。東上町、西上町、東下町、西下町は、他の 6 町が「散町」と呼ばれたのに対して「本町」と総称さ

れ、上層町人の居住地域として、曳山祭など城端の町民文化の中心的役割を担うことになる。曳山祭については次章で詳述されるが、1717年（享保2年）から、10町のうち東新田町と西新田町をのぞく城端神明社の氏子の8町の町民が、傘鉾（次章で詳述）を持って神輿渡御の行列を先導するようになり、曳山祭の原形が生まれた。その後、東上町、西上町、東下町、西下町、出丸町、大工町の「6町」がそれぞれ曳山を所有して、曳山祭が成立する。なお、新町と野下町は傘鉾行列には参加する。



図 9. 江戸期の城端旧町

(<http://heartland.geocities.jp/matsukurajyou/zentokuji/chusei.html>)

1-5. 城端の年中行事とイベント

城端では、年間を通して様々な行事やイベントが行われている。下の表は、このうち主なものをまとめたものである。

表 城端の行事とイベント

2 月	つごもり大市
4 月	城端しだれ桜まつり
5 月	城端曳山祭
7 月	虫干法会
9 月	城端むぎや祭
10 月	じょうはな・まるごと・まるかじり なんと彩菜まつり

南砺市のホームページなどに拠って、表の行事について紹介していきたい。ただし、曳山祭、虫干法会、むぎや祭については、後の章で詳しく述べられるため、ここでは省略する。

2 月に開かれる「つごもり大市」は、1661 年から続けられている行事である。江戸期から城端と城端の東に位置する五箇山との間では交易が盛んであった。山間地の五箇山からは和紙や絹を、城端からは米などの生活物資が運び出される。しかし、かつての五箇山地方は冬の間、雪のため閉ざされて、城端との通行ができなくなる。雪が融け、通行が可能になる二月末日に、年始の挨拶と精算のために五箇山から訪れた人々をもてなし、市が開かれる。これが、「つごもり大市」の由来である。現在では、地元商店街の特売セールや餅つきなどのイベントが行われるようになっている。

4 月の「城端しだれ桜まつり」は、毎年、城端別院善徳寺にある樹齢 350 年を数えるしだれ桜の開花に合わせて行われる。この時期には、善徳寺で格式のある門とされて、皇室や浄土真宗大谷家本山からの来訪がある場合を除いて、普段は開かずの門となっている「式台門」が特別に一般客に開門される。

10 月の「じょうはな・まるごと・まるかじり なんと彩菜まつり」は、参加者体験型のイベントである。城端の農産物を使った料理など、城端の自然や文化を体験できるイベントが多数開催される。平成 23 年度は 10 月 29 日と 30 日の 2 日間にわたって行われ、3 つの会場で 30 以上ものイベントが開かれた。

参考ホームページ URL

<http://www1.tst.ne.jp/manseido/saijiki/sakura.html>

『田村萬盛堂ホームページ』（2011 年 12 月 2 日閲覧）

<http://www.city.nanto.toyama.jp/webapps/www/info/detail.jsp?id=8477>

『南砺市役所ホームページ 城端地域 お知らせ』(2011年12月2日閲覧)

<http://www.city.nanto.toyama.jp/webapps/www/event/detail.jsp?id=1901>

『南砺市役所ホームページ 城端地域 イベント情報』(2011年12月2日閲覧)

2. 曳山祭

2-1. 曳山祭の概要

小山 彩恵

1. はじめに

この章では、城端で行われている曳山祭について報告を行うが、調査の報告に入る前に、祭りの概要について述べておきたい。ここでは、まず、曳山祭について概略を紹介し、その成立と展開について記述する。また、曳山と庵屋台（後述）を持つ6町については、それぞれの曳山と庵屋台について紹介したい。

2. 城端曳山祭

城端曳山祭は城端町の町人の財力を基盤に江戸時代の享保初期（1710年代）に成立し、今日まで300年近くの歴史を持つ城端神明宮の春祭りである。もともとは秋祭りであったが、明治の歴制改正を契機に5月の春祭りとなった。

祭りは曳山を持つ旧市街地の6町（東上町、西上町、東下町、西下町、出丸町、大工町）を祭りの主な舞台として行われる。城端曳山祭の特徴は、獅子舞、剣鉾、城端神明宮の氏子8町の傘鉾などが、春日・石清水、神明宮の三基の御輿を先導し、城端旧町の庵屋台と曳山がこれに続くという江戸時代からの古い神迎え行列の形式を現在も残していることである（図1）。車輪と鳴り板が擦れあって「ぎゅーぎゅー」という、城端で「きしりおん」と呼ばれる独特の音を響かせながら町を練り歩く曳山の様子から、城端の曳山は「ギユウ山」と呼ばれている。また「山宿」と呼ばれる御神像を飾る部屋や庵唄を聞く「所望宿」などの空間演出にも特徴が見られる（後述）。



図1. 曳山行列の様子

3. 城端曳山祭の成立と展開

城端町は京都との経済交流によって元禄文化を吸収し、城端で独自の文化へと発展させてきた。しかし享保期になると経済が不安定になりその打開ために神をまつり町内繁栄を願って始まったのが城端曳山祭である。

1717年に神輿がつくられ獅子舞や傘鉾の行列が始まり、1719年8月15日の祭りには曳山が完成し、1724年には神輿の渡御にお供をしたという記録が残っている。その後曳山祭は富山県内でも各地で流行を見せた。また安永年間に起こった曳山車騒動によって、城端町の曳山車の使用に制約が設けられると、人々は新しい御神像の制作や曳山や屋台の装飾に力を入れるようになった。元禄年間には江戸との交易が盛んになり、化政文化の影響も受けた。その結果城端独特の庵歌や庵屋台が整備され今日の曳山祭の素地ができた。

4. 曳山祭の概要

本節では、現在行われている城端曳山祭の日程や場所などの概要を紹介する。

4-1. 祭りの日程と場所

城端曳山祭はゴールデンウィーク中の5月4日と5日に行われる。2005年までは5月14日と15日に行われていたが、最近では曳山の曳き手を確保することが難しくなったため、2006年からはゴールデンウィーク中の5月4日と5日に期日が変更されている。

4-2. 4日 宵祭り

4日の宵祭りでは6町の御神像が山宿に飾りつけされ一般に公開される（写真1）。山宿についてはあとで詳しく記述することにする。18時から、御旅所で若連中によって庵唄が奉納され（写真2）城端曳山会館前の特設ステージでも庵歌の披露がある。



写真 1. 山宿の様子



写真 2. 庵歌奉納

4-3. 5 日 曳山祭

5 日の曳山祭では春日宮、八幡宮、神明宮の 3 基の神輿を先導して南町、野下町の獅子舞、新町の剣鉾、氏子各町の傘鉾、6 基の庵屋台と御神像を乗せた曳山はそのあとに続き、決められた順路にそって行列する。順行は大きく午前の順行、午後の順行、夜の順行の 3 つに分けられる。あらかじめ決められた所望宿では各町の若連中によって庵歌が披露される。

順行の途中には狭い路地や回転を行う箇所があり、各町の男性の腕の見せ所となっている。特に大工町の狭い路地を通るときの屋根の跳ね上げ（写真 3）や出丸町での曳山の回転は多くの人の目を集めている。



写真 3. 屋根を跳ね上げた竹田山

日が落ち、提灯がともされ「提灯山」となった曳山と庵屋台（写真 4）は、午後 10 時にはすべての所望宿での所望と巡行を終える。その後各町の庵屋台、曳山が城端庁舎前に勢ぞろいしたのち、各町へと帰って行く。これを「帰り山」という（写真 5）。



写真 4. 提灯山



写真 5. 帰り山

5. ^{やまやど}山宿

「^{やまやど}山宿」または「山番」というのは、5月4日の宵祭りの晩に御神像を預かって座敷でお飾りをして一般に公開する家のことである。また山宿でご神像を飾りつけて公開することを「飾り山」という。山宿では御神像に御神酒や赤飯を備え、部屋の両端には屏風をめぐらし、香りのよい朴の木や牡丹や藤などの季節の花が飾られる（写真4）。こうした山宿の飾りつけは「山宿のしつらえ」という。

山宿の主人をつとめることは一生に一度の名誉であるとされ、以前は相当の資産家でなければ山宿を任されることはなかったが、近年では一般の家庭によって持ち回りで担われている。山宿の条件としては、間口が広く奥行きが深い書院造の座敷であることが望まれている。

また山宿の準備には家族全員の協力が必要であり、立派に山宿のしつらえを果たすことは主人と家族にとって誇りでもあった。現在でも山宿を引き受けることになった家では宵祭りの夜に親戚知人を招いて祝宴を開く人が多い。

5-1. 山宿の準備

山宿を行うことになった家ではその主人を中心に少なくとも一年前からしつらえの準備に取りかかる。御神像をお迎えするために、山宿を行う家では奥行きのある座敷を確保し、畳を張替え、祭りの本番に飾る花やその花瓶、屏風や掛け軸を準備する。なかには部屋の奥行きを確保するために玄関を前にせり出すなどの突貫工事を行う家もある。しつらえの際には照明の向きや明るさ、生ける花の種類や花瓶の色や柄にいたるまであらゆる面に細心の注意がはられる。山宿のしつらえは山宿の主人の志向によるところが大きく、完成した山宿はどれも個性的である。こうしたしつらえのための費用は山宿を行うことになった家が負担する。

4日と5日の両日は、山宿にご神像を保管しているので特に火元に注意し、山宿の主人は寝ずの番を行う責任がある。最近では町内の公民館を利用して山宿を行うところもあり昔ほどの気苦労や出費は少なくなったという。

5-2. 山宿の順番

その年に山宿をつとめる家の決め方は町内によって異なる。一般的にはその町が六番山（順行の最後尾）をつとめた年に、翌年以降の一番山から六番山までの山宿をあらかじめ決めておく方法をとることが多いようだ。予定されていた家が事情によって山宿を行うことが不可能になった場合には、順番を繰り上げるか別の家に担当をお願いするなどして対応する。町内によっては10年先頃まで山宿の順番を決めているところもある。山宿の主人は主にOBのなかから選ばれるが、近年では城端町の戸数の減少の影響もあ

り、若連中から選ばれることもある。なお山宿の主人の依頼や決定は、二年ごとに持ち回りの区長を中心に行われる。

5-3. 町内山宿

近年では旧町の人口が減少したことによって山宿の確保に苦労している町内もある。その年に山宿を確保できなかった町内ではしつらえの費用を町内で折半し、公民館などで飾り山を行うことがある。これを町内山宿という。町内山宿の場合にはしつらえのための費用が山宿の主人一人に集中することはない。また公民館を会場とするため準備のための出費も抑えることができる。

6. 庵歌所望

庵歌とは各町の若連中によって演奏される端唄の一種である。演奏は三味線、笛の囃子方と唄方によって行われる。祝儀を出して庵歌を所望した宿では座敷に居ながら6か町の庵歌を楽しむことができる。これを庵歌所望という。所望した家では親戚知人を招き、簾を巻き上げて庵屋台を待ち受ける(写真5)。6か町の庵屋台が次々に所望宿に横づけになり、各町の選定した庵歌の歌詞を書いた短冊を渡し、庵歌を披露する。庵歌所望は座敷に居ながらにして料亭に遊ぶ気分にあたることができるという先人の遊び心から生まれたものであるとされている。また庵屋台の進行中に演奏する、まわりあい、先囃子、休憩中に演奏される休み囃子や、御旅所まで神輿を迎えに行く際の本囃子は城端独特のものである。



写真 5. 所望宿の様子

7. 組織

城端曳山祭の運営は、各町の男性で組織される曳山連合会、庵連合会と城端神明宮敬神会が中心となっていく。以下にはそれぞれの組織の概要や役割を詳しく記述したい。

7-1-1. 庵連合会

庵連合会は、若連中と呼ばれる高校卒業から 42 歳までの 6 町の男性によって組織されている。町内によっては人数の確保のため年齢の上限を緩和しているところもある。また近年では城端旧町に暮らす男性だけでなく、町外からも囃子方として祭りに参加している人もいる。各町の若連中はそれぞれ、西下町は諫鼓共和会、西上町は恵友会、東下町は宝槌会、出丸町は布袋会、大工町は冠友会、東上町は松声会と称している。

7-1-2. 若連中の役割

若連中は主に庵屋台の管理を担当している。祭りが近づいてくると若連中は、各町内で決められた練習場で祭りの本番で披露する庵唄の稽古を行う。祭りの運営費や諸経費を町内から集めることや曳山運行のための各方面への手配の多くが若連中によって行われることになっており、祭りの運営面における若連中の責任は大きい。また庵唄所望の手配はその年に当番山を引き受けることになった町の若連中に任されている。4 日の宵祭りとは 5 日の本祭では練習してきた庵唄を各会場で披露する。

7-2. 曳山連合会

曳山連合会は主に庵連合会を卒業した男性によって組織されており、町内によって異なるが、OB と称されることが多い。所属する男性の年齢や人数は町内によって異なるが、主として 50 代から 70 代の男性を中心に 20 名から 30 名程度である。

7-2-1. OB の役割

OB は主に曳山と御神像の管理を行う。また 5 日の本祭りの日に曳山と庵屋台を曳く曳き方（人足）の確保も行う。またその年に山宿を行う家を決め、引き受けてくれるように頼みに行くことも重要な役目である。このように曳山連合会に所属する OB は曳山祭運営の中心的な組織であるといえる。祭りの本番では紋付袴姿で曳き方によって曳き回される曳山の周りを練り歩く。

7-3. 城端神明宮敬神会

御輿渡御をはじめとする神明宮の祭礼神事を執行する。昔は町の有力者からなる五人の氏子総代が中心であった。もともとは 1907 年に神社維持費の確保を主目的として敬神会が組織されたのが始まりである。

8. 各町の傘鉾、曳山、庵屋台

曳山会館が開設された 1982 年以来、6 町のうち 3 町の曳山と屋台は隔年で展示されている。曳山会館に展示されている町以外の曳山と庵屋台は各町が持つ山蔵に収納されている。

8-1. 傘鉾

下の写真は各町の傘鉾の行列の様子である。傘鉾は、神霊をお招きする依り代で、各町によって傘の上の装飾が異なっている。それぞれの町の粧物については、曳山と庵屋台の特徴と合わせて以下にまとめた。



写真 6. 傘鉾行列の様子

8-2. 城端曳山の構造

曳山の構造はほぼ共通しているが、上部の構造や装飾には各町それぞれに特徴がある。曳山は地山と呼ばれる基礎枠に長柄と四輪の大八車を取り付けられている。

地山の上には雛台を乗せ、雛台の後ろの上段には御神像を飾る。雛台の四隅にはそれぞれ柱が立てられており、鏡天井を張った屋根が支えられている。また雛台は四周に勾欄がめぐらされている。地山、雛台、後屏には彫刻で細工が施され漆塗りで仕上げられている。城端の曳山は大工仕事をはじめ、彫刻や装飾にいたるまでそのすべてが城端町の人々の手によって作られているところに特徴がある。以下では各町の曳山と庵屋台、御神像と傘鉾の特徴を紹介する。



西上町

竹田山

西上町の曳山は恵比寿像を安置する竹田山である。他の町の曳山に比べると、比較的城端曳山の原型を保っている。装飾は水波文様や恵比寿の紋の蔓柏つるかしわのデザインが多く使われている。

庵屋台

西上町の庵屋台は京都祇園の一力茶屋を模したものと伝えられている。今の庵屋台は、京都の料亭を模した数寄屋造りである。

傘鉾

神霊をお招きする傘の上には、争鈴と玉手箱が三方の上に乗せられている。水引幕は紫地に恵比寿の象徴である蔓柏紋が染め抜かれている。

東下町

東耀山

東下町の曳山は大黒天像を安置する東耀山である。装飾は大黒天にちなんで、宝珠、宝くずしの文様が多い。見返し部分の高肉レリーフは、二代目荒木和助の作品である。

庵屋台

東下町の庵屋台は平屋二階建て二棟構えの数寄屋づくりで、庵屋台の腰廻りは格子造りの構造となっている。

傘鉾

神霊をお招きする傘の上には、大黒天にちなんで打ち出の小槌が飾られている。水引幕は青色地に宝くずし文様が染められている。



出丸町

からこやま
唐子山

出丸町の曳山は布袋像を安置する唐子山である。以前は高砂山と称され、尉と姥を安置していたが 1762 年に布袋山に改められた。彫刻、金具などの装飾は唐子遊び、宝くずしなどの文様が多い。

庵屋台

出丸町の庵屋台は平屋建て、二棟構えの数寄屋造りで、庵と水引幕の間には簡素な欄間をはめ込まれている。

傘鉾

神霊をお招きする傘の上には、将棋盤に柳、傘の中には冠に蛙のつくりものが飾られる。水引幕は赤色地に柳、蛙、波文様が染められている。

西下町

かんこやま
諫鼓山

西下町の曳山は堯王像を安置する諫鼓山である。屋根幅を縮める際に、6 基の曳山のなかで、この曳山だけが軒をせり上げるといって特異な構造を持っている。

庵屋台

明治 22 年に新調されたもので、数寄屋造りの二階建てで、主屋、離れ二棟の料亭を模したつくりとなっている。

傘鉾

傘の上には金の鶏に岩波の彫刻が飾られている。水引幕の上部は朱色、裾は雲形模様染め分けられており、水引幕の中央には三つ巴紋が染め抜かれている。



東上町

つるまいやま 鶴舞山

東上町の曳山は寿老像を安置する鶴舞山である。明治40年には城端で最も大きな矢車を新調し、鶴舞様式の金具をつけ、塗装を施すなど、大幅な改造がなされた。さらに明治45年には、屋根も豪華な二重構造に改造され、その高さは6.52メートルとなった。

庵屋台

江戸の料亭を模したもので、新吉原の大文字屋、鶴屋、扇屋、玉屋の暖簾が庵の入り口にかけてある。庵屋台の高さは3.45メートルある。

傘鉾

傘の上には金の鶏に岩波の彫刻が飾られている。水引幕の上部は朱色、裾は雲形模様染め分けられており、水引幕の中央には三つ巴紋が染め抜かれている。

大工町

せんまいぶんどうやま 千枚分銅山

大工町の曳山は関羽と周倉像を安置する千枚分銅山である。他の曳山のように長年にわたる増補、改造の積み重ねではなく、一貫した設計にもとづいて作られているため全体の設計に無理がない。

庵屋台

大工町の庵屋台は平安貴族の在原業平の別荘を模した庵屋台で、庵の周りには鴛鴦（おしどり）とかきつばたのつくりものを配している。

傘鉾

傘の上には木製張子細工の千枚分銅山が飾られている。また水引幕は紫地に千枚分銅とかきつばた文様を白抜きに染めている。

以上、城端曳山祭について概要を見てきた。次の章では曳山祭に参加する 6 町のうちのひとつ、大工町での現地調査にもとづいて、祭りと地域住民との関係について記述し、考察してみたい。

2-2. 曳山祭を支える人々

小山 彩恵

1. はじめに

事前調査で初めて城端へ行ったときに、私は城端という小さな町にどのようにして曳山祭が成立し、今日まで住民の手によって支えられてきたのだろうかということに興味を持った。一般的に、祭りの運営には費用面や人手の確保などの面で、大きな負担がかかると言われている。城端の曳山祭においても祭りの運営や維持には多くの費用と人手が必要であり、その費用の多くは町内で負担している。なかでもご神像を安置するため

の山宿^{やまやど}のしつらえには多くの費用がかかる。このように曳山祭を支えていく上では多くの苦労がともなう。それにもかかわらず、住民はなぜ祭りに参加し、祭りを支えていこうとするのだろうか。また、住民や祭りに携わる人たちは、祭りのどこに楽しさを見出し、どのような思いで祭りに参加しているのだろうか。

以上のような疑問を抱いた私は曳山祭に参加する 6 町のひとつである大工町の祭りの準備や練習に参加して聞き取りを行い、住民と祭りの関わりについて調査を行った。この報告では、はじめに大工町における曳山祭の準備祭り当日までの流れについて、3 月上旬から 5 月の祭りまでの調査をもとに記述する。次に、住民の語りをもとにして、祭りを支える人たちが祭りをどのように認識して参加し、どのように祭りを支えているのかについて考察を行う。

2. 大工町の概要

大工町は、城端駅から南に歩いて 10 分ほどの場所に位置している。金沢と五箇山を結ぶ国道 304 号線の西側と、その裏路地に面したところにある小さな町である。また曳山と庵屋台を持つ 6 町のなかで、最も世帯数が少ない。

2-1. 大工町の曳山と庵屋台

大工町の曳山は関羽と周倉^{しゅうそうぞう}像を安置する千枚分銅山^{せんまいぶんどうやま}である。享保年間につくられた原作は、1898 年の大火で消失したため、1906 年に復元、再造された（図 1、写真 1）。

構造は輻車^{やくるま}の車輪、四方唐破風の屋根で天井は平天井になっていて、高さは約 6.34

メートルである。他の 5 基の曳山のように長年にわたる増補、改造の積み重ねではなく、一貫した設計にもとづいてつくられているため全体の設計に無理がないのが特徴である。

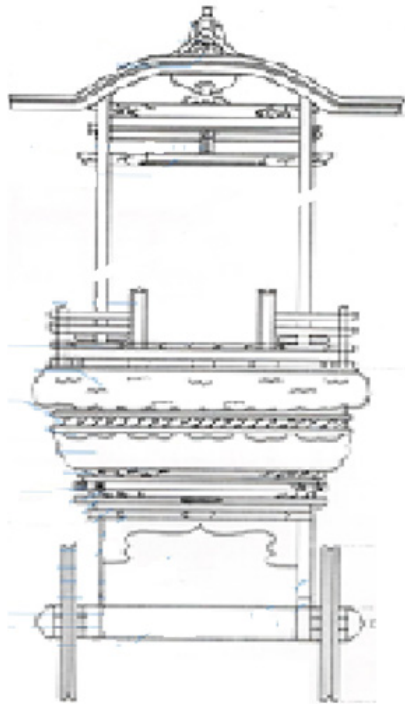


図 1. 千枚分銅山の模式図



写真 1. 千枚分銅山

大工町の庵屋台は、原作が 1898 年の大火で焼失したため、1908 年に再建されたものである。図平安貴族の在原業平の別荘を模した構造になっている。(図 2、写真 2) 前後の庵は橋で結ばれ、その周りにはおしどりとかきつばたのつくりものを配している。他の町の庵屋台が江戸時代の青楼^{せいろ}を模した数寄屋造りであるのに対し、大工町の庵屋台は、平安の王朝文化の寝殿造りを取り入れたつくりとなっているのが特徴である。

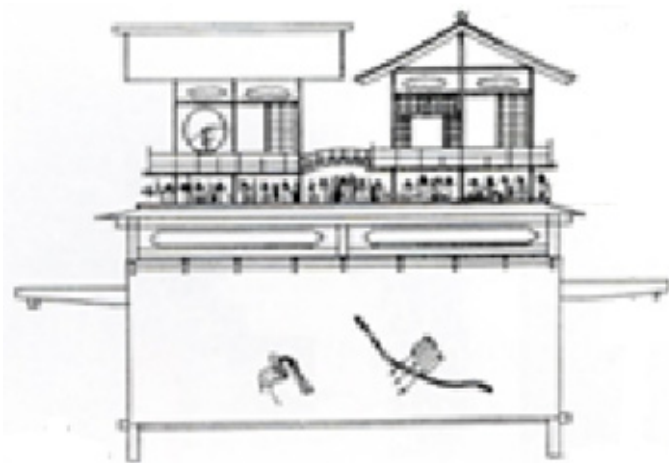


図 2. 庵屋台の模式図



写真 2. 庵屋台

3. 大工町における祭りの組織

大工町では、男性で組織される曳山連合会と庵連合会が祭の運営の中心となっている。

3-1. 曳山連合会

大工町の曳山連合会は、庵連合会を引退した 40 代後半から 70 代の男性を中心に組織されており、日常的にはたんに「OB」と呼ばれている。この OB の多くは山宿の主人をつとめた経験のある男性であり、主に曳山と御神像の管理を役割としている。今年は大工町の曳山が修復作業のため解体されていたため、その組み立て作業も OB によって行われた。山宿のしつらえの際に、御神像を組み立てるのも OB の仕事である。また大工町の OB の間には、主に曳山に携わる人、御神像の組み立てに携わる人といったように、暗黙のうちに役割分担がある。祭りの当日は、OB たちは紋付姿で、曳山の順行を見守る。

3-2. 庵連合会（^{かんゆうかい}冠友会）

大工町の庵連合会は、「冠友会」と称している。この呼び名は、大工町の庵屋台が在原業平の別荘を模しており、屋台のなかに冠のミニチュアが置かれていることにちなんでいると言う。大工町の若連中は現在 20 名前後で、大工町以外に住居を構えている人も多く参加している。大工町の若連中は他の町によりも比較的メンバーの平均年齢が低いのが特徴である。

大工町の若連中は主に庵屋台の管理を担っており、その組み立てを行うのも若連中の仕事である。祭りの本番では他の町内と同じく紋付袴姿となり、所望宿や山宿で庵歌を

披露する。

3-2-1. 庵歌の練習とその雰囲気

祭りが近づくと、大工町の若連中は練習場でその年に披露することになった庵歌の練習を行う。庵歌の練習は桂湯というかつて銭湯であった建物で行われている(写真3)。若連中は、それぞれの仕事を終えて、夜、20時の前ごろから練習場へ集まり始める。練習は22時ころまで行われる。大工町には唄や三味線の師匠がいないため、若連中のメンバーどうしが協力し合って、それぞれが自主的に練習を進める。

3-2-1. 町まわり

練習の最終日には、稽古の総仕上げとして町まわりが行われる(写真4)。町まわりでは若連中は夜回り囃子を奏でながら、大工町を出発し曳山を持つ6町を一周する。町まわりの途中に他の町の練習場に立ち寄ると、稽古をいったん中断したその町の若連中が顔を出し、互いに練習の苦労をねぎらい合う。通りには若連中の夜回り囃子を聞きつけて家から顔を出した女性や子どもの姿もあり、若連中の演奏に耳を傾ける。40代のある女性は「(町まわりがあると)いよいよ祭りやなあという感じがする」と嬉しそうに話していた。若連中の町まわりによって、町の人たちは春祭りが近づいたことを知るのである。



写真 3. 桂湯



写真 4. 町まわりの様子

3-3. 大工町の OB と若連中の特徴

以上、大工町の祭りの組織を曳山連合会と庵連合会に大きく2つに分けて紹介した。大工町の祭りを運営する組織の特徴としては、OBと若連中で、祭りにおける役割が比較的是っきりと分かれていることだろう。町によっては若連中の人数が足りず、OBが若連中に交じり、唄方や三味線の助っ人を行っているところもある。しかし大工町では現在大工町以外に暮らす人や、若連中として参加している人の紹介で新たに囃子方、唄

方に参加するようになった人がいるおかげで、若連中の人数は少ないながらも確保されている。そのため大工町は、6町のなかで最も世帯数が少ないにも関わらず、OBと若連中がそれぞれ独立しながら祭りの運営に携わり、その役割を果たすことができているのである。

4. 平成 23 年度城端曳山祭

ここでは平成 23 年度の曳山祭の概要を紹介する。

4-1. 平成 23 年度の祭りの概要

平成 23 年度の城端曳山祭の順行の順番、山宿、飾り場所と御神像、各町の庵唄とその会名は公開されている（表 1）。なお今回調査を行った大工町は、平成 23 年度曳山祭においては、最後尾にあたる六番山をつとめた。

表 1. 平成 23 年度の曳山祭

順番	町名	山宿	飾り場所 (御神像)	庵唄 (会名)
竹田山 (一番山)	西上町	勇崎博志	諸木 宅 (恵比寿)	手鏡に (恵友会)
東耀山 (二番山)	東下町	町内山番	吉村甚正 (大黒天)	雪巴 (宝槌会)
唐子山 (三番山)	出丸町	高橋貞二	出丸町公民館 (布袋)	五月雨 (布袋同志会)
諫鼓山 (四番山)	西下町	今井 治	西下町公民館 (尧王)	沖の瀬に (諫鼓会)
鶴舞山 (五番山)	東上町	池田 聡	池田 宅 (寿老人)	宇治茶 (松声会)
千枚分銅山 (六番山)	大工町	稲場邦夫	長田伸介 宅 (関羽・周倉)	辰巳 (冠友会)

4-2. 順路図

平成 23 年度の曳山祭における曳山と庵屋台の順路は図 3.のとおりである。途中所望宿では各町の若連中によって庵歌が披露される。所望宿に控える宿の主人や所望を聞くために集まった人たちは、一様に若連中の演奏に耳を傾けていた。所望が行われている最中も他の町の曳山は次の所望宿へと移動するため、所望宿では、庵歌の演奏と曳山が軋む「ぎゅーぎゅー」という音とが重なって聞こえる。

庵歌の所望は午前中に 12 か所、午後に 15 か所、夜に 14 か所で行われた。

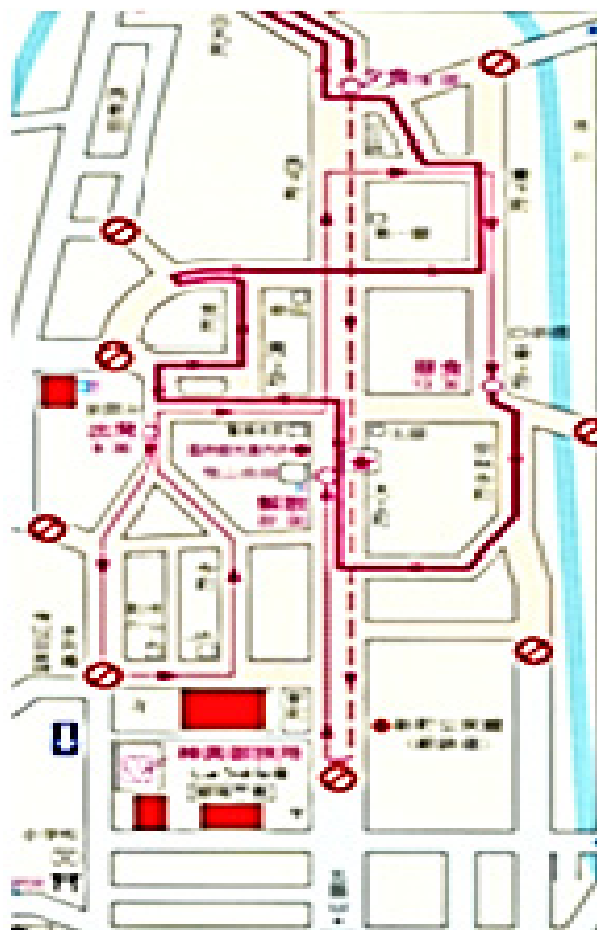


図 3. 順路図

5. 大工町における曳山祭の運営

各町の若連中による町まわりも終わり、ゴールデンウィークに入ると町の男性を中心として祭りの準備が開始され、城端町全体で曳山祭の訪れが感じられるようになる。5月2日には、他の町の山蔵で保管されていた大工町の屋台が大工町の山蔵に搬入された。5月3日には4日に迫った宵祭り、5日の曳山祭に向け各町内で本格的な準備が始まった。以下では5月3日と4日の祭りの準備について、山宿のしつらえとそれと並行して行われた曳山や庵屋台の組み立てや準備の様子について記述する。

5-1. 5月5日の午前中

大工町の山宿では御神像を迎えるため、しつらえが開始された。作業は山宿の主人やその親類、山宿を行う座敷を貸すことになった家の主人やその家族、町内の人の協力によって中心行的に行われた。

御神像が安置される座敷は生活用品がすべて撤去され、前日までに念入りに掃除されていた。普段は生活空間を仕切っているふすまは外され、座敷の間口から奥までの3部

屋をひと続きの座敷にする。

普段使っている照明器具は取り外され、部屋の 6 か所に山宿の空間演出のための照明が新たに取り付けられた。照明の電球は手前から 100 ワット、300 ワット、500 ワットの 3 種類が使われ、部屋の手前から奥に向けて明るくなるように工夫される。こうすることによって空間に奥行きを持たせ、立体感を出すことができる。さらに、室内により荘厳な雰囲気を持たせるために、御神像に影ができにくいように、照明の向きに細心の注意がはられている。

照明の設置が完了すると、座敷の奥にある窓をすだれでおおい、家の裏手が見えないように目隠しがなされる。同じころ、しつらえに使う屏風が山宿に準備される。

午後には座敷全体に、山宿のために新調した特注の上敷きがひかれる。以前はしつらえのために畳を新調する家も多かったが、最近では上敷きを敷く宿も多い。夕方には、予定された作業がすべて完了した。

5-2 . 5 月 4 日の準備

4 日は夕方に迫った宵祭りの準備のため、前日に引き続き朝の 9 時から山宿のしつらえが開始された。午前中には前日に敷いたばかりの上敷きの上に、壁つたいに屏風が立て掛けられ、屏風止めで固定される。また山宿の正面にあたる間口部分の窓と格子が取り外された。山宿や所望宿以外の家でも家の正面に家紋が染め抜かれた幕がかけられた（写真 4）。

午後の準備は 13 時過ぎから開始され、15 時から山宿を飾るために花が生けられた。たいていの町内では花は花器ひとつに生けられるが、大工町ではその日の朝に取ってきたばかりの朴の木を使ったものをひとつと、はぜ、かきつばた、シャクヤクの 3 種をいけたものの 2 種類が準備された。

山宿の内部では同時進行で御神像の組み立ても開始された。御神像は普段は解体されて保管されており、組み立ては町内の OB によって行われる。組み立て中の御神像は外から見えないようについたてが立てられ、その内部で 7 人ほどが作業を行う。組み立ては 1 時間ほどで完成し、御神像の位置や向きを調整し安置されたあと、目隠しのためのついたてが外される。その後、御神像の周りに赤飯やお神酒のほか、様々な装飾品を飾りつけ、山宿の間口の付近を竹で囲い、山宿の準備は 16 時ころに完了し（写真 5） 17 時頃から一般客に公開された。



写真 4. 各家の様子



写真 5. 大工町の山宿

5-2-1. しつらえの雰囲気

山宿のしつらえでは山宿の主人が中心となり、その家族や町内の男性の協力によって行われていた。これに対して、女性は花を生け、座敷や玄関の掃除をする以外はしつらえには関わっていなかった。また御神像の組み立てや配置などは OB のなかでも特に年配の限られた人数の男性によって行われていた。御神像の顔の部分を組み立てる人はマスクをして御神像に息がかからないように配慮していた。

しつらえを行う OB の男性は時折、たがいに曳山祭の思い出を語り合うなど、終始、和やかな雰囲気で作業を進めていた。女性は女性どうして集まり、談笑している場面が見られた。また、しつらえを行っている山宿には絶えず近所の人が顔を出し「山宿けえ。ああ、たいへんやなあ」、「立派な朴の木やなあ」と口々に言いながら山宿のできを確かめていた。住民は完成した山宿を見て、曳山祭の到来をまざまざと実感するのである。なかには山宿の立派なしつらえを見て、見物客を意識するのか、「うちもちょっこお、掃除せんなんな」とほうきでいそいそと玄関を掃く主婦の姿も見られた。

5-3. 宵祭り

各町の山宿のしつらえが完成し一般に公開されると、住民や観光客は思い思いに山宿めぐりを楽しむ。山宿は各町 6 か所にあるが、1 時間もあればすべての山宿を鑑賞することができる。各町の曳山と庵屋台は、宵祭りの間決められた場所に展示され、ライトアップされた。観光客はそれぞれの曳山の細かな彫刻や庵屋台の巧みな細工と、屋台を囲むようにたられた水引幕にぐっと顔を近づけ鑑賞していた。

18 時から、御旅所である「伝統芸能会館じょうはな座」で 6 町の若連中によって庵唄が奉納され(写真 6)そのあと城端曳山会館前特設ステージでも庵唄が披露された。ステージに集まった人々は夜の城端町に響く若連中の庵歌に耳を傾けていた。



写真 6. 庵唄奉納

5-4. 宵祭りの終わり

22 時には観光客も減り、静かになる。山宿では、山宿の主人とその家族や親類縁者が集まって御神像を囲んで、記念撮影を行っていた。曳山と庵屋台は町の男性によって大工町の山蔵へ搬入された。23 時頃には目隠しの布を施された御神像の前に主人が眠るための布団が敷かれた。主人は一晩を御神像とともに山宿で過ごし明日の曳山祭を迎えることとなる。

5-5. 5 日午前の巡行

5 日は朝の 7 時半から大工町の山蔵前で曳山と庵屋台の準備が開始された。昨日屋台につけられていた提灯は取り外され、若連中 7 名ほどで今年新調されたばかりの水引幕が取り付けられた。

8 時に、周辺の農村部から集まった「人足」と呼ばれる 40 名近くの曳き方によって、曳山が曳山会館から出された。8 時半頃には曳山が大工町の山宿に到着し、OB が中心となって御神像を曳山に乗せる作業が行われた。奥に安置される関羽、手前に安置される周倉の順に曳山に御神像の安置が完了したのは 9 時ころである。また、夜の所望に向けて山宿のなかでは花を活けなおす作業が行われた。9 時半には別院前に各町内の曳山が集合し、午前中の曳山の運行が開始された。

12 時 15 分ころに一番山の西上町が午前の巡行を終え、昼の休憩に入った。大工町も 12 時 40 分ころに午前の巡行を終えた。その後 13 時半ころまで昼食休憩が取られ、大工町の山宿の主人や曳き方、裁許は婦人会が準備した昼食を食べながら談笑を楽しんでいた。

5-6-1. 曳き方にとっての曳山祭

大工町の曳き方には里から集めた人のほか、綱引きチームのメンバーも参加している。曳山の前の部分はベテランの男性が引き受け、後方には綱引きのメンバーを中心とした

比較的若く経験の浅い男性が分担することになっている。これらの曳き方の人々は前述のように「里」と呼ばれる周辺の農村地域から祭りに加わっている。彼らは、なぜ曳山祭に参加するのだろうか。

60 代の曳き方の男性は「7 から 8 年来ている。曳くのは楽しい」と語り、福光からやってきたという別の 60 代の男性は「平成 10 年から 13 年引いている。(夕方になって)さすがに疲れてきた。毎年来るのは、山が好きやからに決まっとる」と大工町の曳山を眺めながら笑顔で話していた。また去年初めて曳き方として祭りに参加したという 70 代の男性は「去年初めて曳きに来た。回転が面白い。体が丈夫なら、毎年来たい」と言う。

これらの語りから分かるのは、これらの人々は曳山を曳くこと自体を楽しんで、祭りに参加しているということである。また、一度、その楽しさを味わうと、続けて参加するようになるということも語りからうかがえる。

5-6-2. 曳き方から見た祭りの変化

長年曳き方として祭りに参加してきた男性に話を聞くと、以前の曳山祭と現在の曳山祭の変化についての語りが得られた。

10 年以上曳き方として祭りに参加している 70 代の男性は「昔は止まらずに、勢いと流れでまわっていた。動きながら遠心力で回すもんや。若いときは、『とめるなー』って言われた。それが大工町の特徴だった。迫力があってよかった」と昔を思い出しながらしみじみと語った。かつて曳き方として参加していたという 80 代の男性は、「昔は出丸の(曳山)を曳いていた。山(曳山)8 年、屋台(庵屋台)3 年。今はまわらん。だめやな。昔ほど、勢いない。昔はもっと気を張って曳いていた。中心は動かさんように回すもんや」と各町内の曳山の回転を見ながら、やや残念そうに昔を思い出していた。

現在の曳山祭では、以前ほど豪快な回転は見られなくなったという語りは、若連中や OB などをはじめとする大工町の住民からも聞かれた。最近の慎重な曳き回しは、曳山を文化財として保護していこうという近年の動きに関係しているようである。豪快な回転は曳山の車輪に大きな負担がかかるために、最近では車輪に負荷のかかる回転は控えるようになったのである。しかし、上の語りのように、以前の迫力のある豪快な回転を望む声は少なくない。

5-7. 午後の巡行

13 時から一番山の西上町の巡行が再開された。大工町はそれから 30 分遅れの 13 時半から午後の巡行を開始した。14 時には大工町の路地での豪快な 180 度回転が行われ、観光客の注目を集めていた。また 16 時には西下の坂での回転、16 時 45 分頃には出丸町付近での回転がそれぞれあり、曳き方の掛け声と裁許の拍子木の音が響いていた。

17 時 50 分にはあたりは暗くなり始めた。各町内の若連中と OB は、それぞれの曳山と屋台に提灯を取り付ける。ここで 6 基の曳山は「提灯山」になる。作業が完了した町

から順に夕食休憩に入った。大工町は 18 時 10 分ころから夕食休憩に入った。

19 時前に 1 番山である西上町の曳き方、若連中、OB が集合し、「提灯山」となった 6 基の曳山は夜の巡行を開始した。大工町は 19 時半に巡行を開始した。

5-8. 帰り山

22 時 10 分には最後の所望が終わり、22 時 20 分から 6 町の曳山は帰り山となった。帰り山では各町内の山宿の主人が曳山の中央に堂々と鎮座する。屋台と曳山が一番山から順に御旅所の前まで進み最後の 180 度回転をする。その後それぞれの曳山と庵屋台は各町内の山蔵へと帰って行く。

大工町の曳山は 23 時頃に最後の回転を終えた。2 体の御神像を山宿に安置するため大工町の曳山はいったん山宿へ向かい、関羽と周倉の御神像を山宿におろしたあと山蔵へ搬入された。庵屋台も曳山とともに山蔵に搬入された。23 時 45 分にはすべての作業が完了し、山宿の主人は昨晚と同じく山宿で就寝した。



写真 7. 帰り山

5-9. 祭りの片付け

6 日は朝から曳山祭の片付けの作業が行われた。9 時頃から山宿では、照明が外され、2 体の御神像が解体された。解体された御神像はもとあったように箱に納められ、山蔵へと収納された。屏風や掛け軸も取り外され、二日間飾られていた花は近所に分けられた。座敷にしつらえられていたものをすべて片付けたのちに、山宿の主人が中心となって上敷きをていねいに雑巾でふき、その後はがされた。また念入りに座敷や玄関の掃除が行われた。外されていた格子と窓枠が再びはめられ、座敷は祭り以前の様子を取り戻した。上敷きは午後には畳屋が引き取りに来た。14 時には山宿の片付け作業は完了した。

6. 住民の祭りに対する認識

ここからは、祭りの準備段階からの祭り当日までの住民への聞き取りから、住民がどのように曳山祭を認識しているのかについてみていきたい。

6-1. 女性の語り

祭りに主体的に参加することのない女性は、曳山祭をどのようにとらえているのだろうか。まず曳山祭における苦勞について聞いた。

大工町の70代の女性は、山宿のしつらえについて「昔は裕福な旗場^{はたば}さんとか由緒あるうちしか（山宿のしつらえが）できなかったからこうした（費用面での）苦勞もなかったけれど、今は一代に1回は順番がまわってくるから苦勞が多い」としみじみ語り、

60代の女性は「曳山を持っている町内は万雑^{まんぞう}（町内会費）が高くて」と渋い顔で言った。これらの語りから、山宿の準備にかかる費用はそれぞれの家庭にとって大きな負担であり、また、こうした費用面での苦勞は、山宿が一般の人々によって支えられるようになってきたために生じた苦勞であることがわかる。

家の構造に関しても住民の語りを聞くことができた。大工町の60代の女性は「山宿をする（可能性がある）から、好きなように家立てれんけどしかたない」と語った。70代の女性は「家が通りに面しているから、なおさら勝手に家を建てたりはできない」と少し残念そうな顔ををした。今年山宿を行うことになった家の70代の女性は、「普段家族はみんな仕事と学校だから、（山宿の準備のための）片付けとか自分だけだし大変。祭りの日は、（山宿の）飾りつけした座敷の上には絶対にいけないから、背戸（家の表側ではないほう）へ行って寝ないといけない」と山宿を行う苦勞も語ってくれた。

これらの語りから、大工町のなかには山宿を行うために、自由に家を建てるのが難しいという状況を不満に感じている人もいることがわかる。また、こうした祭りの諸費用や暮らしや住居に関する話題は女性から多く聞かれたが、男性からはあまり聞かれなかった。このことは、曳山祭における男性と女性の果たす役割が、厳格に分けられているということに関係があると考えられる。

6-2. OBの語り

それでは、曳山祭の運営に主体的に関わる男性は曳山祭のどのような面を苦勞に感じているのだろうか。

数年前に山宿の主人をつとめた大工町の70代の男性は「（山宿をするのは）今年のうちが・・・などと心づもりしているところに頼みに行けば、すぐに決まるが、費用もかかるため、簡単に決まらないこともある」と山宿を行う家を見つける苦勞を語ってくれ

た。また近年山宿を行う家の確保に苦勞している町内があることに關して、60代の男性は「最近では町内山宿（公民館などを借りて町内負担で行う山宿）を行わないといけないう町もある。大工町はまだしばらくは大丈夫やろうが・・・」と語尾を濁した。

このように年配の男性には、曳山祭の存続に不安を感じている人が多い。

6-3. 若連中の語り

一方若連中を中心とする、山宿の主人をつとめたことのない男性には、山宿の主人をつとめることをどのように考えているのかを聞いた。40代の男性は「正直自分が山宿を行うことを思うと不安。こわい」と言い、別の40代男性は「（山宿を行うのは）苦勞やろうなあと思う」とため息交じりに語った。30代の男性は「山宿はいつかはやらんなんとは思ふ。でもだやいなあ」と苦笑した。40代の男性は、自らがいつか山宿を行う日が来ることを想像し、「歴史とか、伝統とか、上の人たち（OB）のプレッシャーを感じる」と語った。

以上のように、多くの若連中は山宿を行うことを不安に思い、祭りの中心的な役割を果たすことに心理的な圧力を感じている人が多いことがわかった。こうした不安はOBや先人達が築いてきた曳山祭の伝統を重く捉えるがゆえに生じるものだと考えられる。

以上の語りから、女性と男性で祭りに関する苦勞や不安はやや異なっていることがわかった。また、男性では、若連中とOBでは祭りについての認識が異なっていることがわかった。

6-4. 町内の支えと祭りの存続

曳山祭の運営は、町内の協力がなければスムーズに進行することは難しい。しつらえで御神像の着付けを行っていた60代男性は「大工町にはすべてに精通した人はいないけど、各分野のエキスパートがいる。だから祭りを支えていける。ひとり欠けても困る」と町内の人たちへの思いを語った。別の60代男性は「各分野に『こいつがおらんと』というやつがいる。そいつがいなくなったらどうするかなあ」とこの先の曳山祭についての不安を教えてくれた。また70代の男性は「（祭りの運営は）総出じゃないとできん。少ないから団結せんと」と声を張り上げて、町内の協力が不可欠であることを強調した。

6-5. 住民の祭りに対する思い

ここまで、曳山祭を支えていくうえでの苦勞や問題について述べた。聞き取りのなかで印象的だったのは、住民の多くが祭りに関する苦勞を語りつつも、そのあとに「運営は大変。でも、支えていきたい」、「支えていかんなん」と付け加えることである。曳山祭の運営には多くの苦勞がある。そうした苦勞があるにも関わらず、住民が祭りを守り支えていきたいと感じるのはどういった理由からなのだろうか。以下では城端曳山祭に対する住民の思いをまとめてみた。

ある30代男性は大工町の曳山を眺めながら、「大工町は小さいころに上に乗っていた

ので、やはり思い入れがある」と目を輝かせて、幼いころの曳山祭の思い出を語った。70代の女性は「若い人には受けない祭りかもしれないけど、ゆったりしていていいお祭り。情緒とか、風情とか味わえる祭り。城端の祭りとして誇りに思っている」と真剣な表情で話した。また別の70代女性は「どこの山より立派。誇れるもの。(祭りの伝統に)自信を持っている」と言う。50代の男性は「曳山は自分が生まれる前からあって、小さいころから関わってきた。絶対に守らんなんもの」と熱く語る。以前に西上町に住んでいて現在は町外に住む60代の女性は「伝統だから守らなきゃいけない、という思いはある」と話していた。

これらの語りから、曳山祭は、城端の住民にとって自分たちの住んでいる町に古くからある祭りで、それぞれに思い入れがあることがわかる。また、そうした思い入れから祭りを誇りに感じている人も多い。このような思い入れや誇りが、祭りの維持や運営にかかる苦労にも関わらず、曳山祭を存続させていきたいという人々の認識につながっているのである。

6-6. 祭りの魅力

住民たちは曳山祭のこういったところに魅力を感じているのだろうか。また、住民はどのような点に曳山祭の楽しさを見出しているのだろうか。

40代の男性は城端の曳山について「他の(県や地域の)山(曳山)みても、ああ、そんなもんかって感じ。やっぱ城端はすごい。(しつらえや女性禁止などの昔からの決まりが)厳格なところも魅力」と言う。大工町に住む50代の女性は、山宿のしつらえについて「屏風や掛け軸がどんなものか、花がどんなふうに活けてあるかをみるのが楽しい。曳山と屋台と人形(御神像)は毎年みているけど、しつらえの様子は山宿の主人の趣味で毎年違うから毎年面白い」と言い、80代の女性も「山宿のしつらえは毎年変わるからいい」と言った。また80代の男性は「(しつらえは)ワンパターンではつまらん。ハートがない」と祭りに対する思いを熱く語ってくれた。60代の男性は「毎年同じこと(しつらえ)では面白くない。公民館(で山宿を行うとき)は毎年同じしつらえだけど、各家でやれば毎年違って見ごたえがある。それが面白い」と山宿の魅力を語った。また個人の家で山宿のしつらえを行うときには思いもかけないハプニングや問題が発生することもある。50代の男性は「こういうハプニングが面白いんや。これが思い出として語り継がれていく」と突然のハプニングを笑い飛ばし、公民館のしつらえでは味わえない、個人の家でのしつらえの面白さをかみしめていた。

町外に住む60代の男性は「庵唄は毎年変わるし、昨年とどのように変わったかなど、比べながらみてほしい」と観光客への思いを語った。大工町の60代の女性は「何度も来ていただいて楽しんでほしい」と言い、町外に住む60代の男性も「来れば来るだけ、見れば見ただけ楽しみがわかる祭り」と曳山祭の魅力を語った。

住民たちが感じ取る曳山祭の魅力や楽しさは、個人の創意工夫が活かされて変化しつづける点にあるとあっていいだろう。山宿の中心に置かれた御神像は毎年見なれたもの

である。しかし屏風や花の生け方は山宿の主人の趣味によって異なり、しつらえを行う家や場所によっても、その様子や出来は全く違った雰囲気を持つものになる。それは各町の山宿の主人が、自分のしつらえた宿が他の宿に見劣りしないように、他の町よりも立派にしつらえようという、競争心を抱いて行っているからであろう。

山宿の主人つとめることは主人にとって一世一代の名誉であるとされている。また、観光客や住民などの見る側にとっては、祭りの変化を楽しめる要素である。つまり、祭りを支える側にとっても、祭りを楽しむ側にとっても、個人の創意で変化する山宿は曳山祭の大きな魅力となっているのである。

このような魅力があるからこそ、様々な苦労があるにも関わらず、曳山祭を誇りに思い、存続させようと願っているのである。

7. まとめ

今回の調査によって、見物客として祭りを楽しむだけでは触れることのできない、住民にとっての祭りの側面を見ることができた。

城端曳山祭に参加する6町は町の規模が異なるため、祭りの人手や費用の負担にも町ごとに違いがあることがわかった。曳山祭の運営のなかでも、特に山宿のしつらえには見ただけでははかり知れない苦労がある。各町で山宿の主人となった人たちは、たったひとつの自分だけの山宿を完成させようと腐心する。そのような努力の結果として、完成した山宿のどれもが毎年違った装いを見せ、それが住民や観光客を楽しませることとなる。このような楽しさと魅力があるために、世代や男女の別を越えて住民たちは曳山祭に誇りに思い、存続を願うのだと言える。また、城端の外からやってくる曳き方たちにとっても、曳山は楽しいものである。曳山が持つ楽しさが、様々な人々の協力を可能にし、そして存続の原動力となっていると言えるだろう。

謝辞

今回城端曳山祭の調査を行うにあたって城端曳山会館館長の小山昇様をはじめ職員の皆様、大工町の若連中やOBの方々、その他多くの大工町の方々に大変お世話になりました。

教念寺の高桑様には、4月25日から5月5日まで約2週間にわたって合宿をさせていただき、快適な環境のなか集中して調査に取り組むことができました。短期間ではありましたが、城端町の方々と同じ時間を過ごし祭りに向けて日に日に高まっていく町の雰囲気を味わい、城端町の日常と非日常を体感することができたことを嬉しく思います。ありがとうございました。

大工町の皆様には、急なお願いにも関わらず調査への協力を快諾していただき、準備段階から祭り当日までの観察、聞き取りを通して大変貴重な体験をさせていただきました。

た。山宿の主人をつとめられた稲葉様とそこそご家族の皆様、山宿の飾り場所に座敷を提供された長田様とそこそご家族の皆様には、山宿のしつらえを間近で観察、参与させていただき、城端曳山祭の伝統を受け継ぐ町の方々の思いを肌で感じることができました。

また、西上町の長谷川様には、出丸町公民館での庵唄所望の席に同席させていただきただけでなく、最前列中央に座らせていただき、山宿の主人さながら庵唄を鑑賞させていただきました。宿の中央に座り、庵屋台がやってくるのを待つ緊張感、所望宿の前に庵屋台がやってきて、若連中から差し出された短冊を受け取るときの何とも言えない誇らしさ、目の前で始まる若連中による心のこもった演奏とそれを所望宿のなかでゆったりと楽しむ雰囲気。きっと昔の旗場の旦那衆も、同じ気持ちで若連中の庵唄を楽しんだのだらうと思うと、その情緒を目の当たりにすることができたことに私は深く感動しました。厚かましくも所望に参加させていただきただけでなく、かけがえのない体験と一生の思い出を与えてくださったことを、心から感謝しています。ありがとうございました。

今回、無事に調査を終えることができたのは、すべて城端町の方々のあたたかいご協力があったからこそだと痛感しています。短い期間ではありましたが、城端町の方々と深く関わり、曳山祭の調査を行えたことを嬉しく思っています。ご多忙にもかかわらず、調査にご協力いただいた皆様、誠にありがとうございました。

3. 地域コミュニティにおける祭りの役割

—野下町獅子舞の事例から—

小坂 ゆう香

1. はじめに

私が育った金沢には、「百万石祭り」という祭りがある。「百万石祭り」とは、江戸時代に金沢を治めていた加賀藩の大名行列を再現したパレードである。パレードには、大名行列の他に音楽パレードや獅子舞などが参加するのだが、私はこの獅子舞を見るのが小さいころから大好きだった。普段あまり目にしないものなので、小さいころの私には物珍しく思え、舞っている姿もとてもカッコよく見えた。そのため、城端の曳山祭に獅子舞が参加していることを知ったとき、私は獅子舞をテーマに調査したいと思った。その後城端に調査の下見に行った際に、今回調査することになった野下町の獅子舞を紹介してもらった。調査地を決める前に、一度練習を見学させてもらったのだが、獅子舞のカッコよさもさることながら、練習の雰囲気がとても和気あいあいとしていることにとっても驚いた。伝統的な行事の練習なので、厳しく練習しているイメージだったが、子供たちは練習前に仲良く遊んでいて、大人同士も年齢に関係なく冗談を言い合っている様子がとても印象的だった。保育園の年長から60代くらいまでの大人と一緒に練習していたのだが、大人たちはどの子にもわけへだてなく踊りを教え、子供たちの方も素直に大人の指示を聞いていた。このような世代をこえた親密な関係や地域の大人が子どもたちに獅子舞を伝えていく様子が自分の身近にはない光景だったので、とても興味を持った。そこで、獅子舞と地域住民の関係、特に地域住民のコミュニティに対して獅子舞という行事がどのような影響を与えているのか調査を行うことにした。

ここでは、住民の語りから、獅子舞の参加者、獅子舞を支える人々、獅子舞を見る人々の3つの視点から獅子舞に対するとらえ方を比較し、獅子舞という行事が野下町の人間関係や個人にどのような影響を与えているのか見ていきたい。

2. 野下町の概要

野下町は城端旧町の南西に位置する比較的広い町で、男性169人、女性165人、総世帯数109の城端地区ではもっとも人口の多い町である。昔は町内のほとんどが畑であったが、60年前から少しずつ人口が増え、現在では城端小学校や中学校、城南パークなど大型施設が多く建つ町となっている。

3. 野下町の獅子舞

毎年、曳山祭と同時期に獅子舞が行われる。ここではまず、曳山祭の獅子舞を担う 2 町のうちの 1 つであり、今回の調査地である野下町の獅子舞の歴史や概要について紹介したい。

3-1. 獅子舞をはじめたきっかけ

野下町の獅子舞は今年で 49 年目にあたり、来年は 50 周年を迎える。野下町はかつて、土地の大半は畑で、人口は少なかった。その後、徐々に人口が増加するにつれて、町独自の行事を行いたいと考えた当時の町民が獅子舞を始めたのが、現在見られる獅子舞行事のきっかけである。

3-2. 歴史

獅子舞が始まって最初の 2 年間は籠に張り紙をつけた作り物を^{かしら}頭にして、踊りも当時参加者していた住民の出身地の獅子舞の知識を集めて行っていた。その後、住民たちがしっかりした頭を作りたいと思っていたと言うが、城端の東新田町から五箇山を結ぶ下梨谷道の途中にあった若杉集落³の獅子舞行事で用いられていた頭が野下町に貸与された（写真 1）。そこで、しばらくは若杉の頭を使用していたが、他集落の頭を使うのは良くないという意見があり、2 年で頭を若杉に返却している。その後、使われていた頭は、林道加賀温泉に譲られたが、土砂災害に遭って失われてしまった。その後は、木彫りの頭とヨタンと呼ばれる胴体部分を作り、踊りは若杉のものと、五箇山の梨谷から来た人が教えたものが混ざったものとなった。ただし、現在、本番の行事で使われている頭は購入したものである。



写真 1. 若杉集落の獅子舞
（「城端町若杉集落を偲んで」より）

現在の野下町の獅子舞は曳山祭と同じ日程で行われるが、以前は曳山祭とはまったく

³ 昭和 30 年代に廃村となった。「若杉神明社跡」の石碑が残っている。

別の祭りで獅子舞は野下町の中を回るだけだった。しかし、^{みなみちよう}南町だけで曳山祭の^{つゆ}露^{はらい}被いを行うのはたいへんだということで、5年ほど前から野下町の獅子舞も曳山祭の露被いに参加するようになった。曳山祭にあわせて獅子舞も5月15日に行われていたが、曳山祭の日程変更にともない、5月5日の祝日に日取りが変更された。

3-3. 構成員

獅子舞の参加者は昔も今も、男性のみで構成されている。^{めいわかい}明和会と呼ばれる18歳から45歳で構成された20名ほどの青年団と、明和会を「卒業」した年配者で構成される^{そうねんかい}壮年会が主に中心となって獅子舞行事を運営している。基本的に、参加者は昔から野下町に住む男性で構成されているが、転入してきた人や婚入してきた人も参加している。子供は5,6歳の児童から中学3年生までが参加している。獅子舞が始まった最初の10年くらいは、地域の人口が多かったために参加者を制限しなくてはならず、長男しか参加できなかったり、小学校3年から6年までの間しか参加できなかったりしたと言うが、現在は、逆に人手不足のために男の子なら誰でも参加できるようになっている。しかし、それでも年々参加する子供の数が少なくなっているのもともと野下町に住んでいて他地域に移った人たちに参加を呼びかけたりしている。

3-4. 獅子舞の概要

野下町の獅子舞はオス獅子(南町はメス獅子)で、獅子の型は百足獅子といってヨタンが大きく、10人くらいで動かす。メス獅子の南町と比べ賑やかな雰囲気、勇ましさ特徴である。

野下町の獅子舞は、獅子の「頭」を振る者と胴体部分のヨタンを動かす者、獅子を退治する「獅子とり」、そして^{じかた}地方と呼ばれる楽器を担当する者で分担が分かれる。昔は大人が「獅子とり」と「頭」の両方を担当していたが、今は子供が「獅子とり」で大人が「頭」とヨタン、楽器を担当するというように分かれている。楽器は太鼓、鐘、笛の3種類で、1つの楽器を入れ替わりで演奏する。

曲は、初めは3曲のみだったが今は大きく分けて5曲ある。さらに5曲のうち2つをたしたもののや、短縮版なども含めると曲は全部で7つになる。およそ1曲30秒から1分強かかる。各曲には番号がついており、指示は番号で伝えられる(表1)。

表 1 曲名と番号

番号	曲名
1	ヨッサキ
2	ゲンバヤシ
3	キョウブリ
4	七五三
11	露祓い(ヨッサキの短縮版)
12	露祓い(ゲンバヤシの短縮版)
	天狗

天狗

「獅子とり」は子供がすると先に述べたが、唯一、表 1 の「天狗」の曲のときだけは大人が「獅子とり」を担当する。この「天狗」とは、天狗のお面をかぶった大人の獅子とりが行う曲のことで、出産や結婚などおめでたいことがあった家で催される。その際、1 軒につき 10 分以上獅子を回すこともある。天狗が新しく生まれた子供や、新しく嫁いできた女性を獅子のところまで連れていき、子供を獅子と遊ばせたり、大人をヨタンのなかに入れたりする(写真 2)。天狗が行われているときは、周りで見ている近所の人たちが天狗に捕まることがある。近所の人はもちろん天狗を見に集まってきているのだが、天狗を見に来ることによって、新しく地域に加わった家族を見に来る機会にもなっている。



写真 2 天狗の様子

4. 曳山祭

ここまで、野下町の獅子舞の概要を紹介してきたが、ここからは曳山祭当日に行われる野下町の獅子舞を具体的に見ていきたい。曳山祭では、獅子舞は露祓いを行うという重要な役目を担っている。曳山祭では、獅子舞を担当するのは南町と野下町のみのだ

め、祭り当日は午前中に分担した城端旧町の露祓いが行われ、午後は野下町内の獅子舞巡行を行う。野下町内にも数軒露払いを行う家があるが、午後の巡行に合わせて行っている。

祭当日に向けての準備段階から、祭前日、当日と、時間軸に分けて流れや概要を述べたいと思う。

4-1. 露祓い

当日までの流れを説明する前に、曳山祭で獅子舞が行う「露祓い」について少し触れておきたい。曳山祭の概要で述べられているように、獅子舞は人間の生活をおびやかす悪霊をしずめ、場を清めるために曳山が通る前に町を回る。他の町内において「露祓い」の際に回る家々は、事前に神明宮にお供え物を献納した家で、玄関に神社から受け取った白い紙が貼ってある。南町と野下町以外の旧町の露祓いを2町が半分ずつ分担して、玄関前で露祓いの舞を行う。各家が野下町獅子方若連中の獅子に献納する金額は、例えば結婚したら3万円と酒2升いうように決まっていて、金額によって獅子舞の曲や曲数は異なる。

4-2. 曳山祭における獅子舞の役割

まず、曳山祭の獅子舞と^{けんぼこ}鉦鉦は、前日に神明宮から^{おたびしょ}御旅所(じょうはな座)へ神様を神輿に乗せて運ぶ^{みこしとぎょ}神輿渡御の行列を先導するという共通の役割を持っている。獅子舞は人間の生活をおびやかす悪霊をしずめる威力あるものとする信仰と結びつき、神輿渡御の露祓いの役目をする。曳山祭で、露祓いの獅子舞を担当している町は南町と野下町であるが、最初は南町だけがこの先導を行っていた。その後、野下町が参加するようになったという説が有力だが、南町が先導する前に野下町が行っていたという説もある。今は野下町と南町の2町が、1年交代で先導を行っている。祭り当日の午前に行われる他町内への露祓いも、1年交代で担当する町を変えている。1年で担当を交代することにより、長く同じ場所に住む住民でも、毎年交代交代で違う獅子舞を楽しむことができる。

4-3. 祭り前日までの流れ

準備

準備は約1か月前から始まる。練習が始まる1か月前に町内に練習の案内を配布し、獅子とりが使う棒の新しい竹も山に取りに行く。前年に使っていた棒は練習用に使われる。

練習

練習は祭りの2週間前から、野下町の公民館で夜7時半から行われる。子供は夜9時までで、大人は夜10時頃まで練習する。昔にわか獅子をしていたころは、練習場所が水月公園^{すいげつ}という町内にある公園で、3月に寒稽古^{かんげいこ}、5月1日から2週間練習していた。

獅子とりの踊りは、頭を振る大人が1人いてそれに向って2列に並んだ子供たちが振りを練習する(図1、写真3)。踊りは大人が子供たちに教えたり、年少者が年長者の踊りを見本にして覚えたりする。前の年に踊った子は体で踊りを覚えているため、1年たってもすぐに去年の踊りを思い出して踊れる。保育園の年長は、比較的覚えやすい「ヨッサキ」と「ゲンバヤシ」の2曲だけ覚える。年齢が上がっていくにつれ、覚える曲数も増えていく。練習風景はとても和気あいあいとしているが、練習前は走りまわって遊んでいた子供たちも、練習が始まると真剣な表情で練習に励む。練習が終わると、子供たちは何も言われなくても、ゴミ拾いを始める。

獅子頭の練習は、子供たちが帰ったあと大人のみで行われる。子供役をたて、頭を振る人が1人ずつ前に出て、後ろでは頭を持たずに同じ動きをして覚える(図1、写真3)。これもまた、年長者の動きを見て新しく頭を振る人は動きを覚える。1年目は1曲、2年目、3年目は全部と徐々に曲の動きを覚えていく。動きを覚えるのはそう難しくないが、かっこをつけるのに苦労するそうだ。

演奏も代々新しく演奏者になった者が、年配者の演奏を見て学んだり、教えてもらったりして演奏を身につける。子供のころ獅子とりをしていた子が、獅子頭を振るようになり、後に楽器を担当するというように、小さいころから大人になるまで獅子舞に携わる人がほとんどである。

記号：●大人○子供△楽器

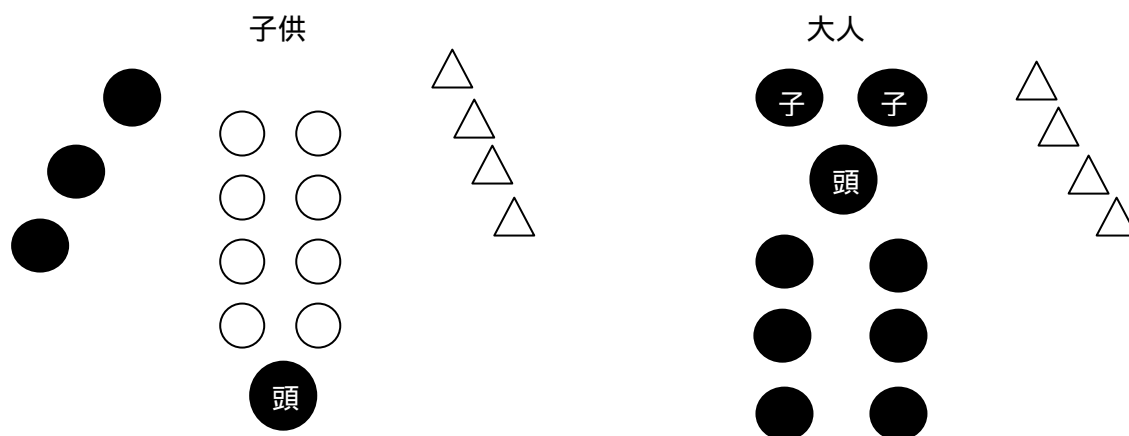


図1 練習風景図



写真 3 練習風景

4-4. 祭り前日

前日は午後 3 時から公民館で準備を始める。神輿渡御を行う年は午後 1 時から準備を始める。前日の準備は、明和会と壮年会のメンバーで行う。

前日行うこと

- ・ヨタン作製
- ・傘鉾の飾りつけ
- ・わらじ作製
- ・ゆで卵作り
- ・子どもの衣装準備
- ・獅子を座敷に飾る
- ・太鼓の飾りつけ

ヨタンは保管するときは一枚布の状態なので、布に竹でできた骨組みを通す。一番前の骨組みの間がもっとも狭く、真ん中、前、後ろ、尻尾の順につけていく。(写真 4)

衣装は、公民館に保存してある衣装を大きさや色合いを見て、当日の朝すぐに着替えられるように準備する(写真 5)。わらじも、当日の朝履く分とわらじが痛んだときの替えとで、全部で 100 足くらい作る(写真 6)。わらじの鼻緒は野下町が赤、南町が黄色と決まっている。ゆで卵は当日参加者の休憩中に食べるように 250 個も作られる。最近では工夫して味付け卵にしている。

ヨタンが出来上がると、獅子舞を公民館の座敷に飾る。飾り方は、去年の写真を見たり、思い出したりして行われる。座敷の障子を開けると、公民館の外から見えるように飾られる。夜以外は獅子舞が出発する朝まで誰でも見ることができる(写真 7)。獅子舞の前には供物が並び、供物は左から、するめ、塩、酒、赤飯、ウドの順で並び、三方の継ぎ目が獅子舞の方に向かないように置かれる(図 2)。このように、酒、米、肴(干鰯または鰯)を三方またはお盆に備えることを「台付^{だいつけ}」という。



写真 4 ヨタンの作成



写真 5 衣装の準備



写真 6 わらじ作り



写真 7 飾りつけ

するめ（奇数枚）	塩	酒	赤飯	ウド
----------	---	---	----	----

図 2 供物

4-5. 獅子舞の準備と交流

練習風景や前日準備に共通している点は、20 歳から 50 歳ほど離れた様々な世代の人々が共同で作業を行うことである。練習では、子供が大人に注意されたり、年少者が年上の少年に注意されたりする場面が何度か見られる。それでも、嫌になって練習を投げだす子供は 1 人もおらず、むしろ誰かが練習に参加せず泣いていると、みんなで励ます様子さえ見られた。大人の参加者にも自分が子供だったころの話を聞くと、多くの人が子供のころ練習が楽しかったと語った。しかし、昔は今より大人が厳しく、子供は泣いて踊ったこともあったそうだ。しかし、それは怒られて泣くわけではなく、自分がう

まく踊れなくて泣いたのだと言う。今回の調査でも怒られて泣いている子供は見なかったが、参加している親のなかには、自分の子供の普段とは違った面が見られると語る人もいた。地域の住民どうしの関係が薄れてきている時代にあって、獅子舞の練習は、大人と子供、子供同士が年齢を超えて密接に交流する場となっていると言えよう。

4-6. 当日の流れ

当日は午前が曳山の露祓いで、午後は町内を回る。今年は大人 41 人、子供 12 人が参加した。巡行図と 1 日のタイムテーブルは以下のとおりである（表 2、図 3）。

表 2 獅子舞の流れ

6:30 ~	準備開始
7:45 ~	出発(午前の部)
10:00 ~ 10:20	休憩(スーパー裏)
11:35 ~	公民館到着(お昼休み)
12:30 ~	出発(午後の部)
	途中何度か休憩をはさむ
20:50 頃	公民館着(終了)



図 3 獅子舞巡行予定図(午前の部、午後の部)

準備と出発

当日朝の準備は、すべて男性のみで行う。子供の着付けを行ってから、大人も着替える。わらじも、子供が履けない場合は大人が履かせる。着替えが終わると、前日にお供えした物を食べたり、御神酒を配ったり、子供たちは外で練習したりして出発を待つ。出発前に、明和会会長からの一言を聞き、終わりたい公民館を出発する。

午前の部

まず始めに、じょうはな座で舞を披露する。じょうはな座では、宮司さんからお祓いをしてもらい、大麻の紙垂おおぬさ かみだれを1本獅子の角につけてもらう。次にJA南砺へ向かい、明和会の会長が花紙と呼ばれる目録を大きな声で読み上げ、舞を披露する。その後、旧町の露祓いが始まる（写真8）。平成23年度は、大工町だいくまちと西上町にしかみまちを野下町が担当したが、先に述べたとおりその年によって担当する町を南町と順番に回す。

獅子舞の巡行では、先走りと呼ばれる紋付、袴の人2名が獅子の到着前に、回る家へ挨拶を行い、獅子が後からその家に向かい舞を披露する。舞が終わると、明和会の会長も1軒1軒挨拶をする。また当日、露祓いとはまた別で直接獅子舞に献納するお金を「お花」という。会長の横にはその日のお花代(数)を記録する人がいて、そのお花数に応じた曲が追加で行われる。多く金額をもらった家や、露祓いとは別でお花をいただいたときは、花紙を会長が読み上げる。

獅子舞の巡行を行う上で重要なのが、どの家でどの子がどの曲を何曲行うか決めることだ。できるだけ続けて同じ曲にならず、子供たちをまんべんなく配置するのが相当難しいそうだ。今年は126軒(10軒ほど行っていない分も含め)の露祓いを行ったが、隣り合った1軒1軒で同じ曲や同じ子供にならないように配置を決める役の人が、獅子の到着前に子供たちを配置していた。当日、楽器は笛が6人、太鼓と鐘は1つを何人かで回していた。



写真8 午前の露払いの様子

他町の住民が獅子舞を見る様子

獅子舞が各家を回る様子を見ていると、どの家の家族も、獅子舞が回るときは家族全員が外に出て獅子舞が舞うのを見ている。獅子舞を見ている住民はみんな笑顔で、とても獅子舞を楽しみにしていたのがうかがえる。基本的に1軒につき1曲だが、多く金額をもらった家や、露被いとは別で花をもらった家は2曲回す。大工町に住む60代女性は、毎年楽しみで2曲回してもらうために、「多く花をうつ」と語っていた。他の住民にも話を聞くと、子供が楽しみにしているという声が多く聞かれた。しかし、「昔からずっと花をうち続けている」人もおり、子供だけでなく大人にとっても毎年楽しみにしている行事である。

昼休憩

他町内の露被いが終わると、一度公民館に戻り昼休憩に入る。休憩所では、参加男性のうち何人かの奥さんがご飯の準備をしてくれている。この習慣は何年か前から始まったようだ。昼食は、朝の供え物(ウドやするめ)を漬物や焼き物にしてあったり、お寿司が準備されていた(写真9)。全員がそろって昼食をとる(写真10)。



写真9 昼ごはんの寿司



写真10 昼休憩の様子

午後の部

今年度は、例年より午前の部を回り終わるのが早く、午後の部が早めにスタートした。午後は、野下の町内を回る(写真11)。たとえ、出向いた家が留守でも舞は行うため、全部で160軒ほど回る。そのため、すべてが終わるのは午後8時過ぎで、遅いときは

夜 10 時までかかるときもあるそうだ。あらかじめ決められている順路を順番に進んでいくが、「天狗」を行う家は時間指定がされていることがあり、指定の時間に向かう。また、午前も午後も移動中何度か休憩をはさむが、休憩場所には食べ物や飲み物を積んだ車がくる。この車を担当している人も男性である。祭りの次の日は動けなくなるくらい体力を使う獅子舞の巡行には、この車が欠かせない。獅子舞の運営は、昼休憩の準備に少し女性が手伝うが、それ以外はほとんどすべて男性で行われる。



写真 11 午後の獅子舞巡行の様子

終了後

祭りが終わると、次の日にゴミの片付けがある。また後日、大人の参加者で温泉へ行ったり、反省会が行われる。

5. 様々な視点からの獅子舞

ここまで獅子舞について説明してきたが、獅子舞に関わっている様々な人々は、獅子舞という行事をどのように捉えているのだろうか。ここでは、獅子舞に対する認識を、獅子舞の参加者、獅子舞を支える人々、獅子舞を見る人々の 3 者に分けて考察したい。

5-1. 参加者の視点

獅子舞に参加している多くの人が、小さいころから大人になるまでずっと獅子舞に参加し続けている。子供のころは自分の親と参加し、大人になると今度は大きくなって自分の息子と参加するようになる。現在獅子とりをしている子や、子供のころ獅子とりをしていた人のほとんどが、子供のころは踊るのが楽しかったと語り、大人になってからはとにかく飲むことが楽しみなのだそうだ。野下町の男性は、ほとんどの人が青年会または壮年会に所属しており、獅子舞の練習に参加している。そのため、練習後に飲むと

きも町内のほとんどの人が参加することになる。別の町内から野下町に移ってきた男性も、もともと住んでいた所は意志のある人だけが参加する青年会があったが、やはり全員参加の方が同級生や年下がいて馴染みやすく、楽しいという。飲み会はなかなか話が尽きないため夜遅くまで続き、新婚の家庭では奥さんの機嫌が悪くなるほどだと言う。参加者は準備から本番までを楽しんでいる様子が調査中、よく感じ取れた。獅子舞の練習や練習での飲み会が団結力をうみ、他の行事でも集まりやすいと参加者は語る。

参加者にとって獅子舞とは、毎年町内のみんなが集まり、話せる機会であり、自分の子供のいつもとは違った面を見ることができる機会でもある。つまり、地域のつながりのみでなく、親子のつながりをも確認する機会を与えてくれるものであると言える。

5-2.支える人々の視点

ここで言う支える人々とは、獅子舞に直接参加しないが、家族が獅子舞に参加している野下町の主に女性をさしている。何人かの女性の住民に話を聞くと、ほとんど全員が共通して獅子舞を毎年楽しみにしていると語る。自分の孫が出ている女性は、孫がちゃんとできるのか心配と語ったが、やはり毎年楽しみにしていて、孫の獅子とりする姿をととても嬉しそうに見ていた。夫と子供が参加しているという女性も、獅子舞は伝統芸能であり、受け継いでいる夫と子供を誇りに思うと語っている。夫と子供が練習に参加する様子も楽しそうで、参加者同士のきずなが深まるのがわかるという。子供たちの家での様子も何人かの女性に聞くと、普段はただただ過ごしている子供たちも、練習があるときは練習が楽しみで先に宿題やお風呂をテキパキ済ませるそうだ。

女性たちの語りを聞き、獅子舞は実際に参加していない参加者家族にとっても、大切なものであり、獅子舞に家族が参加していることを、誇らしく思っているのが感じられた。また、支える人々ではないが、練習や本番では野下町に住む少女たちをよく目にする。彼女たちは、練習を見に来て踊りのまねをしたり、本番も獅子舞の巡行についてきたりする。彼女たちに獅子舞に参加したいか聞くと、全員が「獅子とり」をしたいと答えた。南町では人数不足により少女も参加しているが、野下町は依然として「獅子とり」は男子に限られている。野下町の少女達にとっては、獅子舞は憧れの存在である。

5-3. 見る人々の視点

ここで「見る人々」とは、家族が獅子舞に直接関わっていない野下町の住民と、野下町以外の住民を指している。まず、野下町の住民にとって、獅子舞があるとはどういう気持ちなのか聞いてみた。野下町は以前曳山を持っていたが、大火で山が燃えてしまった。よって、今は獅子舞を行っているが、山がない今、山に代わる獅子舞は大切なものであり、祭りだと感じるものであると住民は語る。他の住民からも、祭りに獅子舞は欠かせないという話や、春になると楽しみだという語りが聞こえてきた。一方、野下町以外の住民はどのように感じているかと言うと、ほとんど野下町住民と獅子舞に対する感じ方に変わりがないことがわかった。どの住民も毎年楽しみにしていて、特に子供が大好きだという語りが多かった。家で結婚や出産があると獅子舞を派手をお願いするそう。曳山を持つ町の住民でも、山は山で落ち着くが、獅子舞の方が音を聞くと血が騒ぐ感じがすると語る。城端の町民にとって、曳山祭も大切な祭りだが、同じように獅子舞も城端の住民にとって欠かせない祭りであることがうかがえた。

今回調査してわかったのは、獅子舞も曳山祭も城端の住民はどちらも毎年春に楽しみにしている祭りであり、2つのどちらが大切な祭りということではないということだ。例えば、曳山祭は落ち着いた雰囲気を楽しみ、獅子舞は賑やかな雰囲気を楽しむといったような、それぞれ違った楽しみ方が住民にはある。

5-4. まとめ

3者の視点から獅子舞と言う存在をみてきたが、どの視点からもわかることは、獅子舞をとて楽しんでしているということだ。参加者にとって獅子舞は、自分たちの町で昔から受け継がれている大切なもので、なにより小さな子供から60代70代までの町の男性が一丸となって一つの事に取り組める行事である。その準備期間は普段なかなか話せない他住民と話す機会であり、毎日仕事が終わってから参加する練習が夜遅くまでかかっても、毎日練習に来たいと思う楽しさがある。子供たちも、踊る楽しさを感じている。支える側は見ていることが多いかもしれないが、自分の家族が獅子舞を受け継いでいることに誇りを持ち、本番は身内の舞を誰よりも楽しみに、獅子舞が家に来るのを待っている。獅子舞を見る人々にとっては、春を感じる毎年楽しみにしている祭りであり、家庭内の祝い事にも欠かせないものである。このように、見る人々にとっても、参加者にとっても、楽しさがあり生活に欠かせないという点は、行政主導のイベントには見られない特色だと考えられる。

6. むぎや祭との比較

野下町では、獅子舞のほかに「むぎや祭」という祭りが秋に行われる。むぎや祭も曳山祭同様、城端全体の祭りであり、町単位で参加する。しかし、獅子舞と大きく異なるのは、むぎや祭には女性が参加できるということである。ここで、獅子舞とむぎや祭を比較してみたい。ただし、むぎや祭の詳細については、4章で述べられているので、ここでは省略する。

むぎや祭と獅子舞の最も大きな違いは、先にも述べたように女性が参加するという点だ。やはり女性が参加するのとならないのでは、男性のみの獅子舞と練習段階などで、違いが見られるのではないかと思った。しかし実際は、さほど大きな違いは見られなかった。むぎや祭では、婦人会と青年会で仕事が分担されているが、準備や練習指導は共同で行われる。仲がよい雰囲気もそのまま、むしろ少女たちが参加できる祭りであるため、獅子舞の時よりも子供たちは大勢で走り回るなど、とても賑やかだ。他の町内では、外部から多くの参加者を募る所もあるようだが、野下町は今のところ他の町内から参加している子供が少しいるが、ほぼ野下町住民だけで祭りを運営できている。そのため、むぎや祭も祭りの構成員は変わっても、住民一丸となって取り組む姿勢は獅子舞と同じである。

また、むぎや祭に対する思いを聞くと、これもまた獅子舞と同様で、野下町の住民のほとんどがむぎや祭を地域にとって大切な祭りだと感じている。なくなればさみしいと感じるし、この時期に絶対あるものであると住民の多くは語る。野下町の住民にとって、むぎや祭も地域住民が関わる重要な機会であり、季節を感じる祭りである。

7. 地域のコミュニティにおける祭りという存在

今まで見てきた住民の意識から、獅子舞やむぎや祭などの祭りは地域住民のコミュニティにたいして、いくつかの役割を担っていることが分かる。祭りは、楽しむものであるのと同時に、子供にとっては成長につながり、大人にとっては住民同士の距離を近づけたり、離れた距離を元に戻す潤滑油的な役割を担っている。

獅子舞の準備や練習を見ていると和気あいあいとした雰囲気、普段から仲が良く、よく集まったりしているのかと感ずることがあったが、実際には日常的にはお互い話すことはあまりなく、祭りのときだけ毎日集まって飲むということであった。それはむぎや祭においても同様で、祭りになると普段会えない友人と会うことができ、同級生でも4年ぶりの再会になる場合もある。つまり、祭りという存在が年に2回、町の人々を近づける役割を果たしていると言えよう。

また、祭りは町内に新しく加わった人たちが町に溶け込む機会ともなっている。結婚して町にやってきた男性は、獅子舞の練習や飲み会を通して、すぐに町に溶け込むことができたという。祭りは、新住民に交流の場を提供しているのである。

さらに、むぎや祭と獅子舞との共通点に、どちらも踊りを覚えることがあげられるが、ただ単に見るだけではなく体で覚えることに大きな意味があるのではないかと考えられる。獅子舞やむぎやの踊りは小さいころから覚えていくため、自然と体に染み付く。そのため、ある程度祭りから離れても、音を聞くととなつかしく思い、参加した時にはすぐに踊りを思い出すことができる。つまり、祭りは、町から離れた住民が、町に戻ったときに、住民のなかに再度溶け込んでいくきっかけとなりやすいということである。それは、その町の住民しか分からないかけ声や動作などを早いうちに体で覚えるということが基盤となっている。

補足になるが、野下町以外の地域では、先に述べた獅子舞の「天狗」という曲がコミュニティ形成に役立っている。新しい家族が増えた世帯にとって、天狗を行ってもらうことで新しい家族を町の人に見てもらい、新しい家族の存在を町の人に知ってもらうことができる。これも、地域コミュニティに対する祭りの潤滑油的な役割だと言えよう。このように、祭りはコミュニティに他者を受け入れやすくする媒体であるとともに、コミュニティの内部を円滑にする機能を持つのである。

8. おわりに - 調査を終えて -

今回、野下町の祭りを2つ調査して、祭りの「力」をいくつか明確にすることができた。私の祭りのイメージといえば、参加者が一丸となって準備をし、観客に自分たちの演技を見てもらうことに楽しみを感じるものだと思っていた。しかし、今回調査した2つの祭りは私のイメージとは大きく異なり、他人に見せることよりも自分たちが楽しむことに重点が置かれている気がした。もしくは、野下町の祭りは野下町の住民が意識していない所で外部に対する影響よりも、内部に対する影響の方が大きい気がした。祭りが始まると住民が集まり、練習では毎日の集まりで住民同士の交流が深まる。また、練習を調査していて一番驚いたことは、子供たちの意識の高さだ。練習で何が一番大変かと聞くと、彼らは一様に他の子と踊りを合わせることが一番難しいと答えた。練習では、小さい子供たちが年上の少年や少女を見て踊りを覚えている姿を目にしたが、話を聞くと大きい子供たちも小さい子供たちに合わせようとしているようだ。大きいと言っても小学校3年生くらいの子供たちで、私は自分が小学校3年の時に、小さい子供たちのことを考え協調しようと思ったことがあるのか考えさせられた。練習前に宿題をすませる子供たちの話もそうだが、子供たちは祭りを通して、自分で目標を成し遂げるためには何をすべきなのか、どうすべきなのか考える姿勢が、自然と身についているのではないかと思った。しかし、参加する側だけでなく、見る側にとっても祭りとは自分たちの生活に欠かせないものである。ただ毎年同じように見るのではなく、自分たちの生活に嬉しいことがあると派手にしたり、ときには前述した天狗のように祭りが同じ町内の他者とのかけはしになったりすることもある。参加者が祭りを最大限に楽しみ、それを見る側も最大限に楽しむことが出来るのが祭りなのだと今回の調査で知ることが出来た。

謝辞

今回、獅子舞の調査やむぎや祭りの調査では獅子舞委員長の金田様をはじめ、野下町区長様、明和会の皆様、壮年会の皆様、婦人会の皆様にご協力いただいたこと、大変感謝いたしております。突然の調査依頼でありましたが、快くお引き受けいただき、こうして報告書を書くことができましたのも、皆様のおかげと心から感謝いたしております。野下町の住民の方々、調査にご協力いただいたすべての方々に感謝し、お礼の言葉とさせていただきます。

参考文献

行政区別住民基本台帳人口及び世帯数(平成 23 年度 4 月 1 日)

<http://www.city.nanto.toyama.jp>

『城端曳山祭パンフレット』、城端曳山会館

『城端町若杉集落をしのんで』、山崎正一、1989 年

4. むぎや祭

4-1. むぎや祭の概要

寺田 未佳
羽鳥 良斉

ここからは、毎年 9 月第 3 月曜の敬老の日の前の土日曜に開催されるむぎや祭について報告するが、まず、祭りの概要を紹介したい。

3.1.1. むぎや祭の歴史

むぎや祭は麦屋節に由来する祭りである。麦屋節はもともと城端の東に位置する山間地集落五箇山に伝わる民謡であった。1925 年、東京の日本青年館の開館記念に、五箇山麦屋節保存会の 17 名の青年が出演し、その後に城端でも披露したことがきっかけとなって、城端旧町の一つ、新町の若連中が麦屋節を演じる「新声会」という会を結成した。そうして、新町の地蔵祭りである宥音塚の祭りで踊るようになった。一方、当時の五箇山は道路の舗装が十分でなく、冬季は通行不能な時期が続くほど交通の便が悪かった。五箇山では麦屋節を全国的に知らしめたいという希望があったが、外部との交通の便が悪い五箇山よりは城端で宣伝をおこなう方が効果的だということで、五箇山の平村の村長と城端の商工会の商業部長とが相談して、城端で麦屋節の宣伝を行うこととなった。1950 年、上述の新町新声会や、西下町にできていた城声会による麦屋節を演じたところ、他の町からも踊りたいという声が挙がった。翌年の 1951 年、城端商工会の中の優良店会が主催者となって、同年の 9 月 15 日に第 1 回むぎや祭りが開催された。この祭りが定着して、以来、毎年、祭りがおこなわれるようになった。2000 年からは、麦屋節をよさこい風にアレンジした「じゃんといむぎや」が祭りに加わるようになる。調査をおこなった 2011 年 9 月 17 日、18 日に開催されたむぎや祭は通算で第 61 回の祭りである。なお、「じゃんといむぎや」については、この章の 3 節の報告において詳述する。

3.1.2. 参加町と運営組織

むぎや祭に参加する町は次の九町である（表 1）。

表 1 .むぎや祭の参加町

栄町
新町
出丸町
西上町
西下町
西新田町
野下町
東上町
東新田町

むぎや祭の運営は、城端むぎや祭協賛会によって行われている。協賛会には城端地区の各町内のほか、商工会や観光協会も含まれる。商工会や観光協会は事務局として、祭り全体の運営や広報事業などを行っており、南砺市も共催のかたちで協力している。各組織の運営の分担は以下の通りである。

- 1 南砺市城端行政センター
 - ・ 関係機関への各種届出・申請及び連絡調整
 - ・ 行政側連絡窓口（スタッフの動員要請など）
- 2 南砺市商工会城端事務所
 - ・ 総務・会計事務
 - ・ 協賛金募集に関する事及び協賛金に関わるあんどん、ぼんぼり、入船札に関する事
 - ・ 「じゃんとこいむぎや」、総踊り、パレード、踊り講習会に関する事
 - ・ 商店の道路使用許可、通行許可申請に関する事
- 3 南砺市観光協会城端事務所
 - ・ 庶務に関する事（誘客、広報など）
 - ・ 踊り競演、街並み踊り、麦屋節コンクールに関する事
 - ・ 町内や出演団体との調整
 - ・ その他、祭全般のスケジュール調整
- 4 南砺市観光課
 - ・ むぎや祭の予算、実績報告の受理に関する事
 - ・ その他担当課として連絡調整窓口

3.1.3. 会場と祭りの流れ

以下の図 1 は、第 61 回むぎや祭りパンフレットに記載の会場地図である。この図をもとに、2011 年の祭りの流れの概略を記述する。

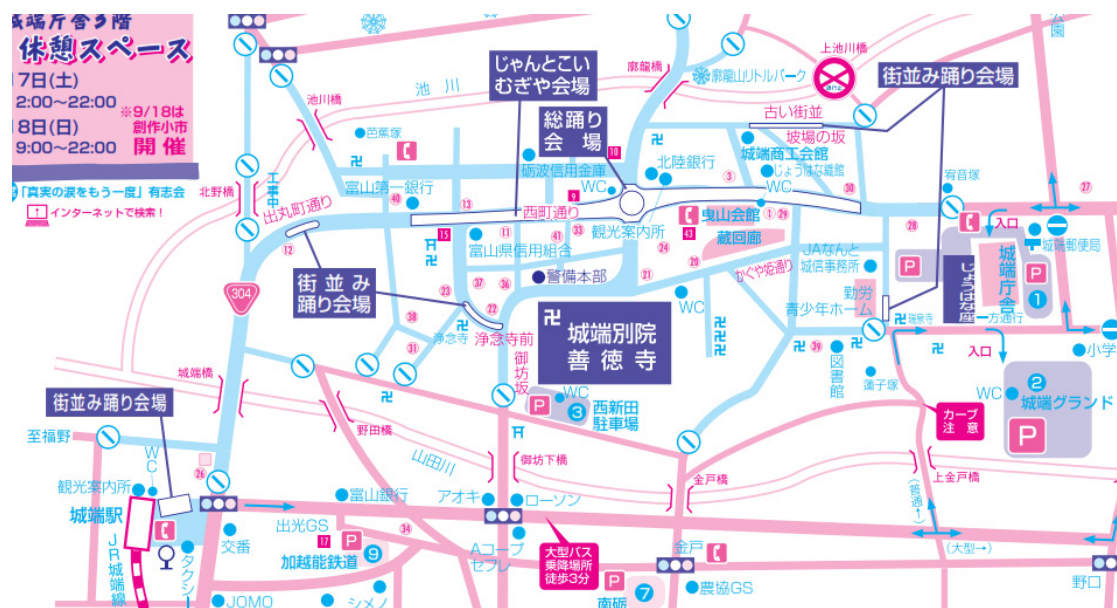


図 1. 第 61 回むぎや祭り会場地図

9 月 17 日 (土)

- 13:00 ~ 14:00 むぎや踊り講習会
- 14:00 ~ 21:15 むぎや踊り競演会
- 14:00 ~ 21:30 町並み踊り
- 14:30 ~ 22:00 「じゃんとこいむぎや」2011

13 時から 14 時まで、むぎや踊り講習会がじょうはな座前で行われる。その後、14 時から、むぎや踊り競演会と町並み踊りが始まる。むぎや踊り競演会はじょうはな座会場と城端別院会場で行われる。ここでは、むぎや祭に参加している全ての団体の踊りが披露され、各町の踊りのほかに越中五箇山麦屋節保存会や南砺総合平高校郷土芸能部など城端地区外から参加している団体の演技も行われる。町並み踊りでは、町の各地に設けられた会場で、主として各町の踊りが披露される。会場は駅前会場、出丸町会場、浄念寺会場、坡場の坂会場、瑞泉寺会場の計 5 か所である。各町の踊り手は午後 2 時から夜の 9 時頃まで各会場を回っていく。また、14 時 30 分から、「「じゃんとこいむぎや」」が大工町通りから西町通りの間で開催される。

9月18日(日)

- 9:00～14:45 麦屋節コンクール全国大会
- 13:00～14:00 むぎや踊り講習会
- 14:00～21:30 むぎや踊り競演会
- 14:00～21:30 町並み踊り
- 15:00～15:20 むぎや新歌詞表彰・披露
- 19:00～20:00 パレード
- 20:00～22:30 総踊り

この日は講習会や競演会、町並み踊りが続けられるほかに、麦屋節コンクール全国大会と麦屋節の新歌詞の表彰と披露などが行われる。また、夜の7時からのパレードでは城端の婦人会が中心となって、出丸町通りから大工町通りまで踊り歩く。婦人会とむぎや祭の関わりについては5章で詳しく述べられる。午後8時から、西町通りで総踊りが行われる。総踊りは、祭りの最終日に祭りの締めくくりとして行われるイベントであり、観光客も踊りに加わることができ、多くの人でにぎわう。

4-2. むぎや祭をとおして変化するコミュニティ

寺田 未佳

1. はじめに

私は、実習を行う前から、コミュニティをテーマにして調査を行いたいと考えていた。なぜなら、地域の中で人々がつながりあい、協力しあって生み出す力に強い魅力を感じていたからである。そこで、調査対象として城端の町が支えている「むぎや祭」を選択することにした。

近年、地域の祭では少子化や人口流出に伴う人手不足が問題となっている。城端のむぎや祭においても、人手不足は深刻な問題であり、むぎや祭に参加している町内のほぼすべてが、町外の人々に頼んで踊り子として参加してもらっている。私が調査を行った

のげまち
野下町も、子どもの踊り子の約 3 分の 1 が町外からの参加者であった。

祭に地域外の人たちが参加するということは、もともとは地域のコミュニティで行われていた行事に、新しい人々が加わるということである。祭りは参加者の共同によって成り立つので、祭りをおこなうためには、もともとの町内の参加者と地域外からの新しい参加者の間に緊密なコミュニケーションがなければならない。このようなコミュニケーションを通して、地域のコミュニティとは異なる祭りのコミュニティと呼ぶべき新しい集まりができていないのだろうか。言い換えれば、むぎや祭は、城端地区の住民にとって新しいコミュニティを生む機会となっているのではないだろうか。

このような問題意識をもとに、この報告では、まず祭の練習や祭り当日の様子などの説明を通して、祭が地域コミュニティにおいてどのような役割を果たしているかを明らかにする。次に、祭りの参加者や城端住民への聞き取りから得た語りをもとに、地域外の人々が参加する祭りによって、どのような集まりが形成されているのかについて考察したい。

2. 調査方法と調査地の概要

調査は野下町でおこなったが、祭りにかかわる人々への聞き取り調査だけでなく、参加者の視点からも祭を調査したいと考えた。そのために、野下町の踊り子としてむぎや祭に参加し、踊りの練習を観察するとともに、祭を実体験した。実際に祭に参加するためには毎日の練習が欠かせないため、祭りの前の 2 週間は城端に泊まりこんだ。夜は毎日踊りの練習に参加して野下町の祭に参加する人々を対象に聞き取り調査を行い、日中

は主に城端地区の他の町内で聞き取り調査を行った。

野下町は城端地区の南側に位置している。北端は城端別院善徳寺あたり、南端は城端中学校にまで広がる南北に長い形をした町である（図）。野下町は城端地区の中でも広い面積を持ち、人口も多い。野下町の世帯数は平成 23 年 9 月時点で 106 世帯、人口は男性 164 人、女性 161 人の計 325 人である。

3. 祭りの運営

野下町の祭の運営で中心となるのが「区長」、「区長代理」、「会計」の町内三役と呼ばれる人々である。町内 3 役の役職は運営委員に含まれる。その他にむぎや祭実行委員、舞台演出委員などの役職があり、表 1 のように多くの人々が運営に関わっている。

表 1．野下町のむぎや祭役員と人数

役職	役割	人数
顧問	祭の運営、監督	11 人
運営委員	運営の中心	8 人
むぎや実行委員	祭の運営	16 人
祭り競演会推進委員長	競演会の企画	1 人
企画委員	祭の企画	2 人
踊り指導者	踊り指導	12 人
地方指導者	地方指導	2 人
舞台演出委員	舞台の演出、出演	13 人
じょうはな座委員	じょうはな座公演での運営、管理等	8 人
屋台運営委員	屋台準備	10 人
児童指導委員	児童の踊り子の指導	3 人
行灯準備委員	行燈の準備	2 人
化粧衣装委員	踊り子の化粧、衣装の着付け	16 人
実行委員婦人部	飲食物準備、衣装準備等	3 人
会計委員	祭の会計	2 人

各役職に人数が割り当てられているが、いくつかの役職を兼任している人も多い。練習の指導や舞台演出の中心となるのは舞台演出委員である^{じかた}地方のメンバーである。地方というのは、踊りの際に曲を演奏する人々のことであるが、後で詳しく述べる。なお、婦人部は踊りの衣装の準備のほかに踊り子の確保も役割としている。

4. 踊りと地方の練習

野下町の練習は9月7日から始められ、本番前日の16日までの10日行われた。祭に参加する他の多くの町が4日から練習を始めているの比べると、少し遅いスタートである。しかしその代わりに、野下町では他の町が行っているような練習の中休みはなく、本番までの10日間毎日練習が行われた。

練習は野下町公民館の2階で行われ、午後7時30分から始まる。小さな子供から順番に練習がすすめられ、全体の終了は午後10時ごろになる。

練習は公民館だけでなく、じょうはな座でも行われた。じょうはな座は本番でも使われるステージで、ここでは踊り子の並びの間隔や地方との位置関係が確認される。また、練習最終日には稽古締めとして今までの練習の成果が町内の人に披露され、会場にはたくさんの野下町住民が集まっていた。

4-1. 踊りの種類

祭りで舞台に上がるメンバーは、大きく分けて踊り子と地方の二つに分けられる。まずは踊り子について説明する。踊り手となるのは3歳から30代くらいまでの野下町の住民である。踊りのグループは年齢によって6つに分けられており、それぞれに違った踊りを披露する。

まず、3歳から6歳までの幼児のグループは「ちびっこ手踊り」を踊る。これは、むぎや節に合わせて手踊りをするものである（写真1）。むぎや踊りは笠を使った踊りであるが、小さな子どもには笠の扱いが難しいため、最初は手踊りから始めることとなる。この踊りの振り付けはかんたんで、幼児たちでもすぐに覚えることができる。

小学校低学年の女子は「といちんさ」を踊る。これは、といちんさ節という民謡に合わせて踊るものである。この「といちんさ」も笠を使った踊りではなく、手踊りである（写真2）。以前は踊り子として小学校6年生までの女子が参加していたようだが、現在は子どもの数が少ないため高学年の女子は笠踊りに回され、4年生までの参加になっている。また、この踊りは野下町ではしばらく演じられていなかったが、おととしから復活した。はじめにでも説明したようにこの、「ちびっこ手踊り」と「といちんさ」に参加している子どもの約3分の1が町外からの参加である。



写真 1.ちびっこ手踊りの練習



写真 2.といちんさの練習



写真 3.むぎや笠踊り（男子）の練習

小学校低学年から中学生の男子は「むぎや笠踊り（男子）」を踊る。（写真 3）この年代のグループから、笠を使ったむぎや節を踊ることになる。男子は「といちんさ」を踊らないため、笠踊りを始める年齢が早い。小学生から中学生までの子どもたちは全員このグループで踊ることになる。

次に、小学校高学年から中学生の女子がむぎや節に合わせて笠踊りを踊るのが、「むぎや笠踊り（女子）」である。女子もこのグループから笠を使った踊りになる。

高校生以上の男子が参加するグループは「一般男子」と呼ばれる。このグループはむぎや節と古代神という民謡の 2 曲を踊る。今年参加していたのは 20 代から 30 代の男性の計 6 名で、高校生の参加はなかった。高校生以上の女子が参加するグループは「一般女子」と呼ばれる。一般女子が踊る曲数をもっとも多く、むぎや節、古代神、四つ竹節の 3 曲を踊る。私が加わったのはこのグループである。20 代から 30 代の女性計 7 名が参加した。本番前の 5 日間の練習は着物に慣れるため、浴衣を着て行われた。

練習はちびっこ手踊りから始まり、その後にといちんさ、むぎや笠踊り（男子）、むぎや笠踊り（女子）、一般男子、一般女子の順に練習を進めて行く。練習時間は各グループおおよそ 20 分である（表 2）。

表 2. 練習のタイムスケジュール

19:30	ちびっこ手踊り
19:50	といちんさ
20:20	むぎや笠踊り（男子）
20:50	むぎや笠踊り(女子)
21:10	一般男子
21:30	一般女子

むぎや祭では一つの町内が約 30 分の発表となる。実際の発表でも練習と同じ順番で、小さい子どもから順番に舞台上で踊りを披露していく。

むぎや祭の特徴として、小さな子どもから大人までの年齢の幅のある踊り手の踊りを見ることができるということがある。踊りは小さな子どもから順番に踊ってゆくため、観客は次第に円熟した演技を見ることになる。

4-2. 地方の練習

地方は主に 30 代から 40 代の男性で構成されている。構成メンバーは歌い手、三味線、胡弓、太鼓、四つ竹である。四つ竹というのは打楽器の一種で、長方形の竹片を両手に握り、カスタネットのように打ち鳴らして演奏する。

地方の練習は公民館の 1 階で行われ、練習期間の前半は踊り子たちと別で練習を進める。その後、じょうはな座の練習が終わった 12 日ごろから地方と踊り子合わせての練習となった。地方は踊り子を卒業した男性が引き継いでいくため、踊りに関してもベテランである。踊り子の練習の際には地方の男性もアドバイスをしていた。

また、地方の練習の際には当日の演奏者の練習だけでなく、後継者の育成も行われる。一般男子の踊り子は踊り手として引退した後、地方として活躍していくため、祭の期間中に踊りの練習と同時に歌や楽器の練習も行っていた。

4-3. 練習とコミュニケーション

野下町の練習は非常に和気あいあいとした雰囲気で行われる。練習の際には「楽しんで」という言葉が多く聞かれ、うまく踊ること以上に参加者に楽しく踊ってもらうことを重視しているようであった。また、小さな子どもたちは町内の祭役員の人からきちんと挨拶するように指導され、練習は同時に子どもたちのしつけの場ともなっているようであった。参加している子どもたちは地元の子も町外の子も関係なく、みんな真剣な表情で練習に取り組んでおり、練習中にふざけている子どもは一人も見なかった。

踊りは小さいころから順を追って教えられていくため、年齢が上がるほど多くの踊りを踊れるようになる。そのため、「といちんさ」を踊ったことのある中学生の女子が小学生に「といちんさ」を教えるなど、子どもたちの間でも学年を超えてのコミュニケー

ションの場となっている。また、町内外から参加する幼児の練習の際には、そばで見学している母親同士の会話も見られ、大人の間でも町内と町外の交流の場となっているようであった。ただし、最初は穏やかな雰囲気が進められていった練習であったが、本番が近づくと緊張感が増して、指導者の厳しい声も聞かれるようになった。

4-5. 指導

野下町で踊りの指導を行っているのは主に 20 代後半から 30 代後半までの男女である。これは他の町内と比べて若く、野下町の特徴と言える。その中でも中心となっているのが、20 代後半の女性指導者である。この指導者の女性は野下町出身で、複数の舞踊を習っており、踊りに関する豊富な知識を持っている。そのため、若い年齢ではあるが指導を受け持っている。

ちびっこ手踊りとむぎや笠踊り（男子）の練習は他の指導者が教えるが、その他の踊りはすべてこの女性指導者が担当している。一般男子の練習では、元踊り子の地方の男性たちがアドバイスすることもあるが、基本的には女性指導者が指導していた。男子の踊りに関しても女性が指導しているのは、他の町内と比べると珍しい。この女性指導者の他にも、一般女子で参加している 20 代後半の女性が指導に加わっていた。また、踊り際にはフォーメーションを付けるのだが、その案も若い人が中心となって考えていた。練習の指導に年長者が関わることはあまりなく、指導は若い人材に任せていた。

4-6. 飲み会

野下町は練習が終わった後に公民館で毎日飲み会が開かれる。参加者は主に地方の男性、一般男子の踊り子である。たまに一般女子の踊り子、女性指導者も参加していた。他の町内でも、練習の中日の前日や稽古締め後に飲み会が開かれることはあるが、毎日行われるのは野下町だけである。

飲み会に参加していた 60 代の男性は、「飲み会の場でないと言えないこともある。飲みがあるから祭に参加しているようなもの。この飲みの方が、（町内の）仲間のつながりを強くしている」と語る。また、地方の 30 代男性は「昔は練習自体が楽しかったけど、今は練習が終わった後にみんなで飲めるのが楽しい。祭の時期でないとこんなにみんなが集まることはないからね。祭の時期が終わって早く家に帰ると物足りない気分になる。」と語ってくれた。飲み会の参加者は 20 代から 60 代くらいまでと幅広く、年齢の壁を越えた交流が生まれているようであった。

これらの語りや飲み会に参加している人々の楽しそうな様子から、毎日の飲み会が祭の運営の中心となるコアメンバーのつながりを強化していると言えるだろう。

5. 祭の役割

野下町の練習の様子からもわかるように、祭りは地域の人々のつながりを強化する機

能があると言える。そのことは、次の城端の人々の語りからもうかがえる。

野下町のある 30 代の女性は「祭があることで、あの人が今何やっているかがわかるし、祭があるから人とのつながりができる」と語る。出丸町の 60 代の女性は「祭はみんなで協力しないとできないことだから、自然とみんなのつながりが強くなる」と語る。さらに西新田町の 50 代男性も「祭では町内の結束力が強まる。お祭がないとばらばらになってしまう」と話す。

これらの語りからも、祭は普段出会わないような人と出会ったり、人々のコミュニケーションの場を提供したりすることで、町内の結束を深める役割を果たしていると言える。さらに、むぎや祭は子どもから青年、老年層まで幅広い年齢の人が参加するため世代を超えた交流が行われている。小学生と中学生と一緒に練習したり、20 代と 60 代の人と一緒に酒を酌み交わしたりするのも、祭だからこそ生まれるコミュニケーションである。さらに、町外の子供が祭に参加することで、子どもどうし、さらに親どうしの町内外の交流が生まれている。

6. 祭りの流れ

6-1. 1 日目

6-1-1. 行燈製作

1 日目の朝は行燈の製作から始まる。役員の男性たちが朝 6 時に公民館に集合し、行燈の製作と設置が行われる。行燈には祭に協賛しているスポンサー名が記入しており、祭期間中に町のあちこちに設置される。今年の野下町行燈は 6 本であった。多い時には 30 本ほどあったそうだが、年々数が減っているという。製作には約 30 名の男性が参加していた。踊りの練習の際はあまり関わっていなかった町内の年長者が、製作の中心となる。行燈は横に長く、三角柱の形をしている。行燈の骨組みは閉じた状態で保管しており、それを開いて三角形の底辺の部分に添え木を打ち込んでゆく（写真 3）。その後、広告の入った紙を上からかぶせ、その上から防水のためのビニールシートを貼れば完成である。完成した行燈は町内の道路の上に設置される（写真 4）。設置はすべて手作業で行われる。脚立にのぼり道路の間に鉄線を渡してそこに行燈を釣り下げるといふ非常に大変な作業である。今年雨が降っていたため、足元の悪い中で合羽を着ての作業となった。



写真 3.添え木の打ち込み作業



写真 4.路上に掲げられた行燈

6-1-2. 踊りのタイムスケジュール

野下町の1日目の踊りのタイムスケジュールは以下の通りである。

14:30	じょうはな座
16:00	別院会場
17:30	駅前会場
18:30	坡場の坂会場
20:00	瑞泉寺会場

むぎや祭で町内団体が踊りを披露する場合は、大きく分けて「むぎや踊り競演会」と「町並み踊り」の2つに分けられる。じょうはな座会場と別院会場で行われるのが「むぎや踊り競演会」でそのほかの会場で行われるのが「町並み踊り」である。競演会は会場も広く、踊りそのものを見て楽しんでもらうという意味合いが強い。一方、町並み踊りは城端の名所で行われ、踊りと同時に情緒ある町の様子を楽しんでもらおうという意図が感じられる。また、観客と同じ目線に立って踊り、観客との距離も近いことからより踊りを身近に感じられるステージである。

今年の野下町のタイムスケジュールは2日間の両日とも先に競演会会場を回り、その後町並み踊り会場を回る順番になっていた。

6-1-3. じょうはな座会場

野下町の最初の出番は、午後2時30分からのじょうはな座であった。踊り子は着付けを済ませ、公民館に午後1時30分に集合した。むぎや祭ではそれぞれの町内で着る着物の色が違う。野下町は薄いオレンジ色の着物であった。着物を着ると、ついに本番という実感が増し、緊張した。全員が集合したことを確認すると、じょうはな座に向けて出発する。移動はすべて徒歩で、屋台の先導に続いて移動する(屋台については後ほど詳しく記載する)。じょうはな座に到着すると、駐車上は満車の状態である。野下町

はじょうはな座での2番手の発表であったが、会場はすでに満席のようであった。その後、控室に通された。控室ではステージの様子をテレビで確認することができる。そこから舞台そでへと移動し、本番を待つ。舞台そででは前の町内が踊っている曲に合わせて各自踊りの最終確認をしていた。町内の人も緊張しているようである。いよいよ本番である。公演の際の司会はじょうはな座の職員ではなく、その町の人が行う。野下町では地方の歌い手の男性が司会を行った。ちびっこ手踊りから始まり、といちんさ、むぎや笠踊りと約30分の演目は無事終了した。

6-1-4. 別院会場

じょうはな座での公演の後は別院会場へ移動する。別院に着くとまず入ってすぐの広間で待機する。待機中には踊り子に飲み物やお菓子が配られる。その後本堂に移動し本番を待つことになる。広間と本堂という控えの場所が二つ設けられているのは、各町内の出入りをスムーズにするための工夫である。別院会場はじょうはな座と違い外のステージのため、雨が心配された。本番は小雨が降っていたものの、何とか最後まで踊りきることができた(写真5)。しかしその後の町並み踊りは、天候不良のため中止となってしまった。他の会場は屋根がなく、衣装や楽器がぬれてしまうため雨の場合は公演中止となるのだ。この日は別院での出演が終わった後、公民館に戻り夕食を食べて解散となった。



写真 5.別院会場での公演の様子

6-2.2 日目

2 日目の踊りのタイムスケジュールは以下の通りである。

15:30	じょうはな座
16:30	別院会場
17:30	出丸町会場
18:30	浄念寺会場
20:00	瑞泉寺会場

2 日目は天候に恵まれ、スケジュール通りに公演が行われた。この日は気温が非常に高く、舞台では踊り子たちみんなが汗だくになっていた。

じょうはな座や別院会場の様子は 1 日目とほぼ同様なのでこの項では割愛し、ここでは町並み踊りについて詳しく説明することにする。

6-2-1. 町並み踊り

町並み踊りでは出丸町会場、浄念寺会場、瑞泉寺会場の 3 つの場所を回った。一つ一つの会場は小さなものであるが、たくさんの観光客が見に来ていた。移動中は町内の人みんなが和気あいあいと話しており、非常にリラックスした状態だった。そのおかげか、町並み踊りの舞台では競演会の舞台より緊張せずに踊れた。また、町並み踊りの会場は各場所で雰囲気が違うため毎回違った気持ちで踊ることができた。町内の人々も、町並み踊りではより生き生きと踊っているようであった。夜になると会場に明かりがともされ祭の雰囲気がより一層高められる。踊る側も疲れがたまっているにも関わらず、気分はより高揚しているようであった。

午後 8 時半ごろ、すべての公演が終わり公民館に戻ってくると、最後の踊りが披露される。これは野下町の町内の人に向けての踊りで、公民館の前にシートを敷き、踊り子全員でむぎや踊りを踊った。公民館の前には町内の人がたくさん集まり、私も野下町の一員としての一体感を感じることができた。

6-3. 屋台

踊り子や地方が各会場に移動する際には、屋台の先導にしたがって移動する。この屋台は各町内が持っており、屋台の前面についている提灯には各町の名前が記入してある。屋台の両側にはロープがついており、踊り子たちはこのロープの間に入って移動する（写真 6）。これは小さな子どもの踊り子が、町内の集団からはぐれないようにとの工夫である。



写真 6.屋台に先導され移動する踊り子たち

7. むぎや祭に対する住民の語り

ここまでは祭の練習と当日の流れについてみてきた。ここからは、むぎや祭に対する住民の語りを紹介しながら、むぎや祭における人々のコミュニティがどのように変化しているのかを考察する。

7-1. 以前のむぎや祭の様子

むぎや祭におけるコミュニティの変化を見るため、まず、かつてのむぎや祭がどのような様子であったかを調査した。東下町の40代の女性は以前の祭の様子に関して、「昔は自分の町内だけで（踊り手の人数は）事足りていた」と語る。また、新町でむぎや祭の役員をしている60代の男性は「昔は子どもがたくさんいたから、踊り手は上手い下手で選別されていた（オーディションがあった）。だから、舞台に出られることがとてもうれしかった。」と話す。

これらの語りから、以前は町内に踊り手がたくさんいた様子がうかがえる。また、高い技術を持った人を舞台出演者として選ぶことができたため、より洗練された踊りを披露することができたと言えるだろう。

さらに、祭は城端の旧町の人々にとって、アイデンティティの確認の場でもあったようだ。野下町の祭り役員である30代の女性は「子どもの頃、むぎやの次の日はわざと化粧を落とさないで、髪もそのままにして学校に行った」と恥ずかしそうに話してくれた。子どもたちにとって、むぎや祭は特別なものであり、祭に出られるということが旧町民のとしての誇りであったようだ。また、祭の参加地区外である野田地区に住む60代の男性は「むぎやは（旧）町内だけの祭だった。（今のよう）に里の者が祭に出られるなんて思いもしなかった」と話してくれた。「里」は、冒頭の地域の概要で記されているように、城端の旧町から見た農村部を指す言葉である。

祭におけるアイデンティティの確認という役割は、現在の祭でも存在している（次節

の報告で詳しく述べられる)。しかし、完全に町内の人々だけで行われていたかつての祭では、このような役割がより強く人々の中で意識されていた。そして、そのことがむぎや祭は旧町の町内の祭という意識を生み、町外からの参加を生みにくいものにしていったようである。

7-2. 現在のむぎや祭の様子

一方、現在のむぎや祭は、多くの町で子どもの減少による踊り子不足が生じている。西下町のある70代男性は、「昔は人集めをしなくて良かったのに、今はお願いしますと頼んでいる」と祭の現状を寂しそうに語った。また、東新田町の60代男性は「人が足りないと、(祭に)出られればいいという気持ちになる」と語る。先述したように、町内に踊り手がたくさんいたころは、オーディションを行い、演者を選ぶことができた。しかし少子化が進んでいる状況では、高い技術の踊りを見せること以前に祭に参加することが目標になってしまっている町もある。さらにこの男性は「町内だけでできるだけまかなうようにしたい。人数が少なくても(町内の人間だけで)出そう、と言う人もいる」と続けて言う。このように、踊り子の技術低下を懸念する声や、外から助っ人を呼んでまで町内として祭に参加する必要があるのかという語りもある。

また、一昨年からむぎや祭への参加をやめた東下町の60代男性は「むぎやは人集めや衣装で婦人部の負担が大きく、婦人部が高齢化している町内ではなかなか続けられない」と話す。踊り子の確保や衣装の準備、練習の際に出される飲食物の準備など、祭における婦人部の役割は大きい。その婦人部が人手不足だと、祭の運営は難しいものとなる。婦人会は参加者の高齢化や登録者の減少が進んでおり(5章参照) これからの祭運営がより困難となることが予想される。人手不足は踊り子だけでなく、運営する人々の中でも問題となっている。

このように、現在のむぎや祭では、町内の人手不足に起因するさまざまな問題が生じている。祭への参加をやめた町があることを考えると、祭りの存続にとって状況は深刻だと言えよう。

8. 町外からの参加者の語り

このような人手不足を賄うため、多くの町で町外から踊り子の助っ人を頼んでいる。野下町の踊り子で、町外から助っ人として来ている子どもの親に参加の理由を尋ねると、「子どもの友達つながりで誘ってもらった。是非にということで参加させてもらった。こちらにも祭に参加できてうれしい」ということであつた。県外や市外から城端に移り住んできたという親からは、「むぎやは歴史もあるし、有名なお祭だから参加できるのはうれしい」という声が聞かれた。祭に参加している子どもたちも、非常に楽しそうに祭に参加していた。

また、町外の親の中には「自分からお願いして子どもを出させてもらっている」という30代の女性もいた。その理由を尋ねると、「わたしは町外に住んでいて子どもの時にむぎやに出られなかったから。今祭に出られる自分の子どもがうらやましい」と話す。このような語りは他の町内でも聞かれ、東下町の40代の女性は「(今のよう)人が足りないから出てくれと言われるのはうらやましい。昔は考えられなかった」と話していた。

これらの語りから、町外からの参加者は、人手不足という現状から新しく祭に参加するようになったが、祭に加わることに喜びを感じている様子がうかがえた。さらには、この現況がかつて祭に出たくても出られなかった町外の人々にとって、祭に参加する新しい機会となっていることがわかった。現在のむぎや祭は町内の人からの「踊り手が欲しい」というニーズと、町外の人々からの「祭に出たい」というニーズが合致している状況と言えるだろう。言いかえれば、かつて地域コミュニティで行われ、外部の者が加わりづらかった祭りが、より町外に開けた祭に変化しつつある状況を生み出していると言える。そして、そのような状況の中で、町内の人々と町外の人々の間に交流が生まれ、地域コミュニティとは別の祭りという非日常的な行事に参加する人々の地域の枠組みを超えたコミュニティが生まれようとしていると考えられるのである。

9. 地域全体としての祭

また、町外から参加している子どもの親からは「(祭りに)ほかの地区の人が出ると、その地区の人も見に来る」という語りが得られた。子どもが祭りに出ると、その祖父母や親戚まで祭を見に来るのだという。つまり、助っ人の参加は、今まで祭りに見に来ていなかった人々も祭りに引き寄せ、遠い存在だったむぎや祭を身近に感じる機会を生み出しているのである。このような状況が続いていくと、やがて、むぎや祭はより範囲の広い、「里」の人々や移入者を含めた城端地域全体の祭として、参加する人々に認識されていくのではないだろうか。

実際、むぎや祭を今までのような地域コミュニティの祭ではなく、城端地区全体の祭として捉えようという考え方は町内からも聞かれた。西下町の70代男性は「城端で祭をするのなら、村部の人と呼ばなければだめ。城端の人みんなでやらなければ。これからは他の町の人と協力して、交流して踊り続けなければならない」と語る。先に紹介した野下町の女性指導者も「(むぎや祭は)旧町だけでなく、城端地区全体の祭としてやっていくべき」と話す。

むぎや祭を機縁とする人々のつながりは今後さらに広がっていき、旧町だけでなく、地域全体の祭として行われていくことが十分に予想されるのである。

10. まとめと考察

以上のことを踏まえ、城端むぎや祭でどのようなコミュニティの変化が見られるのか考察したい。

かつてのむぎや祭は地域コミュニティで行われるものであり、祭において町外の人々と交流することはあまりなかった。しかし、現在の人手不足の状況により、町外から新しい参加者が加わることで祭が開けたものに变化し、地縁をもとにする地域コミュニティとは別の祭りを機縁とするコミュニティが生まれつつあることが分かった。

しかし、現在祭りに新しく加わっている人々は、ほとんどがまだ小さな子どもであり、祭りのコアメンバーと呼べる存在ではない。子どもたちの親についても、祭りの運営自体に関わっている人は少なく、日常的にも町内と町外の人々の間には町内に見られるような密接な交流は見られない。さらに、町外から踊り子を入れることに批判的な意見があることを考えると、生まれつつある新しい祭りの形は、すべての旧町の住民にとって受け入れられたものではないようである。つまり、祭を通して人々の中に新しいつながりはできたが、深い結びつきを持った共同体と呼べるまでには成立していないと考えられる。現在の城端のむぎや祭は、旧町の祭りから城端全体の祭りへの変化期にあると言える。町外からの参加に批判的な意見があるとはいえ、この先むぎや祭を続けていくためには、外部からの参加が必要不可欠である。また、先ほども述べたように、むぎや祭が地域全体の祭として認識されていくことによって、従来の地域の枠を超えたより広いコミュニティへと変化が進んでいくとも予想される。祭りには人々の間のつながりを強化するという機能があり、現在は町内と町外の人々の間に深い結びつきは見られないが、今後、継続的に町内と町外の人々が祭りで関わっていくことによって、結びつきが強化されていくだろう。また、町外から参加している子どもたちが成長し、町内の人々とともにコアメンバーとなって祭を運営していく可能性も十分に考えられるのである。

ただし、野下町では、子ども同士のつながりや、町外から自ら進んで祭に参加した人がいたことから比較的スムーズに外部から人集めができたが、祭への参加をやめた地区があることを考えると、どこの地区でも町外との連携がうまくいくわけではない。婦人部の人員の不足など、その地区の状況により人手の確保が困難な町もある。しかし、聞き取りからわかるように、そのような町でも、祭りに参加したいという希望は存在している。祭りの存続と運営という面から見ると、祭りに参加したいというニーズと町内の人手が欲しいというニーズを合致させる体制が構築されていないことが問題であろう。今後むぎや祭が存続していくためには、町外との連携を組織的におこなう仕組みの整備が必要不可欠となると考えられるのである。

謝辞

今回、むぎや祭の調査を行うに当たり、たくさんの方々のお世話になりました。まったく踊りの経験がなかった私を、踊り子の一員として暖かく迎えてくださった野下町の皆様。長期の合宿で大変なご迷惑をかけたにもかかわらず、家族の一員のように接してくださった大村家の皆様。本当にありがとうございました。そして、調査に快く協力してくださった城端のすべての方々に感謝申し上げます。こうしたたくさんの方々のおかげで調査を行うことができました。城端での調査を通して得た経験は、私にとって一生の財産となることと思います。

本当に、ありがとうございました。

4-3. むぎや祭が持つ楽しさと束縛

羽鳥 良斉

1. はじめに

1-1. 問題

「むぎや祭の概要」の歴史の章からわかるように、(1)むぎや祭は歴史が浅く、(2)五箇山から借りてきた祭りであり、(3)商工会という組織によって始められた。以上の三つの点から見ると、むぎや祭は、城端の住民のアイデンティティを確認できるような、城端の住民に根付いた、伝統的な祭りではないということになる。しかし、実際には、むぎや祭を「守っていかなければならない伝統」として認識している住民も多い。歴史が浅く、地域に元からあった祭りではなく、また組織主導で始まった祭りであるにも関わらず、住民たちがむぎや祭に愛着を持ち、継承してきたのはなぜなのだろうか。

この報告では、「むぎや祭に対する愛着と継承」に焦点をあてて、住民が感じているむぎや祭の楽しさと続けていかなければならないという精神的な束縛について、人々の語りを通して考察していきたい。

先に「束縛」という言葉について補足を加えておきたい。本稿で祭りが人々を「束縛」とすると表現するとき、「人々はしかたなく祭りを続けている」という意味ではなく、祭りが「伝統」となることによって持つ力に人々が主体的に関わっているということを表している。むぎや祭を継承していくためには多くの人手と労力が必要であるが、それでもむぎや祭を継承していきたいという住民たちの想いを、「束縛」と表現しているのである。

1-2. 調査方法

私は「城端の住民がなぜむぎや祭を継承させていこうとするのか」ということについて、「むぎや祭の楽しさ」や「むぎや祭に参加する際の問題点」などの質問をし、聞き取り調査を行った。

また、調査の一環として、住民が感じているむぎや祭の楽しさを実感するために、西下町の踊り手として参加した(写真1)。西下町では、踊りの練習が9月5日から16日まで、西下町の公民館で行われたが、私は、9月5日から20日まで、城端に泊まって、昼間は聞き取り調査を行い、夜は公民館に行って踊りの練習に加わった。



写真 1. 踊りの指導を受ける筆者

2. 調査地の概要

西下町は、駅から歩いて 10 分程度のところに位置する。人口は男性 59 名、女性 71 名、総数 130 名で、世帯数は 51 世帯である。西下町の公民館のすぐ近くには、むぎや祭の町並み踊り会場にもなっている浄念寺がある

3. 西下町の祭りの運営

3-1. 運営組織

西下町の祭りの運営組織は、大きくわけて運営部、出演部、世話方の三つに分かれる。まず、運営部はその名のとおり、祭りの運営に関わる部門であり、表 1 に示した役職で構成されている。表の中の「三役」とは、区長、副区長、会計である。ただし、婦人会三役では、副区長と会計を兼任しているので、人数は二人となる。

表 1. 西下町の運営部の役職と人数

委員長	1 人
副委員長	2 人
会計	1 人
若連中三役	3 人
婦人会三役	2 人
指揮誘導	6 人
町並み踊りアナウンス	2 人

次に、出演部とは、地方と踊りの出演者である。それぞれの人数については表 2 に示

した。なお、ここには高校生以下の者は含まれていないので、高校生以下を含めると、踊り方は 40 人いる。

表 2.西下町の出演部の役職と人数

唄方	5 人
三味線(写真 2)	3 人
太鼓	1 人
四ツ竹 (写真 2)	1 人
踊り方	男性 10 人 (筆者含む) 女性 5 人



写真 2. 三味線(左)と太鼓・四ツ竹 (右)

世話方は、その名のとおり、出演者の世話をする人たちで、表 3 の役割に分かれている。下の表の中の「化粧方」は、化粧方の 1 人に、婦人会三役の 2 人、婦人会の中の役員である「はしり」と呼ばれる 5 人の連絡係の計 8 人が担当する。化粧方は、踊り子の化粧を担当する。

表 3.世話方の役職の人数

男性踊り指導	7 人
女性踊り指導	4 人
唄方指導	1 人
化粧方	1 人 婦人会三役 はしり
着付け	1 人
世話方	婦人会

3-2. 踊りの演出

むぎや祭に参加する町ごとに、踊りの構成は異なる。西下町の踊りの演出は以下のようになっている。

表 4.西下町の踊りの演出

1.	中学生女子と大学生男子による「古代神」
2.	幼稚園年中から小学二年生の手踊りと、 小学三年生から六年生の麦屋節の傘踊り
3.	一般女性と一般男性の麦屋節
4.	一般女性と一般男性の「古代神」

それぞれの踊り方の人数は以下のとおりである。

表 5.踊り方の人数

幼稚園年中から小学二年生の麦屋節手踊り	13 人
小学生男子麦屋節傘踊り	4 人
小学生女子の麦屋節傘踊り	4 人
中学生女子の古代神中学生女子古代神	3 人
一般女性の麦屋節一般女性麦屋節、古代神	5 人
一般男性の麦屋節一般男性麦屋節、古代神	10 人

この踊り方のうち、半分以上が町外からの助っ人であり、とくに幼稚園、小学生、中学生はほとんどほかの町からの参加者である。また、大人では、祭り当日の日に仕事が入る住民もいるので、二日間のうち、どちらか一方の日だけに出る人もいる。

4. 練習の様子

練習は 19 時 30 分から、西下町の公民館で行われる。練習は、幼稚園から小学二年生までの手踊りから始まり、小学生の麦屋節、中学生の古代神、一般女性、一般男性の麦屋節、古代神という順番で行われる。終了は、21 時 30 分から、22 時の間である。練習はおよそ 30 分間隔で行われる。たとえば、小学生が 15 分踊って、5 分休憩して、10 分踊って、練習が終了する。そして、次に中学生が練習を始める。

練習ではラジカセを使って、流れる音楽に合わせて踊る。むぎや祭が近くなると、別の場所で練習していた地方も公民館に来て、地方の唄と演奏に合わせて練習するようになる。前節で報告されている野下町の場合と異なり、基本的に、男性には男性の指導方が指導し、女性には女性の指導方が指導する。

ここからは、世代別に練習の様子について見ていきたい。

4-1. 幼稚園から小学二年生の「麦屋節」の手踊り（19 時 30 分）

練習は 19 時時 30 分から始まる。まず、子どもは正座をし、指導方に「よろしくおねがいします」と挨拶をする。

子どもたちは、指導方の後ろに並び、指導方の踊りを真似しながら踊る（写真 3）。休憩の間、子どもたちは踊りの練習をしたり、走り回ったり、親のところで休んだりする。約 5 分間の休憩が終わると、練習が再開される。今度は 10 分踊って、その日の練習は終了となる。

子どもたちは、練習初日の一回目の踊りではほとんど踊ることができていなかった。しかし、二回目の踊りでは一回目の踊りと比べると、見違えるほど上手く踊れるようになっていた。見学していた私の横に座っていた、60 代男性の OB は「（もっと小さい）子どものときから踊ってるから、（音楽と踊りが）体に染みついとるんやね」と語っていた。

子どもたちは、練習が終わると、練習が始まるときと同様に正座し、指導方に「ありがとうございました」と言って挨拶をする。その後、婦人会のメンバーが子どもたちにお菓子を配って、子どもたちは帰宅する（写真 3）。



写真 3. 練習の前と指導方にならって踊る子どもたち

4-2. 小学生の「麦屋節」(20 時)

小学生の笠踊りは 20 時から始まる。手踊りと比べると、指導は厳しい。音楽に合わせて笠を止める位置やタイミング、視線、立ち位置などを、指導方や地方が指摘する。小学生の表情は真剣で、厳しく注意されても嫌がることなく練習に打ち込んでいた（写真 5）。日によって異なるが、二回踊って、休憩をはさみ、また二回踊って練習は終わる。



写真 4. 小学生傘踊りの練習風景

4-3. 中学生の「古代神」

西下町からむぎや祭に参加する中学生はいない。ほかの町から三人の女子中学生が「助っ人」として祭りに参加している。住民は踊りの演出を考える際に、舞台上の人数を非常に気にする。踊り手の人数が少ないと、舞台が寂しく見えるからである。今年は中学生が3人だけと出演者が少なかったので、調査をおこなっていた私も、西下町出身の大学生2人と一緒に踊ることになった。

4-4. 一般男性と一般女性の「麦屋節」と「古代神」

まず、麦屋節の笠踊りの練習から始まる。西下町の笠踊りの特徴として、「チンバタ」と呼ばれる、ほかの町では踊られていない麦屋節の笠踊りがある。正式名称は文句入り麦屋節という。「チンバタ」とは、「チンチンバタバタ羽うちそろえて」という、文句入り麦屋節の歌詞が由来となっている。通常、麦屋節の歌詞は、七・七・七・五の韻を踏む。しかし、この麦屋節は韻を踏んでおらず、字余りの歌となっている。

一般男性、一般女性は城端で子どもの頃からずっと踊っているため、踊りは完璧に踊ることができる。指導方は「踊りの上手さは三段階にわかれる」と言う。「小学生は周りに合わせて踊る。中学、高校生は曲に合わせて踊る。大人はかっこつけて踊る」。つまり、大人になると踊りを覚えるための練習ではなく、踊りに自分なりの工夫をいれる練習をおこなう段階になるのである。

しかし、一般男性、一般女性に属する人たちが全員「かっこつけて踊る」練習をするわけではない。西下町には、私以外に、男子大学生が2人いる。大学生は一般男性のグループに含まれるが、クラブ活動などで忙しくなる高校時代に踊らなくなることが多いので、指導方や地方や若連中から踊りをもう一度指導される。一般女性でも、ほかの町から参加している人たちは、踊りを覚えなければならない。

5. むぎや祭当日の流れ

5-1. 祭り一日目（9月17日）

祭りの一日目の9月17日の西下町の祭りの流れは以下の表のとおりである。

表 6. 西下町の9月17日のタイムテーブル

11:00	踊り方化粧
14:30	公民館集合
15:00	浄念寺前町並み踊り
16:15	じょうはな座
17:45	城端別院舞台
18:30	公民館で夕食
19:30	瑞泉寺会場
20:00	はば 坂場の坂会場

この日は雨が降っていたため、ほとんどの会場で踊りが中止になった。しかし、浄念寺前町並み踊り会場（この章の1節 むぎや祭の概要を参照）には、すでに多くの観光客が集まっていた。そのため、小雨の降る中ではあったが、西下町は会場で踊りを披露した。浄念寺前町並み踊り会場は、坂になっているので多少踊りにくい、石畳なので、小京都と呼ばれる城端の雰囲気がよく出ている会場である。

次に、じょうはな座まで移動する。じょうはな座では屋内で踊るため、雨天でも踊りに差し支えはない。舞台袖で待機している間、出演者に緊張している様子はなかった。しかし、じょうはな座の舞台は、非常に滑りやすい。そのため舞台袖に濡れ雑巾が置いてあり、出演者はそれで足袋を濡らして、滑らないようにしていた。

次に城端別院舞台まで移動する。雨が降り続いていたため、見物客は少なかった。途中で雨が強くなり、30分ほど中断したが、無事に最後まで踊ることができた。

この日は、城端別院舞台での踊りが終了した時点で、ほかの会場の踊りがすべて中止となった。公民館で夕食を食べ、この日は解散となった。

5-2. 祭り二日目（9月18日）

2日目の9月18日の西下町の祭りの流れは以下のとおりである。

表 7.西下町の9月18日のタイムテーブル

10:30	踊り方化粧
14:00	公民館集合
14:30	四ツ角町並み踊り
15:00	出丸町会場町並み踊り
16:45	じょうはな座
18:10	城端別院会場
19:30	駅前会場町並み踊り
20:00	浄念寺前町並み踊り

この日は朝から晴れ、踊っていると汗をかくほど暑かった。午後2時に公民館に集合した後、四ツ角町並み踊り会場へと移動する。304号線に面する、西下町にあるスーパーマーケットの辺りがこの会場となっている。

午後3時から出丸町会場に移動する。この会場は舞台の背後に山が見える。そのため、天気が良ければ背景とあわさって美しい舞台となる。

午後7時をまわって城端座別院舞台が終わると、幼稚園児から小学二年までの子どもたちは解散となり、残りの踊り手は駅前会場へと移動して踊る。最後に、浄念寺前町並み踊り会場で踊り、これで、西下町はすべての会場での踊りを終えた。

浄念寺前町並み踊りが終わると、打ち上げ会が始まる。この打ち上げ会のことを住民たちは「西下町の祭り」と言い表していた。住民は道に椅子と机を用意して、思い思いに料理を食べたり、酒を飲んだり、踊ったりする。また、観光客が西下町の町の祭りに加わることもある（写真6）。

この場では、普段三味線を弾いたことがない住民が三味線を弾いたり、唄方ではない人が唄を歌ったりする。私も四ツ竹を地方の演奏に合わせて打ち鳴らした。この「西下町の祭り」は午前0時ごろまで続いた。



写真 5. 「西下町の祭り」と観光客と踊る様子（右）

6. むぎや祭の継承

「はじめに」で述べたように、むぎや祭は地域に根付いた祭りではない。しかし、それに関わらず、むぎや祭は 61 年もの間継承されてきた。ここからは、住民が感じているむぎや祭に関する語りを整理して、「むぎや祭はなぜ継承されていくのか」という問題の考察をおこなう。

6-1. むぎや祭の楽しさ

まず、むぎや祭の楽しさに関して、自分が祭りに参加して感じたことにも触れながら、住民の語りを報告していきたい。

住民に「むぎや祭の楽しさとはなんだと思いますか？」と尋ねると、多くの住民が「祭り当日の非日常が楽しい」と語る。ここで言われている非日常とは、祭り全体の雰囲気や、ステージで踊りを披露し、観光客に見られるということなどを指している。たとえば、大工町に住む女性は「(踊りを見てもらって)観光客に喜んでもらえることが嬉しい。(観光客に喜んでもらえたら)踊ったかいがあるなあ、また来ないかなあって思う」と嬉しそうな顔で語っていた。

私自身も、舞台に立ち、観光客に踊りを見てもらい、喜んでもらえるということは、むぎや祭の楽しさの一つだということを体感した。踊りを見てもらえること、写真を撮ってもらえること、そして観光客と一緒に踊るといった、日常生活ではありえないことを通して、住民たちは城端の文化が好意を持って受け入れられていることを実感し、楽しく思うのだと言えよう。

また、地域のつながりが楽しいという語りもある。西上町に住むある女性は「みんな集まって踊ったりすること(が楽しい)。町内でも、みんなで話をする機会がないから」と語った。西下町の男性は「祭りのときは(みんなが)一体化する。それが祭り」と祭りが終わった後の打ち上げの席で楽しそうに話していた。ほかにも、新町の女性や、西下町の男性は、「区長を中心として、町内あげての祭りの雰囲気が楽しい」、「町内に住んでる人の一体感が好き」などと話していた。

私自身も、地域の人々と関わることが楽しいということも体感することができた。短い期間ではあるが、西下町の住民の一人として、練習や調査を通して西下町の住民たちと交流を深めたが、踊りに未熟なところはあっただろうが、住民たちと一緒に踊ったり、打ち上げをしたりすることは楽しかった。人と密接に関わる楽しさもまた、むぎや祭にあると考えられるのである。

6-2. 住民のアイデンティティとむぎや祭の「伝統」化

住民に「なぜむぎや祭に参加するのか」という質問をしたところ。城端の住民として、むぎや祭に参加することは当然である、という語りが多く得られた。

西上町の男性は「小さいときから稽古に行っていたから、(むぎや祭に参加するのは)

使命感というか、当たり前のこと」だと語った。東上町の男性は「小さいときから祭りが好きだったから、（むぎや祭に参加するのは）当たり前。一回目から参加しているから、伝統を守っていく責任もある」と話す。別の西下町の男性は「この町に生まれた以上、この町の伝統や文化を知るために地域の行事に参加することは大切だ」と言う。

これらの語りから、城端の住人としてむぎや祭に参加することは当然である、という認識を住民たちが持っているということがわかる。むぎや祭は地域に根ざした祭りではなく、歴史の浅い行事であるが、現在では城端の住民のアイデンティティと深く結びついているのである。

文化人類学者の森田三郎は、伝統的な祭りの条件として、「非日常的な時空で行われること」、「地域住民との連帯感を生みだすこと」、「自己のアイデンティティを確認することができること」の三点を挙げている（森田、1990）。住民の語りを概観してみたが、こうしてみると、現在では、むぎや祭は、城端の新しい「伝統」として根付いていると言ってよい。

6-3. 伝統化した祭りの「束縛」と問題点

現在では、城端の住民たちはむぎや祭を自分たちのアイデンティティを深く結びついた伝統的な祭りだと認識している。すでに見たように、住民にとってむぎや祭は楽しいものであるが、同時に、「伝統」として認識する以上は維持し、継承していかなければならないという精神的な束縛を住民にもたらす。むぎや祭りの維持には人手の確保をはじめとして困難な問題があるが、この問題に関する語りを通じて、むぎや祭が持つもう一つの側面である束縛について、見ていきたい。

むぎや祭の抱える大きな問題は、祭りの参加者の確保である。町によって様々だが、踊り手の子どもや女性は、どこの町でも不足している。また、地方や若連中が少ない町もある。祭りに参加するすべての町で聞き取りをしたわけではないが、おそらく一つの町だけで参加者全員を確保できる町はないと思われる。実際、聞き取り調査で「今年のむぎや祭に参加する際に、町内で何か問題はありましたか？」と聞くと、「人数の確保が大変」という回答が多く返ってきた。

祭りの参加者の半分近くは、他の町からの参加だという町もいくつかあった。たとえば、東上町のある男性は、現在のむぎや祭の参加者について「地元の参加が少なく、他団体が多い。地元の参加を増やしてほしい」と語っていた。地元の参加が少ない理由について、男性は「城端の近くに働く先がないし、城端以外で働いている人は会社を休めない」と話す。また、西下町の男性に、「なぜ高校生の参加は少ないのか」と聞いたところ、「城端に高校はないし、部活とかで忙しいから、高校生は出れない」ということであった。

また、人数をほかの町から確保したとしても問題は残っている。出丸町に住む男性は「町内の少ない人数で、ほかの町から来た人のお金や面倒をみなければならない」と語る。

人手の確保の方法は、私が調査した限りでは三種類ある。一つは、自分の町から別の町に嫁いでいった女性の子どもを参加させるという方法である。次に、町内の子どもが友だちを連れてくるという方法。そして、曳山祭りで人足^{にんそく}として参加している人に、むぎや祭にも参加してもらおうといった方法である。しかし、すべての町がほかの町から人足^{うわみ}を確保しているわけではない。西下町は上見^{うわみ}から人足を連れてくる。上見は、城端の南西に位置し、次のページの「A」と記されている場所にある（図1）。



図1.上見の位置について

しかし、大工町にはそのようなつてがなく、人数を集めることができなかった。その結果、今年のむぎや祭に参加できなくなってしまった。

第60回の開催から東下町が、そして調査をおこなった今回の第61回からは大工町が、ともに人手不足のために、むぎや祭に参加できなくなってしまった。

東下町のある女性は、「祭りに参加できなくなった年は、本当に踊り手不足。伝統を守れなかったことが悔しいし、さびしい。周りから冷たい目で見られているようで辛かった」と語った。また、今年から大工町が参加できなくなったことを伝えると、大きなため息をつき、とても辛そうな表情をした。また、東下町に住む男性は「(むぎや祭に参加し)なくなった年は、不思議な感じだった。外に出るとむぎやの音がするのに、自分たちは(むぎやの練習を)していない」と話す。

大工町の女性は、大工町の不参加が決まったとき「これでいいのかな。お世話しなくてもいいのは楽だけど、踊り子のみなさんに申し訳ない。どんなに小さい町でも、参加することに意義がある。町並み踊りだけでも(参加したらどうか)」という声もあっただけ

ど、ステージにのぼってからこそ、大工町の踊りを披露できる」と寂しそうに語った。この語りからも、すでに述べた祭りの楽しさと伝統化がうかがえる。住民たちにとって、舞台に立ち、観光客に自分たちの踊りを見てもらうという非日常性が祭りの楽しさでもあり、自分たちのアイデンティティの確認ともなっているのである。

祭りが参加できなくなった町に対して、ほかの町の住民はどのように思っているのだろうか。

新町に住むある女性は「昔から一緒にやってきたことを、これからも一緒にやっていくかった。（ほかの町がむぎや祭への参加を）降りるのが悲しい」と残念そうに話した。また、西下に住む男性は「もう一度復活してほしい。頑張してほしい」と語る。どちらの語りからも、一緒に参加してきた町が参加できなくなったことを嘆いていることがうかがえる。

また、参加できなくなったことを嘆きながらも、町の運営方法に問題があったのではないかと語る住民もいる。東下に住む男性は「辞めてほしくないけど、人数を集めるのが大変。上の人（区長や副区長などの役員）が祭り好きじゃないと（祭りを運営する）努力をしない」と語る。新町に住む男性は、「横のつながりをきちんとしてこなかったから、それに対して、きちんと手立てをしてこなかったから、（祭りに）参加できなくなったんじゃないかな。あるいは、（上にいる人が）やる気があまりなかったんじゃないか。婦人会任せではなく、町内みんなで行っていき対策を考えていかなければならない」と話した。西上町の女性は「役員をやったことがあるので、（辞めるのは）わからなくもない。でも、どこの町内も努力しているので、そんな（人数不足）で辞められたら、ほか（の町）にも出てくるんじゃないかと心配になる」と語った。このような語りからうかがえるのは、人手不足の原因の一つとして、婦人会などの一部の人間に負担が集中しているという運営上の問題があるかもしれないということである。

以上のことからわかるように、祭りに参加できなくなるきっかけは、人手不足である。そして、人手が不足すれば住民にかかる負担が増大し、住民にかかる負担が増大すれば祭りに関わろうとする人が少なくなるという悪循環となる。その結果、祭りに参加できなくなってしまうのである。

6-4. 世代を越えた継承

ここまでの報告で、城端の住民にとって、むぎや祭は維持の問題を抱えながらも、なんとか継承していかなければならない伝統行事として認識されているということがわかった。世代を超えて祭りを継承していくためには、次代を担う子どもが祭りに関わることが焦点となる。西下町で地方をやっている男性は「子どもがいなければ祭りの伝承はできない」と語る。

先に紹介したが、なぜむぎや祭に参加するのかという質問をしたところ、「子どもの頃から参加していたから」という回答が多かった。西上町に住む30代の女性は「2、3歳から稽古に行く。そうすると使命感みたいなものを持って、（むぎや祭に参加するこ

とが) 当たり前になる」と語る。西下町で踊り方として参加している 30 代男性は、「物心ついたときから、むぎや祭と曳山祭りと一緒に育った」と話した。このように、小さい時から祭りに参加することで、城端の住民の意識の中にむぎや祭が位置づけられるのである。

子どもは、祭りの参加者、後継者として大切な存在だが、親の視点から見ると、また別の役割もある。西下町の男性は「子どもを参加させるのは、後継者育成のためでもある。(しかし、子どもが) 喜ぶから参加させたいというのも、もちろんある」、そして「むぎやは子どもが第一。そのために親は努力しなきゃいけない」と語る。親にとって、子どもが楽しむ姿が、むぎや祭の運営をしていく原動力になるのである。西下町に住む女性も「自分の息子が楽しそうにしている姿を見たら、(祭りの準備を) やろうと思う」と話す。

城端の住民は小さいときからむぎや祭に参加し、その楽しみを経験してきた。子どもの頃からむぎや祭に参加し、大人になった住民はむぎや祭を継承していくことについてどのように感じているのだろうか。西下町に住む男性は「小さいときから踊っていると、(むぎや祭を継承していくことは) 当たり前になる。無いようにはしられん。辞めようとは思わなかった。」と語る。また、県外の大学に進学し、就職活動を行っていた大学生は、「(むぎや祭に) 出たくて、出にきた。もし、(城端の近くに) 就職できなかったら、これから、出れる機会がないんじゃないかと思った」と話す。

6-5. まとめ

地域に根ざしたものではなく、組織が始めたもので半世紀程度の歴史しか持たないむぎや祭は、見られることを通して感じる楽しさを通じて、住民たちの間に根付き、今や、城端の伝統行事となっている。住民たちは、むぎや祭に参加することによって、自分たちがそれぞれの町の住民であるというアイデンティティを確認し、そして、世代を超えて町の中の人たちとの交流を深める。しかし、このように住民にとって大切な行事となったために、今度は、祭りを維持し、継承しなければならないという意識も生まれている。祭りの存続に立ちはだかっているのは、人手不足であり、運営上の問題としてとらえられることもあるが、解決はなかなか難しい。しかし、次の時代を担う子どもたちはむぎや祭の楽しさを十分に経験しており、これまでと同じように、祭りを城端の伝統行事として担っていくことになると思われる。

しかし、むぎや祭を城端の伝統行事だということに疑問を持つ住民もいる。実際に、「曳山祭は伝統芸能で、むぎや祭は楽しむためのもの」という語りや、「曳山祭の方が大変で、重要」といった語りが、老若男女問わず、住民たちから聞いた。また、むぎや祭はもともと五箇山に伝わる祭りだったということもあり、住民の間でも「むぎや祭は借りてきた祭り」という認識がある。西下町の男性は「むぎや祭は自信がない。でも曳山は自信がある」と語る。ここで言う自信は、「(ほんとうに) 自分たちの祭りと言えるかどうか」という意味だと思われる。伝統化という点から見たとき、むぎや祭は、

まだ完全に自分たちの真正な文化と認識するところまで至っていないのかもしれない。ただし、むぎや祭が、曳山祭にない楽しさを住民に与えていることは確かである。この楽しさが、城端の人々にむぎや祭の維持と世代を超えた継承に力を注がせているのである。

謝辞

城端への合宿調査が始まるまで、私は怖くて仕方がなかった。自分のことなど誰もしらない土地に行き、それぞれの生活の中に混ざり込まなければならないのである。しかし、宿泊所としてお世話になった大村さん一家、一緒に踊った西下町のみなさん、そして城端に住む人々は、私たちを温かく迎え入れてくれた。合宿初日、一人で心細く大村さん宅にいた私を、家族と同じテーブルで晩御飯を食べさせていただいたことがとても嬉しかった。また、踊りを一から丁寧に教えてくださり、城端の晴れ舞台に立たせてくれた西下町のみなさんにも、本当に感謝している。また、調査の際に初対面の大学生相手に、家の中にまであげてくださり、一時間以上も話を聞かせていただいたこともあった。多くの城端の人たちに支えられて、稚拙ながらも報告を完成させることができた。そして、これからも忘れることができない、貴重な経験をさせていただいたことを心から感謝の意を示したい。

城端のみなさまには本当にお世話になりました。とても楽しく、充実した調査と滞在でした。ありがとうございました。

参考文献

城端むぎや祭協賛会、2011、『城端むぎや祭六十年の軌跡』

城端地域公民館連絡協議会、2011、『城端むぎや祭歴史学習会 Part1』

森田三郎、1990、『祭りの文化人類学』、世界思想社

4-4. むぎや祭における「じゃんといむぎや」の役割

霜鳥 祐希

1. はじめに

城端むぎや祭では、祭の第1日目に「じゃんといむぎや」というイベントが開催される。これは、麦屋節などの民謡を自由にアレンジした曲に合わせて、数十人のチームを組んで創作的な踊りを披露するというイベントである。

毎年、各町内によって披露されている麦屋節などの民謡は、落ち着いた曲や踊りで構成されている。一方、「じゃんといむぎや」で披露される踊りや曲は、とても活気があって激しい。私は、同じ祭りの中に対照的な2つの踊りや曲が存在していることに興味を持った。また、「じゃんといむぎや」というイベントが城端むぎや祭にどのような役割を果たしていて、城端の人々にどのように認識されているのか、という疑問を持った。そこで、「じゃんといむぎや」の設立や運営に関わった人、今回参加したチームの人を中心に、南砺市城端の住民に聞き取り調査を行った。

「じゃんといむぎや」と、各町内の民謡や踊りを区別するために、後者を「**正調むぎや**」と記述することとするが、まず、「じゃんといむぎや」の概要と生い立ちを説明する。次に、「じゃんといむぎや」に参加したチームについて紹介して、どのような人々がこのイベントに関わっているのかを見ていく。そして、城端の住民が「じゃんといむぎや」に対してどのように認識しているのかについて報告する。最後に、正調むぎやとむぎや祭に対する認識について、「じゃんといむぎや」に関わっている人々、正調むぎやに関わっている人々、どちらにも関わっていない城端の住民の3者を対象として比較する。このような作業によって、「じゃんといむぎや」が、むぎや祭りの中でどのような意味を持っているのかについて、明らかにしたい。

2. 「じゃんといむぎや」の概要

「じゃんといむぎや」は第50回城端むぎや祭から始まり、今年度で第12回目の開催となった。毎年、祭の第1日目のみ開催されている。

「じゃんといむぎや」に出場するチームは、以下の3つの条件を満たす必要がある。

(1) 20人以上100人以下でチームを構成する。

(2) 何らかの形で五箇山民謡のフレーズの入ったオリジナル曲を使用する。もしくはチームで5個以上、四つ竹、ささら、菅笠などの小道具を使用する。

(3) 演舞時間は、チーム紹介や挨拶を含めて1チーム5分以内。

曲のアレンジや踊りのジャンルは自由であるが、手に鳴子を持って踊る、よさこいの形式で曲や踊りの構成をしているチームがほとんどであった。また、(2)は本番の審査において特に重要視される項目である。

2-1. 演舞の形式について

出場チームは、A,B,Cの3つのゾーンで各1回ずつ、計3回の演舞を行う。A,B,Cゾーンとは演舞を披露する3か所の会場の名称である。Aゾーンは新町から曳山会館前、Bゾーンは西下町から富山県信用組合前の国道304線が会場となる(本章の第1節の地図を参照)。Cゾーンは善徳寺と北陸銀行の間の交差点が会場となる。図1は、各会場の場所を地図に表したものである。

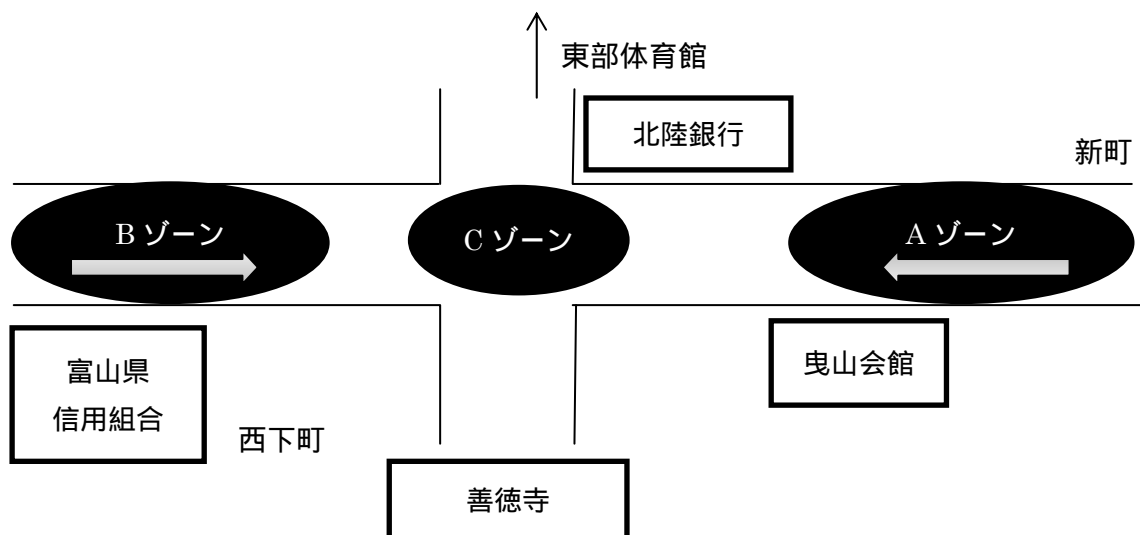


図1.「じゃんこいむぎや」の会場図

図1のAゾーンとBゾーンの文字の下にある矢印は、演舞の進行方向を示したものである。また、会場として使用される箇所の国道314号線は、終日通行止めとなる。

各会場で行われる演舞の形式には違いがある。A,Bゾーンでは、「ストリート形式」での演舞となる。「ストリート形式」とは、演舞の際にチーム全体で4列から5列に並び、進行方向に進みながら踊る形式である。この時、観客は演舞を横から見物することになる。

Cゾーンでは、「ステージ形式」での演舞となる。「ステージ形式」とは、Cゾーンの交差点全体を一つのステージとして、チームで自由な隊形を作って踊ることのできる形式である。ストリート形式とは異なり、進行方向に進みながら踊ることはない。観客席は、出演者を囲むような形で設けられている。また、Cゾーンでの演舞は審査の対象となる。そのため、出演者の正面には観客席の他に審査員席が設けられている。図2,3は

ストリート形式とステージ形式の出演者と観客席、審査員席の様子を図に表したものである。

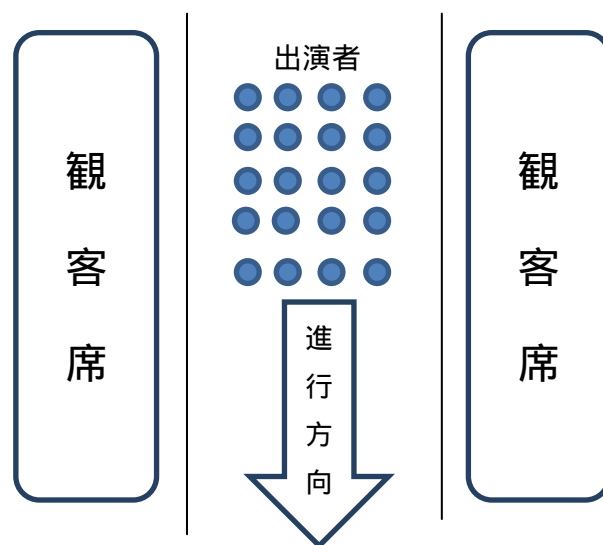


図 2.ストリート形式の様子

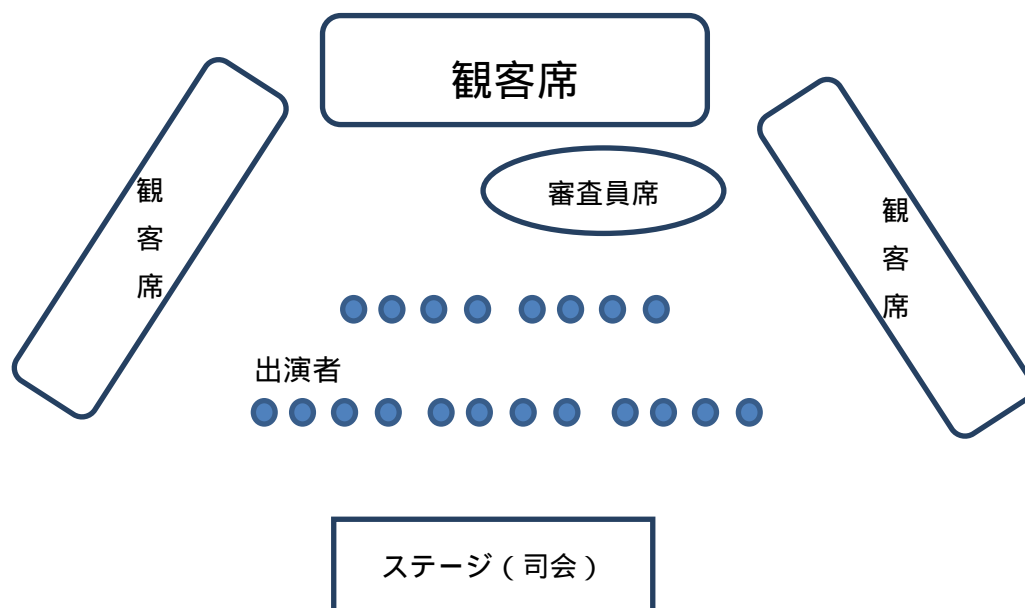


図 3. ステージ形式

2-2. 衣装

「正調むぎや」と異なり、「じゃんとこいむぎや」では衣装に関する規定は特に設けられていない。そのため、参加しているチームごとに衣装が全く違う。写真 1 は、「じゃんとこいむぎや」の参加者の様子である。



写真 1. 様々な衣装を着た参加者

また、衣装は色鮮やかなものがとても多く、衣装もチームの個性を表現する手段の一つとなっている。

3. 「じゃんこいむぎや」の生い立ち

どのようにして「じゃんこいむぎや」というイベントが生まれたのだろうか。設立に関わった A さん、当時の様子を知る B さんの語りから、「じゃんこいむぎや」の生い立ちをまとめていく。

かつて、むぎや祭には「むぎやパレード」という催しがあり、城端小学校の 5 年生と 6 年生が参加していた。しかし、A さんには、子どもたちがパレードに出るのを面倒に思っているように見え、「むぎやの旋律は子どもには好まれないのでは」と思ったという。そこで、A さんは、運動会の応援合戦で曲をアレンジするように、むぎや祭の民謡を子どもたちが親しめるようにアレンジしたらどうだろうか、と考えるようになった。

また、当時はむぎや祭に来る観光客が減少しており、商工会でも祭の賑わいをどう創り出すかについて模索していた。そんな時、A さんは北海道でよさこいソーランを立ち上げた長谷川岳さんと出会った。「よさこいソーランの映像を見せてもらい、今の祭はこれだ！と思った」と当時を振り返って、A さんは語る。そして、新しい音楽を取り入れたパワフルな祭りを創ろうと決心したという。

その後、A さんは城端庁舎、商工会、町などに新しい祭りを加えることを働きかけた。その結果、「城端の祭に賑わいが生まれるし、まちおこしとしても効果的」と各方面から賛同を得ることができた。こうして、「じゃんこいむぎや」設立の準備が始まった。

当時の様子をよく知る B さんは、「準備を始めたが、よさこいソーランのノウハウがなかった」と語る。よさこいソーランの祭りを創ろうとしてはいるものの、よさこいソーランについて詳しく知っている人がいなかったということのようである。そこで、長谷川岳さんに何度か足を運んでもらって、直接によさこいソーランのノウハウを教えてもらった。また、当時すでに富山市の祭りで「よさこいとやま」というよさこいソーランのイベントが始まっていたが、これも参考にしたという。また、宣伝のために、富山のテレビ局と「チャンチキ」という民俗楽団に協力してもらった。

「じゃんとこいむぎや」の設立の中心となった組織は、むぎや踊り推進委員会、城端町庁の産業振興課、商工会である。なかでも設立に貢献したのが、商工会の女性部である。商工会女性部は「城華^{じょうか}」というチームを立ち上げ、「じゃんとこいむぎや」の第 1 回から第 11 回まで出場した。この「城華」については、後に詳しく説明する。なお、むぎや踊り推進委員会とは、各町内で正調むぎやの踊りを教えている指導方や祭りの二日目の総踊りの際に観光客に踊りを教える人によって構成される組織である。

4. 「じゃんとこいむぎや」の参加者とチーム

ここでは、どのような人々が「じゃんとこいむぎや」に参加しているのかについて述べる。まず、「じゃんとこいむぎや」全体の参加者とチームについて説明し、次に、城端のチームについて詳しく記述する。

4-1. 全体の参加者とチーム

今年（2011 年）に「じゃんとこいむぎや」に参加した人、あるいは過去に参加したことがある人、合計 29 人について、城端からの参加者の場合と城端以外の参加者の場合に分けて、年齢と性別を調べた。その結果が図表にまとめた。次に、参加チームの所在地の調査を行い、以下の図 4 から図 7 にまとめた。なお、今まで参加したことがある人については、参加当時の年齢を聞いた。

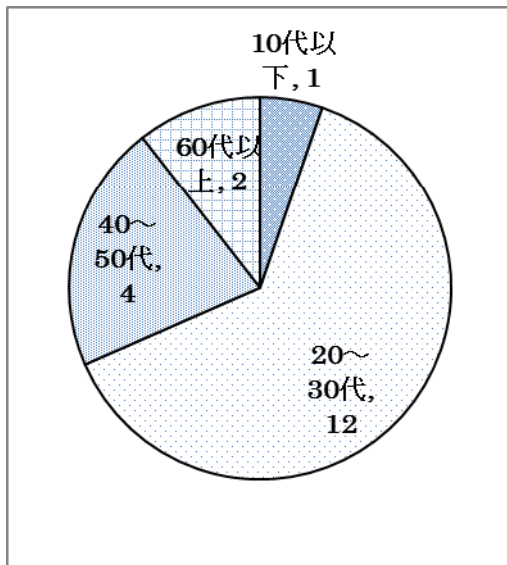


図 4. 城端からの参加者の年齢の割合

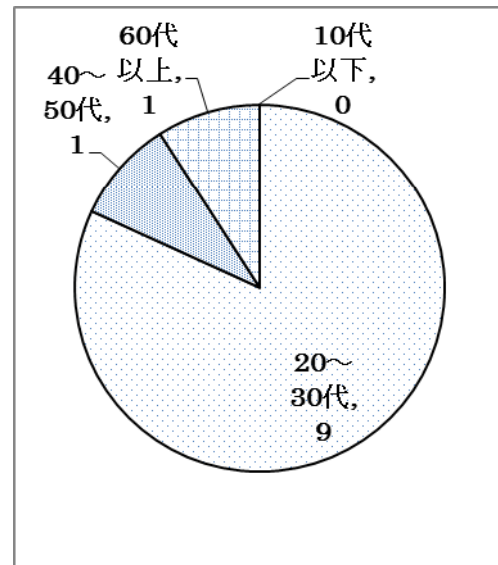


図 5. 城端以外の参加者の年齢の割合

図 4 と図 5 から、城端からの参加者、城端以外の参加者ともに 20 代から 30 代の参加者が多いが、城端の方が 10 代からの参加者や 40 代から 50 代の参加者が多いことがわかる。見物していると、子どもや若い人が目立つが、実際は、60 代から 70 代の人たちで構成されたチームもあり、全体として見れば、「じゃんとこいむぎや」は幅広い年齢層の人が参加しているイベントである。

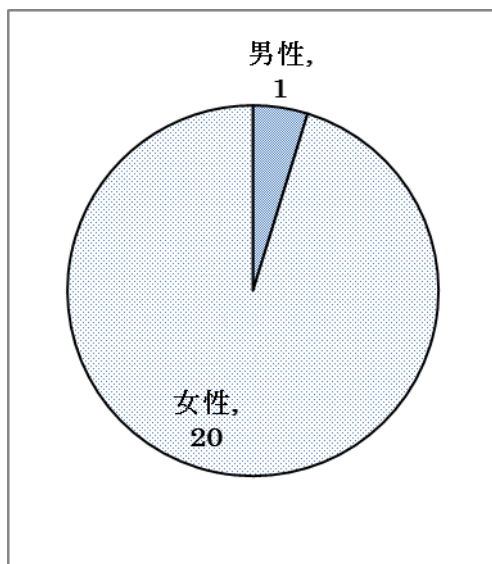


図 6. 城端からの参加者の性別の割合

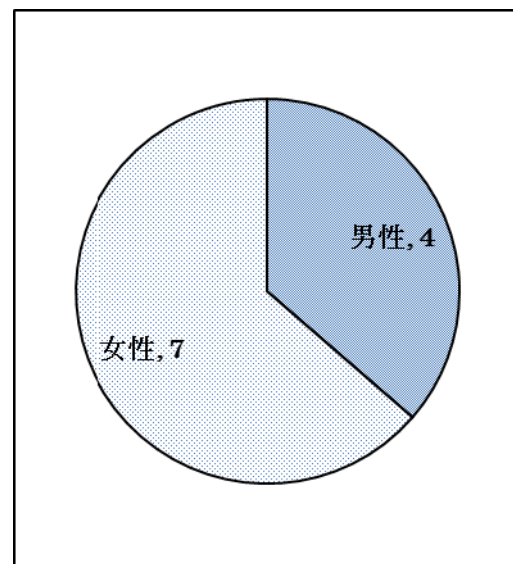


図 7. 城端以外の参加者の性別の割合

図 6 から、城端からの参加者はほぼ女性であることがわかる。全体としても、城端からの参加チームは女性だけで構成されているチームが多い。これに対して、図 7 のとおり、城端以外の参加者は男性が約 4 割、女性が約 6 割と、それほど男女比に差がない。

城端以外の参加者のチームの中には、男性だけで構成されているチームもあった。

次に、参加チームがどこからの参加なのかについて見てみよう。「じゃんとこいむぎや」の今年度の参加チーム数は、過去最多の37であった。まず、37チームの所在地の割合を、富山県内と県外に分けた結果を図8に示したが、富山県内からの参加チームが占める割合は約8割と多い。富山県外からは、石川県から5チーム、高知県から1チームが参加した。

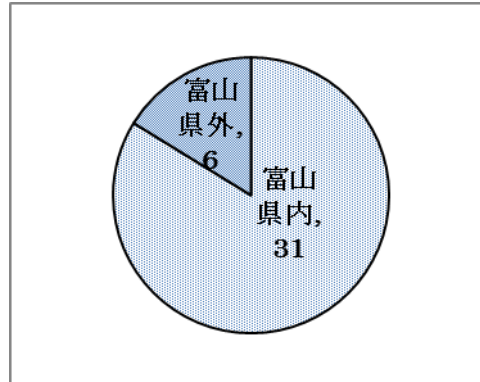


図 8. 参加チームの県別の割合

次に、富山県内の参加チームの市別の割合を図9に表す。図を見れば分かるように、富山市からの参加が多いものの、参加チームは富山県内全域にわたっていることがわかる。なお、城端からの参加チームは下の図の南砺市に含まれている。城端からの参加は2チームであった。

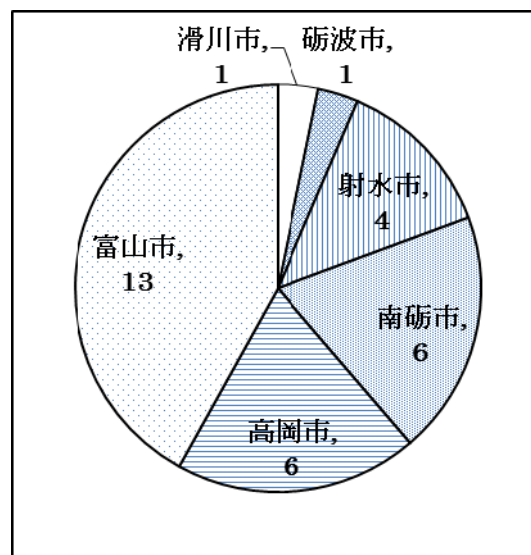


図 9. 富山県内の参加チームの市別の割合

4-2. 城端のチームについて

ここからは、城端から「じゃんとこいむぎや」に参加したチームについて詳しく紹介していく。今年城端から「じゃんとこいむぎや」に参加したのは、「^{らぶさくら}楽舞saku*la」というチームと「じゃんとこじゅにあ」の2チームである。

「^{らぶさくら}楽舞saku*la」は、子どもとその母親で構成されている結成9年目のチームである。

子どもの多くは保育園児から小学校4年生くらいまでの幼児と少年であり、母親の多くは30代である。男の子は2人参加しているが、父親の参加はなく、全体としてみれば、メンバーは女性がほとんどである。春から秋にかけて、週2回集まって練習を行っている。「じゃんとこいむぎや」だけでなく、町のイベント等にも参加している。写真2は、楽舞 saku*la の練習風景である。



写真 2. 楽舞 saku*la の練習風景

「じゃんとこじゅにあ」は、城端小学校の4年生が毎年参加しているチームである。4年生は総合学習で自分の住む地域について学習をしており、城端の曳山祭りやむぎや祭りについても学習する。その中で、むぎや祭りについての学習の1つとして、「じゃんとこいむぎや」に参加している。「じゃんとこいむぎやに出ることで、一生に一度、むぎや祭りに出るということになる」と4年生の担任の先生は語るが、祭りに参加すること自体が、総合学習の一環となっている。写真3は、じゃんとこじゅにあの練習風景である。



写真 3. じゃんとこじゅにあの練習風景

次に、以前「じゃんとこいむぎや」に参加していたチームについて紹介する。今年は「じゃんとこいむぎや」に参加していなかったが、以前参加したことのあるチームは、
「^{じょう か}城華」、「^{かさ ぶらん か}笠舞乱華」、「むぎやっぷ」の3チームである。

「^{じょう か}城華」は、商工会の女性部が「じゃんとこいむぎや」のために立ち上げたチームで、メンバーは40代～50代の女性が中心である。「じゃんとこいむぎや」第1回目から11年連続で参加していたが、今年は参加できなかった。「リーダーをされている方が忙しかったので、今年はじゃんとこいには出られなかった。大人から子どもまでチームをまとめるのは大変だし、家庭も仕事もあるからリーダーは忙しい。誰もやりたがらない」と、城華のメンバーである40代女性のFさんは語る。「じゃんとこいむぎや」のための練習やチームの運営と家事や仕事の両立は難しいことが分かる。

「^{かさ ぶらん か}笠舞乱華」は、老人会の若手から発足したチームで、60代から70代の女性が中心である。「じゃんとこいむぎや」だけでなく、町の福祉関係のイベントに出演したり、福祉施設でボランティアを行うなどの活動をしているが、今年は、チームを指導している先生が病気で静養しているため、「じゃんとこいむぎや」への参加を見送った。

「むぎやっぷ」は、「じゃんとこいむぎや」を盛り上げるためには地元チームの出場が必要だと考えた商工会青年部が立ち上げたチームである。女性や子どもたち、さらには城端以外の商工会からもメンバーを募った。このチームはすでに解散している。「第1回目から5回ほど出場した。メンバーの大半が正調むぎやに関わっていて忙しかったし、じゃんとこい(むぎや)が大きなイベントになっていって、もう出なくてもいいんじゃないかという風になった」とむぎやっぷに参加していた40代男性のKさんは語る。ま

た、「このチームには衣装がなく、仮装大会のようなかんじで楽しく、おもしろくやっていた」と、当時の様子を語る。「じゃんとこいむぎや」の草創期に活躍したチームだったことがうかがえる。

5. 祭り当日の流れ

「じゃんとこいむぎや」の当日の主なスケジュールは、表 1 のとおりである。

表 1. 祭り当日のスケジュール

時間	内容
9:00 頃	会場の設営開始。 また、参加するチームが待機場所である東部体育館に集まり始める。
12:00 頃	マイクテストの開始。
14:30	A ゾーン演舞スタート。
15:00	B ゾーン演舞スタート。
17:20	C ゾーン演舞スタート。
21:00 頃	全演舞終了、審査開始。 出演者はその間待機。
21:30 頃	結果発表、表彰式。
22:00 頃	解散、撤収。

ここからは、上記のスケジュールに沿って、詳細を説明していく。

5-1. 会場の設営

午前中は、図 1 で示した A,B,C ゾーンの 3 会場の設営が並行して行われる。A,B ゾーンの会場設営では、会場を示す看板、アナウンスのためのテント、スピーカーが設置される。写真 4 は A ゾーンの会場設営の様子である。



写真 4. A ゾーンの会場設営の様子

C ゾーンの会場設営では、ステージ、スピーカー、スポットライト、観客席と審査員席が設置される。ここで設置されるステージは司会や審査発表の際に使われるものであって、参加者が演舞を披露する際に使われるものではない。参加者は、ステージの前の交差点全体を使って演舞を披露する。

会場の設営が終わると、マイクテストを行い、スピーカーの音量の調節等を行う。

5-2. 演舞の様子

14 時 30 分から A ゾーン、15 時から B ゾーンで演舞が始まった。どのチームも最初にマイクを使って挨拶、チーム紹介を行った後、演舞を行う。A ゾーンでの演舞は 17 時半過ぎ、B ゾーンでの演舞は 18 時過ぎに終了した。

C ゾーンでの演舞は 17 時 20 分に始まった。C ゾーンでも演舞の前にマイクを使って挨拶やチーム紹介を行うが、A,B ゾーンよりも長めに時間を取っているようであった。。当日は昼間から曇り空で、小雨が降ったり止んだりしていた。C ゾーンでの演舞が始まってからも天気は回復せず、時間が進むにつれて雨は昼間よりも激しくなった。そんな中でも、どのチームの参加者も演舞の間は笑顔を絶やさず、楽しそうに踊っていた。また、待機時間中も商店街の屋根の下に集まって雨をしのぎながら談笑していた。「あのチームかっこいいね」や「あそこの衣装かっこいい」という語りが、あちこちからよく聞かれた。C ゾーンでの演舞は 21 時過ぎに終了した。写真 5 は B ゾーン、写真 6 は C ゾーンでの演舞の様子である。



写真 5. B ゾーンでの演舞風景



写真 6. C ゾーンでの演舞の様子

5-3. 審査

C ゾーンの演舞が全て終了すると、城端むぎや祭協賛会会長らで構成されている 5 人の審査員によって審査が行われる。審査基準は、次の表 2 の通りである。審査には 30 分ほどの時間がかかった。

表 2. 審査基準

五箇山民謡を活かしているか	30 点
観客を楽しませたか(演舞技術、表現力、迫力、躍動感、衣装)	50 点
表情 (メンバーが楽しんでいるか)	20 点
計	100 点

5-4. 表彰式

審査の後、表彰式が行われる。表彰式では以下の賞が用意されている。

- ・大賞
- ・優秀賞
- ・富山テレビ賞
- ・特別演舞賞（2チーム）

賞品はトロフィーや盾の他、飲み物やバナナ、ヨーグルトなどである。また、上記の賞以外のチームには、記念の菅笠と参加賞が贈られる。受賞したチームは、歓声を上げたり涙を流したりしながら喜んでいった。22 時頃に表彰式が終了し、「じゃんとこいむぎや」の全日程が終了した。表彰式後に各チームで解散となり、参加者は帰っていった。その後、会場の撤収作業が行われた。

6. 「じゃんとこいむぎや」に対する認識の比較

むぎや祭のなかでおこなわれる「じゃんとこいむぎや」に対して、「じゃんとこいむぎや」に関わる人々、「正調むぎや」に関わる人々、そして城端の住民たちはどのように認識しているのだろうか。また、これらの人々は、「正調むぎや」やむぎや祭全体に対しては、どのような印象を持っているのだろうか。3 者のそれぞれの認識を比較して、考察してみたい。

6-1. 「じゃんとこいむぎや」に関わっている人たちの語り

まず、「じゃんとこいむぎや」の参加者や立ち上げに関わった人たちの「じゃんとこいむぎや」、「正調むぎや」、むぎや祭全体についての語りを見ていきたい。

「じゃんとこいむぎや」については、ある 30 代女性は、「若い人がたくさん参加するから、祭りの活性化になっていると思う」と語る。また、南砺市のあるチームに所属する 40 代の男性は「南砺市のイベントに出ることで、地元の活性化につながっている」と話していた。30 代女性の Cさんは、「チームに入っていなかったら祭りには参加していなかった。祭りに出たいという気持ちはあるが、町内に呼ばれないと、なかなか祭りに参加する機会はない」と語る。また、30 代女性の Dさんは、「じゃんとこいむぎやに参加することが、祭りに参加するきっかけになった」と話す。富山市のチームに所属する 30 代の女性は「じゃんとこい（むぎや）がなかったら、城端に来ることはなかった」と言う。

次に、正調むぎやについては、30 代の女性は「きりっとしていてかっこいい」と表現する。20 代の女性は「情緒があって、町内によって違いがあるのもいい」と語る。また、10 代の女性は「友達が出ている影響で、（正調むぎやに）出てみたいと思ったこ

とがある」と話す。

正調むぎやを見る機会はあるかという質問をしたところ、30代男性は「(正調むぎやは)見れるか微妙。演舞が終わったらすぐに帰らなきゃいけないから」と答えた。また、20代女性は、「(正調むぎやは)見たいけど、時間が合わなくて見れない」と話していた。

むぎや祭全体については、30代女性は、「正調むぎやとじゃんこい(むぎや)のギャップがいい」と語る。また、40代男性のKさんは、「正調むぎやは伝統、じゃんこいむぎやには楽しさがある」と話す。

以上の語りから、参加者の意識の中に、「じゃんこいむぎや」に参加することで祭り、さらには地域の活性化につながるという考えがあることがわかる。また、「じゃんこいむぎや」に参加するということが、むぎや祭に参加するきっかけになっていることがわかる。上記のCさんとDさんは城端の中でも旧町から離れた地域に住んでおり、正調むぎやには関わる機会がない。また、城端以外のチームにとっては、「じゃんこいむぎや」に参加することが、城端を訪れる機会にもなっているようだ。むぎや祭の中に「じゃんこいむぎや」が設けられたことで、より広い地域の人が祭りに参加できるようになったことがうかがえる。

また、「じゃんこいむぎや」に関わっている人は、「正調むぎや」情緒がある、かつこいいなどと評価しているが、祭りのスケジュールの都合でじっくりと見物する時間を取ることは難しい。とりわけ、今年は1日目に「じゃんこいむぎや」と並行して行われる予定だった街並み踊りが雨天中止となったので、正調むぎやを見物することができず時間がさらに減ってしまった。

むぎや祭に関しては、伝統的で情緒のある「正調むぎや」と楽しさが前面にでる「じゃんこい」の性格の異なる二つの踊りがあることを肯定的にとらえているように思われる。

6-2. 「正調むぎや」に関わっている人たちの語り

まず、旧町の正調むぎやに関わっている人たちの「じゃんこいむぎや」についての印象は、「うるさい」というものがほとんどであった。ある70代の男性は、「やかましいばかり。別院でやっていると(「じゃんこいむぎや」の)音が近くて、正調むぎやの音が聞こえない」と話す。また、50代の男性は、「(「じゃんこいむぎや」は)町内からすれば邪魔。新しい分野でいいんだけど、同時にやるのはちょっとね」と話す。40代男性のKさんは、町内の地方として正調むぎやに関わりながら、以前「じゃんこいむぎや」にも参加したことがあるそうだ。Kさんは次のように語る。「じゃんこいむぎやが始まる前は、地方をやらされているような気持ちでやっていた。しかし、じゃんこいむぎやに参加してから、(逆に)正調むぎやの良いところが見えてきた。正調むぎやを嫌々やっていると、見ているお客さんにも伝わってしまう。だから、もっと真剣にやろうと思うようになった」。

自分たちが関わっている正調むぎやについては、60 代の男性は「むぎやをやっている方としては、むぎやを聞いてほしい。町内ごとに工夫しているから」と話す。一方、別の 60 代男性は、「だんだんむぎや踊りそのものがおもしろくなくなってきた」と言う。

むぎや祭全体については、ある 60 代男性は、「城端の祭として残していきたい。祭に参加する人が少なくなっているから、特に若い人に参加してほしい」と話す。一方、50 代男性は、「曳山祭りに比べて、（むぎや祭は）あまり感銘を受けるような祭りではなくなってきた」と言う。また、70 代男性は「五箇山の（むぎや）が本場もんなら、城端の（むぎや）はフェスティバル用のむぎや」と語っていた。他にも、むぎや祭を曳山祭りを比較したり、五箇山と城端を比べてみたりする語が多い。

以上の語りから、正調むぎやに関わっている人は、全体的に「じゃんとこいむぎや」について肯定的な印象を持っていないようである。しかし、K さんのように、まったく性格の異なる「じゃんとこいむぎや」に参加することによって、かえって正調むぎやに真剣に取り組むきっかけになったという人もいる。

正調むぎやとむぎや祭りについては、肯定的な語りと現状に不満を持つ語りに分かれる。正調むぎやとむぎや祭を地元の祭りとして残していきたいという気持ちがかえり一方で、前節の報告で詳しく述べられている参加者の減少を指摘したり、曳山祭りや麦屋節の発祥地である五箇山と比較して、伝統性に乏しい祭りととらえる人たちもいる。

6-3. 城端の住民の視点から

最後に、「じゃんとこいむぎや」と「正調むぎや」のどちらにも関わっていない城端の住民から見た「じゃんとこいむぎや」、「正調むぎや」、むぎや祭全体についての語りを見ておこう。

ある 50 代の女性は、「じゃんとこいむぎや」について、「元気で若々しくて活気がある。にぎやかになっていい」と語る。また、70 代の女性は、「みんな違う踊りだから見ていて楽しい」と話す。60 代の男性は、「じゃんとこいができてから（祭りに）若い人が増えた」と話す。他にも、「じゃんとこいむぎやがないと日中の通りが寂しい」、「衣装を見るのも楽しみの 1 つ」といった語りもあった。一方、ある 70 代女性は、「じゃんとこいには昔から続いてきたむぎや祭の雰囲気を感じられないし、薄れている気がする。祭りのムードが消えてしまう」と言う。また、70 代男性の X さんは、「じゃんとこいはうるさい。別院会場でやっている正調むぎやを邪魔している。若い人向けの踊りといったイメージ」と語る。

「正調むぎや」については、70 代の男性は、「むぎやはしっとりとして哀調がある。一人でも多くの人に踊ってほしい」と語る。60 代の男性は、「踊り子を集めるのが大変そう。戸数も減っていき、継続が難しいと思う」と話していた。

むぎや祭全体については、ある 50 代の男性は、「新と旧の融合で良い。一粒で二度おいしいかんじ。新と旧が融合している祭りが地元にあるということを全国に自信を持っ

て発信したい」と語る。また、30代の女性は、「ちょっとジャンルは違うけど、祭りに来た人には両方楽しく見てもらえればいいと思う」と話していた。

「じゃんといむぎや」にも「正調むぎや」にも関わっていない城端の住民の認識は、ちょうど「じゃんといむぎや」に関わっている人たちと「正調むぎや」に関わっている人たちの認識を足したものだと言える。「じゃんといむぎや」については、「活気があってよい」という肯定的な印象と「うるさくて正調むぎやの邪魔」という否定的な印象に分かれており、「正調むぎや」については、情緒があると評価する一方で存続を危惧している。むぎや祭全体については、一つの祭りの中に性格が異なる2つの踊りが並行しておこなわれていることを評価している。

7. まとめ

以上を踏まえて、最後にむぎや祭における「じゃんといむぎや」の役割について、考察してみたい。

「じゃんといむぎや」には主として2つの役割があると考えられる。一つは、城端を越えて、より広い地域から、また幅広い年代の人たちをむぎや祭にひきよせるという役割である。「じゃんといむぎや」は、城端の中でも旧町以外の人、さらには城端以外の人が祭りに参加する機会となっており、参加者は子どもから高齢者まで幅広く、年代を問わず楽しめるイベントとなっている。また、「じゃんといむぎや」が祭りに取り入れられることによって、より多くの観客が祭りの見物に訪れるようになった。このような多くの人たちを惹きつけるイベントがあることによって、むぎや祭が活性化していると考えられるのである。

もう一つの役割は、むぎや祭に新しい可能性を加えたことである。若者が中心となる躍動的な「じゃんといむぎや」と情緒のある「正調むぎや」が組み合わせることによって、むぎや祭がより幅広い人々に楽しみを与えることができる可能性が生まれたと考えられる。ただし、「じゃんといむぎや」の躍動感や活気は、「正調むぎや」に関わる人たちや一部の住民からは「うるさくて、正調むぎやを邪魔するもの」ととらえられているのも事実である。この意味では、新旧の踊りは一つの祭りの中でうまく結びついていないと言えるが、しかし、「じゃんといむぎや」が祭りに加わることによって、城端の住民に、むぎや祭のあり方について考えるきっかけを与えたことは間違いない。

新しいジャンルであり、躍動感のある「じゃんといむぎや」と落ち着いた雰囲気を持つ「正調むぎや」の、2つの異なる踊りは、城端むぎや祭の中でまだ融合していない。現在は、それぞれの踊りの性格について、それぞれの踊りに関わる人たちや城端の住民が、相互に比較して、今後の祭りのあり方を模索している段階だと言えよう。

おわりに - 感想と謝辞

最後に「じゃんといむぎや」に参加した個人的感想をお世話になった方々へのお礼を述べたいと思う。

私は本文で触れた「楽舞 saku*la」というチームに、「じゃんといむぎや」本番の約2か月前から練習に参加し、本番当日も一緒に行動させていただきました。練習から本番までチームの練習に参加することで、「じゃんといむぎや」を見る人の目線だけでなく、参加者の目線に立った調査をすることができたと思います。

「楽舞 saku*la」の雰囲気はとても明るく、私が初めて練習に伺って挨拶をした時も皆さんが温かく迎えてくれました。特に子どもたちは、毎回私が練習に行くたびに笑顔で走ってきて迎えてくれて、とても嬉しかったことを覚えています。私自身子どもが好きで、毎回練習に行って子どもたちと遊んだり話したりするのが楽しみの一つになっていきました。しかし、長時間遊び過ぎて、子どもたちが練習に集中できなくなる場面があったりもしました。お母様方にはご迷惑をおかけしたかもしれません。もし、そのようなことがありましたら、どうか、ご寛恕をお願いいたします。

また、明るく楽しく活動しながらも、練習の時は真剣に取り組んでいる姿勢が印象的でした。練習が始まる前と終わった後、お母様方で何度もフォーメーションの確認を行っておられました。また、休憩中も自主練習を行ったり、お互いに振付を確認し合ったりしておられた姿が印象的でした。

当日はあいにくの雨模様でしたが、本文中にも書きましたように、皆さんが笑顔を絶やさず踊っていた姿が心に残っています。皆さまが怪我をせず無事に踊りきることができて本当によかったと思っています。また、当日は私も声出し係という役割を与えていただき、衣装のはっぱを着て参加できたことは、一生の思い出になります。

代表の澤田様をはじめとする「楽舞 saku*la」のみなさまには、とても感謝しています。見ず知らずの私を練習に参加させてくださり、祭り当日は楽舞 saku*la の一員として祭りに参加させてくださいました。また、練習の合間に貴重なお話をたくさん聞かせていただきました。また、城華の藤田様、風神の澤井様、笠舞乱華の伊藤様をはじめとする、貴重なお話を聞かせてくださった「じゃんといむぎや」参加チームの方々にも感謝申し上げます。チームのさらなる発展を願っています。

そして、「じゃんといむぎや」設立の過程を詳しくお話してくださった河合様、大西様、商工会の北瀬様、調査でお話を聞かせてくださったすべてのみなさまに感謝申し上げます。

多くの方々のおかげで充実した調査を行うことができました。そして、一生の記憶に残る貴重な経験をさせていただきました。この場を借りて心からお礼を申し上げたいと思います。本当に、ありがとうございました。

5. 婦人会が地域に果たす役割

藤村 沙樹

1. はじめに

城端でフィールドワークを開始した頃に、強く印象を受けたことがあった。それは城端が「人と人の結びつきが強い町」であるということだった。具体的には、同じ町内に住んでいる人の名前や家族構成や、仕事を詳しく知っているだけでなく、離れた町に住んでいる人のことも良く知っていたのだ。私が住んでいる金沢市の住宅街では、隣近所にどんな人が住んでいるのか詳しく知らないのが普通で、大半の人は少し離れた町の住民とは全くと言っていい程関わりを持っていない。

また、曳山祭りの調査中には、町の住人が一丸となって祭りを行っているという印象を受けた。本番に向けた準備や本番では城端内の町内外の人で協力し合って祭りが支えられていた。さらに、本番が終わってからの打ち上げは、様々な人々が参加して交流する。「住民同士が互いによく知りあっている」コミュニティが基盤にあるから、町内の人同士が協力し合って祭りを支えていけるのではないのだろう。また、このような祭りが毎年あることで、そのコミュニティがさらに強化されていると同時に、地域全体の人との交流の場として機能しているのだろう。

しかし、曳山祭りに直接参加し、中心となっているのは男性や子どもであった。それでは、城端の女性が地域の中でコミュニケーションをとる場や行事はないのだろうか。女性たちが親交を深める特定の行事は城端にはないが、城端には、約4割の世帯の女性が会員となっている、「城端婦人会」という組織があることがわかった。この「婦人会」の活動は、城端に住む女性の間の連帯やコミュニケーションをはかる組織として機能しているのだろうか。このように考えて、「婦人会」の調査をはじめることにした。

調査をはじめてわかったのは、婦人会の活動は単に会員の女性同士が親睦をはかる機会を提供するだけでなく、地域に対する愛着や活動をすることで生まれる楽しみを会員にもたらしめているということであった。また、それぞれの町や城端全体に対して貢献する活動も行っていることがわかった。そこで、この報告では、「婦人会は地域に対してどのような役割を果たしているのか」、「会員にとって婦人会とはどのような組織なのか」という点について、調査成果をもとに明らかにしたい。

2. 調査方法

5月から9月の4ヶ月間の主に平日の日中に城端地区の民家を訪ね、聞き取り調査によって語りを集めた。また、月に一度行われる婦人会の会合に5月と8月の2回参加して、婦人会活動について情報収集をするとともに、会員同士の関わり方を調査した。さらに、9月からはある町のむぎや祭の練習に参加し、祭りでの仕事を調査し、聞き込みも行った。パレード練習とパレード本番に参加し、むぎや祭に参加しない町の会員の調査も行った。

調査対象は主に20代から80代までの女性で、年齢、地域、執行部（後述）の経験の有無が偏らないように工夫して聞き込みを行った。

3. 城端婦人会の概要

まず、城端婦人会の概要を見てみたい。

3-1. 婦人会の組織構成

婦人会とは、東京にある全国地域婦人団体連絡協議会を中心として、「地域婦人団体の連絡協議機関としてその共通の目的である男女平等の推進、青少年の健全育成、家庭生活並びに社会生活の刷新、高齢化社会への対応、地域社会の福祉増進、世界平和の確立などの実現につとめること」を目的に掲げる組織である。各都道府県に婦人会が置かれ、またそれぞれの市町村ごとにも婦人会が置かれている（図1）。この報告でとりあげるのは、南砺市婦人会の下部組織である城端婦人会である。さらに、城端婦人会は13町に分かれている。13町というのは旧町（概要の「旧町」を参照）と呼ばれる10の町に大宮野と川島と南町を足した地区区分である。

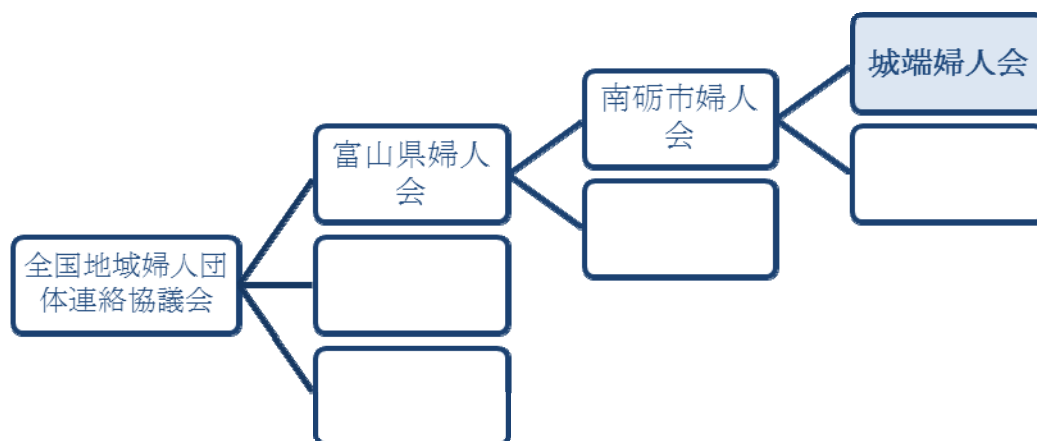


図1. 全国地域婦人団体連絡協議会と城端婦人会の位置づけ

3-2. 城端婦人会の仕組み

城端婦人会は女性の会員によって構成されているが、会員にはいくつかの役職があり、毎年交代する仕組みとなっている。

3-2-1. 会員

基本的に城端地区の世帯ごとに 65 歳までの女性一人が会員となる。「家主」の妻がなることになっており、城端在住の息子が結婚すると息子の妻が会員となって、姑は引退する。ただし、息子が結婚して数年間は姑が会員を続け、それから息子との妻に会員を交代する場合と、息子が結婚した年に交代する場合とがある。息子がいなかったり、いても城端在住でなかったり、あるいは息子がまだ結婚していない場合は、年齢制限の上限まで務めることになる。制限年齢は数年前に 60 歳から現在の 65 歳に引き上げられたが、人手不足の町では 70 代の女性も婦人会の会員として仕事を続けている場合もある。こういった場合は、65 歳から所属することになる老人会と婦人会の二つの組織に所属することになる。なお、婦人会会員の各地区における割合や、会員になる理由など、婦人会への加入に関する詳細は後述する。

3-2-2. 婦人会の構造

婦人会は、大きくわけて、執行部、三役^{さんやく}、「ハシリ」という 3 つの役職とそれ以外の会員から構成される。ただし、川島では、役員候補が見つからず 2011 年度から事実上婦人会活動が休止している。

執行部は会長、2 名の副会長、会計、書記、総務などの役職から成る城端婦人会の中枢部である。各年度の最後に、次年度に三役を行う役員の中から投票で選ばれるが、得票数の多い人物から順に、会長、副会長、会計、書記、総務となる。執行部は、全国や富山県から南砺市連合婦人会を経由して伝わってきた伝達事項を城端地区に伝えるとともに、城端地区全体での婦人会行事の運営の中心的役割を果たす。また、会長は南砺市連合婦人会の会合に参加する。

三役とは、13 町におかれる婦人会の役員である。町ごとに 3 名が選ばれ、各町での行事の運営や執行部との連絡の受け渡し等を行う。選ばれた 3 人は会長、副会長、会計の役職に振り分けられる。1 つの町は 6 つの「群」に分けられ、6 群のうち奇数群から計 3 名、偶数群から計 3 名が毎年交互に選ばれている（図 2）。ただし、近年婦人会会員数の減少が進んだため 6 群に分けるほどの人員がおらず、別の選出方法を採用する町もあり、また 2 名のみを役員とすることで役員を確保している町もある。以上に挙げた執行部と三役を務める会員は基本的に「役員」と呼ばれる。

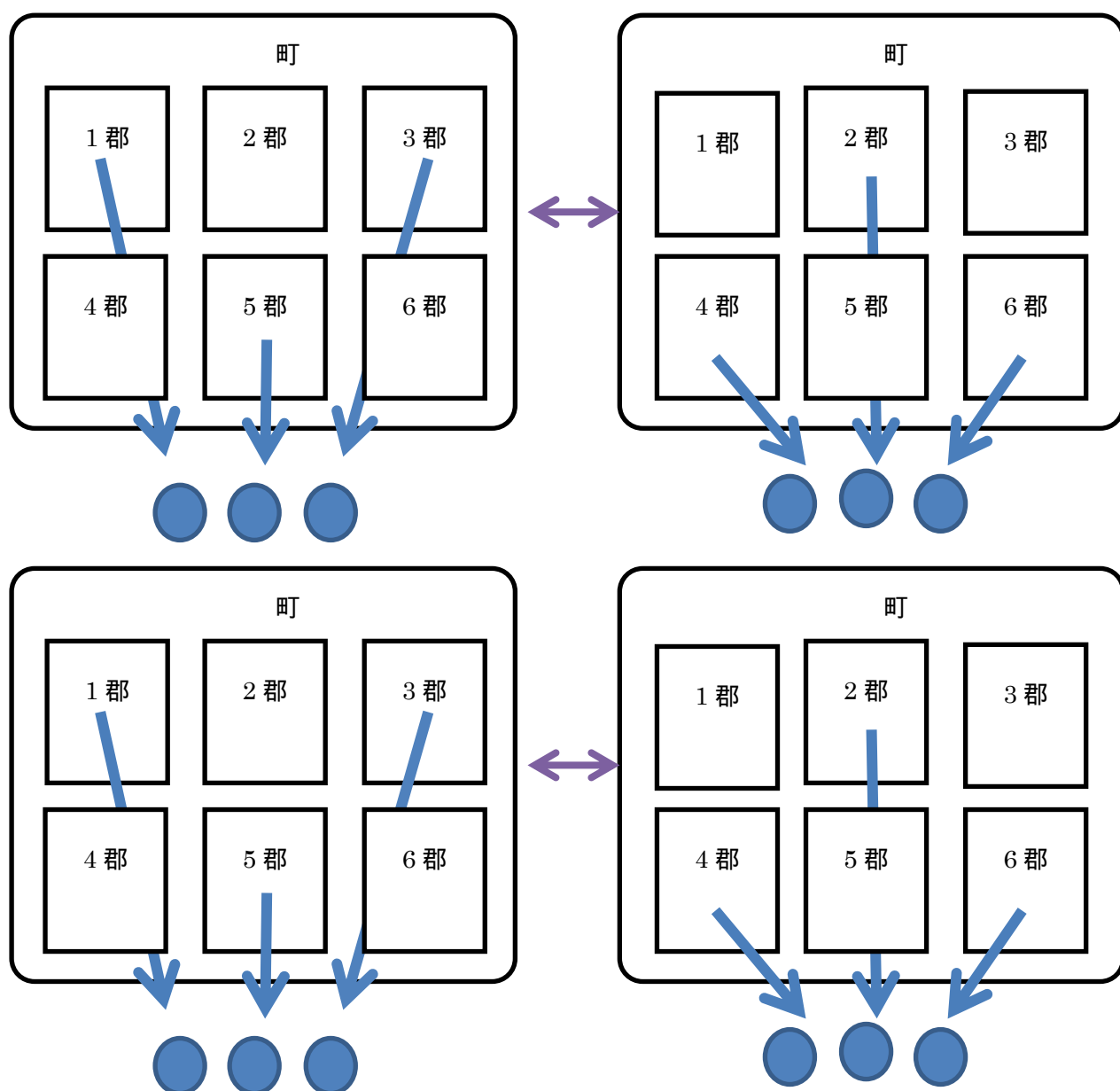


図 2. 三役の選出方法

「ハシリ」とは、名前のとおり、「使いつ走り」として三役の補助として各町内の三役以外の会員が手伝いをする役員である。当番と呼ばれることもある。前年に三役を務めた者が、務める場合や次年に三役を務める予定のある者が務める場合があり、町ごとに選出方法は違う。

以上に述べた執行部、三役、ハシリの関係を図 3 に示した。

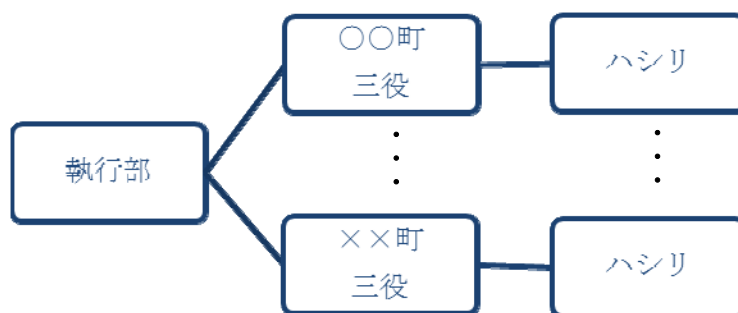


図 3. 執行部、三役、ハシリの関係

3-3-3. 会合

執行部のみの集まりが毎月第 3 水曜日、執行部と 13 町の役員の集まりが第 4 水曜日に行われる。町からは三役のうち一人が参加する。会合は、会社勤めをしている役員がいることに配慮して、19 時半から 21 時までの夜間に行われる。会合では、執行部が中心となり、連絡事項を伝える。

3-3. 年間活動

婦人会の活動について見てみよう。表 1 に年間の活動を示したが、1 年の間には多くの行事がある。婦人会の活動には、婦人会内で行う行事のほかに、城端全体の行事への参加、南砺市全体の行事への参加などがある。また、城端婦人会会員全員で参加する行事もあれば、三役だけが参加する行事もある。

表 1. 城端婦人会の年間活動

(平成 23 年度、城端婦人会だより第 81 号「年間行事予定」より作成)

城端婦人会年間行事	
4月	昆布販売
	城端婦人会だより第81号発行
5月	ちふれ化粧品販売
6月	遊休品即売会
7月	敬老会
	資源回収
	ウィメンズセミナー
9月	むぎや祭参加
10月	研修旅行
	城端婦人会だより第82号発行
11月	資源回収

2月	次年度役員選出
	新旧委員会
	きらら訪問
	城端婦人会だより第83号発行
3月	総会

4. 婦人会への加入につて

ここまでは、婦人会の概要について見てきたが、どれくらいの割合の女性が会員となっているのかということと、会員になる理由とならない理由について、資料や語りから述べていきたい。

4-1. 各町ごとの婦人会加入率

各町の世帯数における婦人会会員数の割合を図4に表した。もっとも加入率が高いのは、大工町で約56パーセント、次いで多いのが西上町で55パーセント、次が東新田町の52パーセントである。これらの地域以外では、婦人会への加入率は世帯数の半数以下である。先にも触れたが、川島地区は、今年度から休会という形となっているので会員はいない。

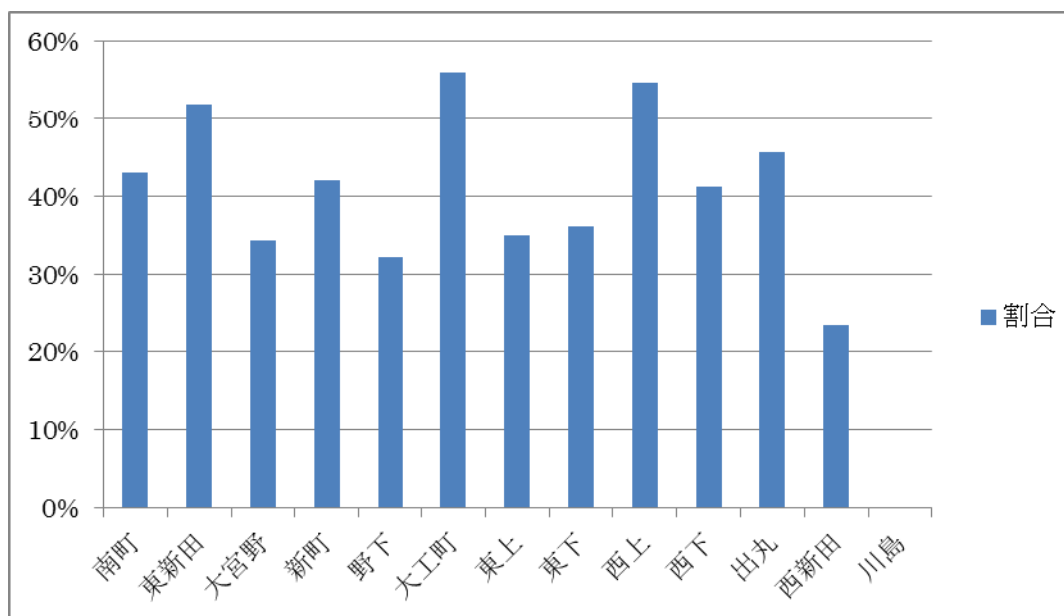


図4. 2011年度の婦人会加入率

『城端婦人会だより第81号』、『行政区別住民基本台帳人口および世帯数(平成23年4月1日)』より作成

婦人会の加入者がいない世帯は、65 歳以下の女性がいらない高齢者世帯、65 歳以下の女性がいても何らかの事情で婦人会に加入していない世帯、あるいは会員をやめた世帯である。

4-2. 婦人会に加入するきっかけ、加入しない理由

では、会員が加入した理由、逆に会員になっていない理由には、どのようなものがあるのだろうか。語りを中心にして、見ていきたい。

4-2-1. 加入した理由

婦人会への入会のきっかけのひとつは、加入が入らないとおかしいというある種の強制力があるということが挙げられる。しかし、婦人会への加入が拘束力をもっているかどうかについては、世代や個人によって事情や認識が違ふようである。以下は、聞き込みをした会員女性の語りである。

執行部経験のある西新田町に住む 60 代女性は「婦人会は強制的じゃない。50 代でも入ってない人もいるし、お嫁に来て入らない人もいる」と語る。執行部経験のある大宮野に住む 70 代の方は「好奇心があったから会員をした」と、自ら進んで役員になったという。また、東新田町に住む 60 代の女性は「広い町だから婦人会に入るのは強制的ではない」と、町の規模が大きいために活動が十分に行える会員数があるので、わざわざ加入を強制する必要がないことを挙げていた。一方で、「婦人会の会員は強制やったね」と新町に住む 60 代女性は自身が加入した時のことを回想する。東新田町の 30 代女性も、「婦人会は”こっち来たら入るもんだよ”という感じで入った」と語る。同じく東新田町の 60 代女性の「強制だけど自由なところはある。自由だけど、やっぱ入らんなん」という語りからは、曖昧なところはあるが、どちらかといえば参加が強制的であったことがうかがえる。強制的かどうかは、周囲が入っているからといった横並び的な意識なども含むため、個人によって受け止め方が異なるのだと考えられる。要するに、積極的に加入した会員もいれば、消極的に加入した会員もいるということだろう。

加入の際の具体的な事情としては、祭りと子どもに関わるものがある。たとえば、ある 50 代女性は「祭りもあるし、子どもに祭りに参加させたいから(加入した)」と話す。また、60 代女性は「子どもが(祭りに)出るとなると親は婦人会に入らないといけな」と語る。町の祭りに子どもが参加しだすと婦人会と関わりができ、そこから婦人会に入ることが多いようである。

4-2-2. 加入していない理由

加入するきっかけは以上のようなものであったが、加入していない人たちにはどのような理由があるのだろうか。

65 歳以下の人がいる世帯にて加入していない人たちに理由を聞いたところ、城端出身の 60 代女性は「会員にも入ったことがない。帰りも遅いし朝も早いから、誘われる

とか全然そんな気配もなかった。遠慮して声をかけてこなかったのかもしれないですけど」と、勤めの忙しさから入るきっかけがなかったと言う。また、ある 30 代の女性は「母は、婦人会をやめ、自分は体のことで婦人会には入っていない」と体調を入会しないことの理由として挙げる。このように、聞き取れたのはこのような理由であるが、加入していない人たちのそれぞれに個人的な事情があるものと推測される。

5. 行事における婦人会の役割

ここまでで婦人会の概要について記したが、ここからは婦人会活動がどのような活動をおこなっているか記述して、城端における婦人会の役割について考えてみたい。

5-1. 婦人会が関わる行事

婦人会は様々な行事に関わっているが、それぞれの行事で婦人会はどのような役割を果たしているか、見ていく。

まず、曳山祭においては、第 2 章でも述べられていとおり、祭りの運営に女性は参加しない。ただし、婦人会の三役は、曳山の曳き手の休憩所で、おにぎり、お茶、弁当などを用意し、後片付けも行う。

婦人会主宰城端地区で募った遊休品の販売を行う行事では、執行部と三役で運営を担当する。敬老会では、南砺市の各地区の婦人会が高齢者向けの出し物を行う。執行部が出し物の考案と運営を進め、役員全体が参加する。出し物によっては 1 カ月以上前から準備や練習を行う。60 代女性は「敬老会（の仕事）が一番大変だった。出し物をしたり、お菓子を出したり、人数の把握や、老人の世話が大変だった」と語る。

第 4 章でも触れられているが、婦人会の会員はむぎや祭に参加する踊り子の準備から、踊り練習、本番、片付けまで間、むぎや祭の裏方を担う。また、むぎや祭 2 日目の夜には、むぎや祭に参加していない町の会員を中心とする 200 人余りで城端中心部を練り歩くパレードを行う。むぎや祭に参加している出丸町の女性は「むぎやが終わったら婦人会の仕事がひと段落したなぁと感じる。婦人会の仕事でむぎやは大きい」と語り、同じくむぎや祭に参加している西下町の女性は「多分、婦人会が一番むぎやに関わっている」と言う。むぎや祭に婦人会は大きく関わっている。むぎや祭での婦人会の仕事は、多岐に渡り、それぞれの仕事について婦人会会員が抱く印象も様々であるので、次に語りを中心として詳しく見ていきたい。

5-2. むぎや祭における婦人会の役割

今年、三役をしている 30 代女性は「特にむぎや祭の前は婦人会の仕事内容の負担が大きい」と語り、ある 60 代女性は「とにかくやっぱ、むぎやが一番ひどいっちゃ。これなければ楽ながいいけど」と話す。婦人会の仕事の中で、むぎや祭における活動が負担の大きいものがあることがうかがえる。ここでは、祭りの流れに沿って、婦人会の活動

と語りを見ていきたい。

5-2-1. むぎや祭準備開始から踊り練習開始まで

むぎや祭の準備は、踊り手探しから始まる。家々を回って踊り手になってくれるよう依頼する。婦人会会員たちは、むぎやの無い城端内の町で募ったり、町内の人の親戚や現在いる踊り子の友人などの伝手をたどったりして踊り手を集める。踊り手が集まると、踊りの講師に指導を依頼する。

婦人会を引退したある 80 代女性は、「だんだん少子化になって、踊り子さんを集めるのが大変になった。村部まで頼みに行くのが苦労した」と語り、今年三役をつとめている 60 代の女性は「人集めるが大変。ほとんど子どもいない。高校とか大学とか行くと県外に出てしまう。つらい」と語る。こういった少子化の影響から踊り子探しが大変という語りが多く聞かれる。また、30 代女性の「踊り子を頼みに行くときは家まで行く」や 60 代女性の「去年から（町内の人の縁故を辿っても中学生がいないから）中学校の門の前で立って声をかけて呼び掛けている」という語りからは、かなりの時間と労力をかけて踊り子集めを行っていることがわかる。ある 60 代の女性は昔を振り返って、「昔は子どもが多すぎたので（今とは逆に）出られない人に”出られない”と頼みに行くのが大変だった」と語るが、少子高齢化が進む現在の城端では、踊り手となる子どもを集めるのは困難な仕事である。

5-2-2. 踊りの練習

婦人会は、祭り前の練習場所の準備、踊り指導の手伝い、講師や練習を見に来た人へのお茶酌み、練習の音楽掛け、子どもに渡すおやつの準備、片付けなどをおこなう（写真 1）。

60 代の女性は「毎晩毎晩の練習が大変。衣装合わせたり」と語る。三役になると、9 月初旬からの毎晩、ハシリは日替わりで練習の面倒を見なければならないので、この苦労を話す人が多い。また、別の 60 代の女性は「踊りを全くやったことのない子どもに教えるのも大変なのよ。指先まで教えなきゃいけないからね」と話す。練習の中でも具体的な踊りの指導に苦労していることがわかる。長年婦人会のパレード練習を教えていた 60 代女性は当時を振り返り、「婦人会のパレードの練習は三分の一ぐらいが毎年はじめて踊る人だった。教えるが大変だった」と語る。踊り練習の面倒や踊りを教える作業の大変さがうかがえる。



写真 1. ある町のむぎや祭の練習風景（写真手前は世話をする婦人会会員）

5-2-3. 祭り当日と片付け

むぎや祭の当日は、踊り子の衣装の着付けや化粧などの準備をした後、本番では舞台袖で面倒を見る。終わった後は、衣装の片付けを行う。

ある 60 代女性は「むぎやの当日はひどい。（祭りが終わった後も、）細かいもん（衣装）は全部家で洗って畳んで。今はクリーニングに出すけどね」と語り、別の町に住む 60 代女性も、「むぎやの後、衣装を洗濯するのが大変だった。今はクリーニング」と語り、どちらの女性もかつてのむぎや祭の後片付けが大変だったことを回想する。

50 代の女性は「むぎやの裏方は婦人会だから、婦会が必要」と語り、ほかの 50 代女性も「婦会が必要やと思う。公民館の掃除したり、色んなこと、必要やねえ」と語るように、祭りを後ろで支えているのは婦会だと自負していることが分かる。

5-3. まとめ

婦会会は曳山祭の裏方や、敬老会、遊休品即売会といった行事の際の活動を通して、城端地域の人々の行事に貢献している。特にむぎや祭では、踊り子集めから本番に至るまで長期間かつ仕事量の多い幅広い作業をこなして、婦会会の貢献なくしては祭りは立ちいかない。城端において婦会会が果たしている役割は、城端の様々な行事を支えているという点にあると言える。

6. 会員にとっての婦会会

次に、会員女性たちにとって婦会会がどのような組織であるかということについて、見ていきたい。

6-1. 婦人会活動から得るもの

調査では、「婦人会活動をしてよかったことは何か」という質問を婦人会の会員たちに投げかけた。この問いに対する回答を整理して、会員たちが婦人会活動から得ているものを明らかにしたい。

6-1.1. 交流と作業の楽しさ

60代の女性は「コミュニケーションができたり、ほかの人と話せたり、村部の人ともコミュニケーションがとれる」、50代女性も「とりあえず一番大切なのはコミュニケーションが取れること。結びつきができたり情がわく」と語る。

また、福光から城端に婚入してきた40代の女性は「三役になるまでは、どこにだれが住んでいて誰がどこのお嫁さんか、子どもかわからなかったけど、三役して初めてわかった」と語る。また、城端出身の30代女性も「“この家のなんとかさん”とか“この家のお孫さんが誰だ”とかがわかる」と話す。城端の外から移り住んできた人にとっても、城端出身の人にとっても、婦人会活動を通じて、近隣の様子を知ることができることがうかがえる。

婦人会活動で知り合った人と長い付き合いを続けている人もいる。60代女性は、「(婦人会で一緒だった人とは)仲良くなりました。結構年離れた人とも仲良くなりました。今でも続いております。婦人会してなかったら会うこともなかった人とそれなりにお付き合いしてる」と語り、70代女性も「執行部で一緒だった同世代の人とは今でも遊びに行く」と語る。執行部や役員の会合では、城端町全体から人が集まるため、町を越えた交流が生まれるようである。

60代女性は、三役をした年を振り返り、「みんなに協力してもらわんな。みんなのおかげで一年終わったようなもん」と語る。この語りのように「協力しあえたことがよかった」と語る人も少なくない。50代女性は、「お願いしても(三役の仕事が)大変ってわかってるから協力してもらえる。してもらったら今度はしてあげようと思う」と語る。

このように、会員たちにとって、婦人会は町内の様子を知ったり、町内外を問わず、他の女性たちとの交流と協力を深めたりする場となっている。

6-1.2. 活動の楽しさと城端の生活文化の学習

さらに、婦人会は、活動自体に楽しさを見いだしたり、思い出をつくったりするという場でもある。たとえば、福光出身の40代女性は、「大変やけど、奥さんたちとひとつのことをする楽しみはある」と語る。また、城端出身の60代女性は、「家の中にいるだけではできない、色んなことができてよかった」と語る。さらに福光出身の60代女性は「人選は大変だけどワイワイやるのは楽しかった」という。これらの語りから、婦人会の活動の中に楽しみを感じていることがわかる。ただ楽しみを感じているのではなく、活動のはじめや、最中では「大変」という思いを持っていながらも、終わった後や、数

年後に振り返ると”楽しかった”と思うようである。60代女性の「はじめはゴタゴタ言うけど、やったらやったで”楽しかったね”と言う」や、同じく60代女性の「やってるときは早く終われと思った。今から考えればいい思い出やちゃ」と話す。

また、婦人会活動に携わることで、城端に対する知識が増える、あるいは城端に対する愛着がわくという会員たちもいる。石川県出身の20代女性は「(婦人会に)参加しないとわからなかった、城端のこと、祭りのことが知れた」と語り、福光出身の30代女性は「ただの会員ではわからない、(行事の)裏方の仕事を知れた」という。結婚で城端で暮らすようになった女性たちにとって、婦人会活動は、城端の生活や文化を知るきっかけとなるのである。城端出身の70代女性も「(婦人会で)色んなことを教わる。知らなかったことがわかる」と語り、同じく城端出身の60代女性も「それまでは町内にお世話になっていてしてもらっていたから、(自分が)人のお世話して良かった。愛着もわく」と語る。城端出身者にとっても、婦人会活動を通して、城端の社会や文化により深く関わるができることがうかがえる。なお、このような語りは、祭りのある町で聞かれることが多かった。

6-2. 婦人会活動の苦労

聞き取りをおこなった会員たちのなかには、少数であるが、「婦人会に参加してよかったことがない」と答える人もいた。この人たちにとっては、婦人会活動はあくまでも課された義務であり、婦人会活動から得たものは特にないようである。また、ある町では「(婦人会に加わっても)メリットが何もなかった」という理由で会員が辞めていくこともあるようだ。また、「あまりよかったと思ったことは無い。義務」、「会合で知り合いができたということも特になかった」という語りも、年配の一部から聞かれた。どのような組織でも同じだが、活動を通じて得るものがあつたと感じる人もいれば、そうでもない人もいる。

会員たちにとって切実なのは、すでに見た交流や作業の楽しさ、城端についての知識の習得といった面と表裏一体となっている活動に伴う負担である。60代の女性は「もう休む間もなく、忘れん思い出やわ」と婦人会での活動を振り返って語る。ただし、一年を通じて大変であるという語りよりも、40代女性の「三役はやっぱり大変」といった語りや、60代女性の「この十カ月は我慢して我慢してやね」という語りのように、三役や執行部など、特定の役職を受け持つ際に負担が多いという語りが多い。

それでは、会員たちにとって、どのような負担があるのだろうか。

6-2-1. 職責と拘束時間

仕事の量だけでなく役職が回ってくる頻度について、負担が表現されることが多い。。新町に住む50代女性の「役員になることが多くなるとひどくなった。10年に1度とかならまだしも」や西上町に住む60代の女性の「人がだんだん減って役員がすぐに回ってくるようになった」や西下町の50代女性の「はじめはあまり回ってこなかったけど、

4年に1度ほどでバーっとすぐ回ってきますよね」のような、役職がすぐに回ってきて休む暇がないという語が多い。一方で、町の規模が大きいと、役職が回ってくる頻度は減るので、たとえば人口の多い野下町や東新田町では、役職の負担はそれほどでもない。たとえば、大きな町の会員たちは、「この町は城端町の中で大きいから（役が）あまりまわってこない」、「今ん所はそんなにしょっちゅう役がまわってくることもない。10年に1回ぐらい」と話す。

拘束される時間が長いことが負担であるという認識を持つ人も多い。60代女性は「三役のときは家をほかって行かなきゃいけない。時間は拘束されるね。執行部のときは時間とられた。でも正直若かったからできた」と語る。20代女性は「（家のことがあまりできなくなるので）家族の手伝いが必要」と語る。敬老会や、むぎや祭の準備期間では、長時間かつ長期間仕事を行っているようだ。

仕事量が多く、時間が拘束されるため、仕事や子育てとの両立に苦労している人も多い。商店を営む70代女性は「商売してるから忙しくて。役員をするときは店を閉めなければならなくなり大変だった」と語り、会社に勤める50代女性も「仕事をしているので、むぎやの時は毎日急いで帰ってきている」と語る。自営業を営む人も会社勤めの人も、ともに拘束時間が長いことを大変だと感じていることがわかる。また、現在三役を務める30代女性は「子育てとの両立が大変」と語り、50代の女性は「子どもも年寄りも世話をして、仕事もあるから時間作るのが大変だった」という。手が離れる前の幼い子どもを持つ人にとっても、役員の仕事は負担であるようだ。ただし、会員数が現在よりも多かった頃は、今ほどの負担はなかったようである。ある70代女性は「時代もあって（婦人会活動は）苦痛でもなかった」という。また、むぎや祭の無い町では60代女性の「うちは何にもないからそんなに大変じゃない」や70代女性の「この町には（行事が）何にもないから婦人会は楽だったよ」などの話からは、地域による負担の大きさの違いも見えてとれる。

6-2-2. 人間関係

城端の外から婚入して来た人の中には、婦人会の中で慣れない人間関係に負担を感じた人もいるようだ。60代のある女性は「城端に来て間もない頃は（婦人会の）人間関係でつらい思いをした」と語る。70代の女性も、「お嫁に来てすぐに婦人会に入った。いろいろ言われて大変でした。周りにしっかりした、年を召した方が多かったから」と語り、60代女性も「若い人とお年寄りで話すテーマが違うし、昔は当たり前だったことを話し合ってるから”話、合わんわぁ”と言う人もいる」という。婦人会には様々な世代が含まれるので、人によってはコミュニケーションがとりづらい面があることが分かる。ただし、このような語りは、年配の人に多かった。

6-3. まとめ

会員にとって、婦人会は二つの面を持っている。一つは協力しあって活動することの

楽しさや他の女性たちの交流の場であったり、城端の社会文化を学ぶ場であったりする面であり、もう一つは、大きな負担や人間関係の困難さがあったりするという側面である。

7. 婦人会の将来

最後に、婦人会の今後を展望しておきたい。

7-1. 会員の減少と高齢化

図 5 に、2008 年度から今年度までの婦人会会員数の推移を表した。図 5 に、2008 年度から今年度までの婦人会会員数の推移を表した。図で分かるように、ほとんどの町で会員数は減少傾向にある。これは、66 歳を越えて引退する人数よりも、新規の加入数が少ないためである。

「むぎや祭も大変だと思うけど、婦人会もこれから大変だろうなと思うよ」と、ある 60 代女性は語る。婦人会を引退した 80 代の女性は、「会員数が激減して...それが悩みの種やちゃ」と語る。60 代の女性は、「会員数、私らが嫁に来た時はたくさん若い人がいた。子どももいっぱい。過疎になってきたね。城端線の最後（終点）だからね」と、城端の人口減少と少子化を会員数の減少の原因に挙げる。また、ある 60 代女性は「嫁がおらんから会員が減っていく」と話すが、婚入者の減少もまた会員数の減少の原因だという語りも多かった。さらに、別の 60 代の女性は、「道が広がって城端町の人が減って会員数も減った」と話すが、これは、9 章で詳しく紹介されることになる国道 304 号線の拡張工事によってかなりの世帯が移住したことを指す。

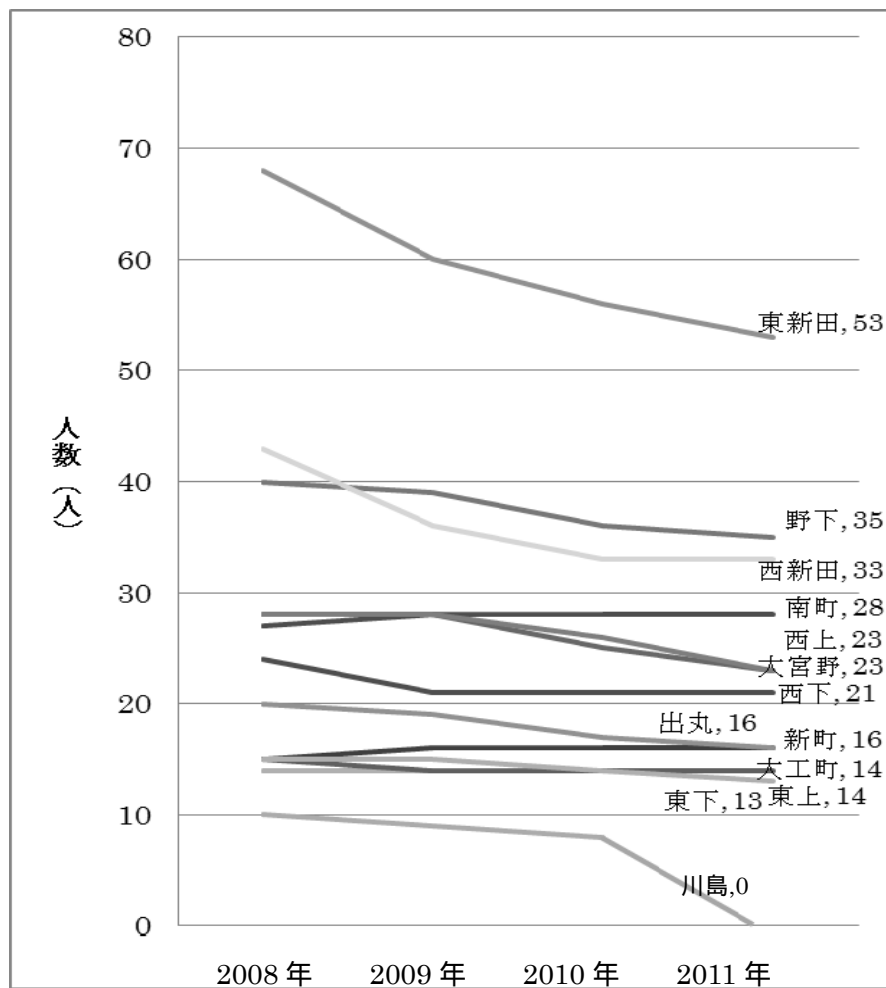


図 5. 婦人会会員数の推移

『城端婦人会だより第 81 号』より作成

もうひとつ、婦人会の会員数減少にともなって問題となっているのは、会員の高齢化である。13 町のひとつである A 町の 2011 年度の会員数に占める各年代の割合を図 6 に表した。図を見れば分かるように、60 代の会員が半数近くを占め、20 代の会員は 4 パーセントに過ぎない。1 章の地域の概要で城端全体で高齢化が進んでいることが示されているが、A 町だけでなく、他の町でも婦人会の高齢化が進んでいるものと推測される。

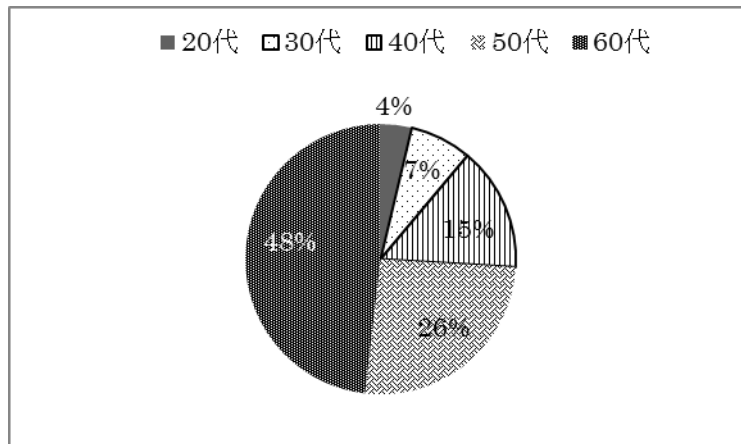


図 6. 年代別婦人会会員数
(平成 23 年度、A 町の三役の話より作成)

ある 60 代の女性は「今は若いお嫁さんがいないから、70 代過ぎの人でもたくさん婦人会会員をしている。定年過ぎた人がやるのはいいけど、それでいいのかって話。”婦人”っていくつまでなんやって話。でも人がいないからねえ。しょうがなく年寄りが仕切ってる」と、人不足で、やむを得ず高齢者も婦人会活動に協力しているという事情を語った。また、別の 60 代の女性は、「子どもが小さいうちに役をするならいいけど、今は都合悪い。今のことわからんし」や「(本来は)若い人たちがやっていたことを年配ばかりの私たちがやるのは大変」と話す。高齢者が婦人会活動をおこなうことには、現在の事情を把握するのが難しいという苦労があることがうかがえる。一方、ある 30 代女性は、「60 を超えても(婦人会の仕事を)やっていただければいいけど、なかなかね」と語る。若い世代から見ると、少ない若い会員に負担が集中しているので、年配の人たちにも活動に加わってほしいという事情がある。いずれにしても、婦人会の高齢化は、今後、婦人会が存続していく上で大きな問題となっているのである。

7-2. 婦人会の存続

以上に挙げたような問題を抱える婦人会活動であるが、今後はどうなっていくのだろうか。婦人会活動の今後に関する語りを紹介したい。

ある町に住む 60 代女性は「もう限界かね」と言い、「(婦人会の)休会はしょうがない」と話す。会員減少と高齢化によって婦人会の活動が今後も続けられることを危ぶむ人も少なくない。また、別の町の 50 代女性も「これからは、(婦人会は)なくなっていくんじゃないか。それか、老人会と兼ねて、今の仕事を 80 歳になってもやらないといけなくなるのではないかな。減るばかりやもん」と言う。婦人会の存続のためには、いっそ 80 歳ぐらいまで定年を伸ばすしかないという悲観的な観測である。

8. まとめ

城端婦人会は、城端の様々な行事を支える役割を果たしている。この意味では、婦人会は、城端の社会文化の維持の一翼を担っていると言えるだろう。とりわけ、むぎや祭は、婦人会の活動なくしては成り立たないと言ってよい。

また、婦人会は、活動を通して、城端に住む 20 代から 60 代の女性に、コミュニケーションや楽しみ場や城端に親しむ機会を与えている。しかし、その一方で、婦人会は、活動をしていく上での苦労や負担も併せ持っている。そして、人口減少や少子高齢化によって、会員数が減少し、会員のなかの高齢者にとっても、また比較的若い層にとっても、苦労や負担の面が徐々に大きくなりつつある。会員数の減少と高齢化にどのように対応していくかが、城端婦人会の将来だけでなく、婦人会が支えている城端の様々な行事の存続にも関わっているのである。この意味では、婦人会が現在抱えている問題は、城端全体の課題であると言える。

謝辞

高畑様、河合様、蓑川様をはじめとする婦人会執行部のみな様、その他の会員のみな様など多くの方にお話を聞かせていただきました。調査の必要に迫られて、お宅へ伺って話を聞かせていただくことも多かったのですが、アポイントもとらず訪問した私に懇切にお話を聞かせていただいたこともたくさんありました。また、会合に出席させていただいたり、むぎや祭の練習を手伝わせていただいたり、婦人会のパレードに参加させていただくという非常に貴重な機会も与えていただきました。どのみなさまも私を温かく受け入れて下さり、気さくに話して下さいました。みなさまのご協力のおかげで、生き生きとした報告を作成することができたように思います。また、大村様には合宿の滞在場所を提供していただきました。みなさま、本当にありがとうございました。

6. 神社・伝説・祭りから見る人々の「郷土観」

吉浦 翔

1. はじめに

昔話や地域に伝わる伝説は、道德心を育むために年配の住民から子どもへと物語として受け継がれている。この場合の道德心とは子どもに公共心などを育成するという役割を持つだけでなく、地域の生活に密着した水や稲といった生活に必要な物資を保護し、大切に扱うという役割も持っていた。すなわち、昔話や伝説を伝えることは、地域住民が大切にしている公共心や自然に対する認識といった「郷土観」を伝えることでもあったのである。

現在では、昔話や地域に伝わる伝説は人々の意識から徐々に消えつつある。これは、今と昔では身近に存在するものが変化してきており、人々が必要だと感じる物資や公共心が変化してきているためだと考えられる。

この報告では、城端において「縄ヶ池」に通じる水、「不吹堂」に通じる風、様々な神々を祀ることになった神社に関する観念の三つについて、住民がどのように認識しているかをまとめ、住民が抱く城端の郷土観について明らかにする。ここから、城端の人々のニーズが何に変わってきており、それに伴い失われた考え方と、得ることが出来た考え方といった、城端の人々が現在の「郷土観」を持つにいたった原因を明らかにするのが本稿の目的である。

2. 調査地の概要

今回の調査地である城端は、富山市から南西にある南砺市のさらに南にある平野部に存在する地域である。

その城端の南西にある高清水山系^{たかしみず}の海拔 830 メートルの地点に、城端の人々の水についての伝統的な認識を考察する上で重要な縄ヶ池^{なわがいけ}がある。縄ヶ池は周囲 2 キロメートル、自然に出来た堰塞湖^{えんそくこ}⁴である。縄ヶ池は、近郷の 400 ヘクタールもの田畑の水を満たす池川の源流として神聖視されていたと言う。いつごろから伝えられ始めたかは不明だが、決して穢してはならない池として、春の田植え期や秋の収穫期には縄ヶ池へ行くことさえ、禁じられていた。

⁴地震、火山活動などで谷がせきとめられてできた湖

また、城端は昔から南風が強く、住民は強風に対する様々な対処法を考えてきた。その中の一つの方法として、風の神を鎮めるため、あるいは風の神に強風を止めてもらうために、風の神を祀る神社が建てられた。この神社は城端の各地に建てられ、現在も、風が「吹かない」という言葉の方言、「ふか^ふか^かん^んど^う」に掛けて、「不吹堂」と親しみをこめて近隣の住民に呼ばれている。

また、城端には多くの神社があり、一社の神社あたりに多くの神々が祀られている。一般に、地域に密着している神社に対して近隣の住民は親しみを感じている。

3. 水についての観念

城端の人々にとって水は大切な存在である。もともと、南砺平野には水が少なかったが、城端に人が集まり、米作りが始まった。縄ヶ池(写真1)は、用水の供給池として、城端の人々に重宝されることになる。



写真 1. 縄ヶ池

その後、縄ヶ池は富山湾に面した氷見からも水を汲みに人が訪れるほど有名となり、また、「龍神伝説」といった伝説が縄ヶ池近郊でうまれるほど神聖視されるようになった。

3-1. 龍神伝説

「龍神伝説」は、おおよそ以下のような内容である。

『昔、一平という若者が蓑谷という地域の端に一人で住んでいた。ある時、みの子という若い女が一人で訪ねてきて、縄ヶ池の近くに一人で住んでいたが、さみしくなったので、人里まで下りてきたという。さらにできれば一緒に住みたいともいうので、一平はこれを快諾し、二人は一緒に住むことになった。やがて、二人は子どもを授かること

になる。しかしここで、みの子が実は縄が池に住む龍だということがわかる。みの子は、龍と人の子どもと分かれば子どもが不幸になると考え、子どもを産むと一平に子どもを任せ、自分は縄が池に戻ってしまう。その子どもは藤太^{とうた}と名付けられ、母親を知らずに育てられたが、ある日一平に母親が実は龍であることを伝えられる。藤太は母親に会いに縄が池に向かい母親と再会するのだが、母親は藤太に神通力によって身体能力を向上させ、命を落としてしまう。そしてそれと同時に縄が池は干上がってしまう。しかし、藤太は神通力によって上昇した身体能力を何かに役立てようと考え、都に向かうこととなる。そして都にて藤太は出世し、帝から「俵」の名を承ることになる。立身出世した俵藤太は一度地元に帰ることになったが、その道すがら大ムカデを退治することになる。これは道すがら出会った龍神の、龍の子を食らう大百足を退治し、龍の子を助けてほしいという願いのためである。俵藤太は得意の弓矢で退治しようと考えたが、ムカデの表面が頑強なためなかなか貫くことができない。龍神が、ムカデを退治する際は、矢の先端に「つば」をつけるとよいと話していたので、3本目の矢を放つときに「つば」をつけてみた。すると、表面ではじかれていた矢が奥深くまで食い込み、ついには大ムカデの身体を貫いた。無事大ムカデを退治した俵藤太は龍神に退治した旨を伝え、龍神からお礼の品として龍の子をもらった。俵藤太は龍の子を縄が池の跡地まで持ち帰り、縄が池に龍の子を放ち、一日経つと縄が池の跡地に水が張っており、水はそれ以後途絶えることがなかった』

以上が龍神伝説の大まかな内容で、話者によって若干内容が変わるものの、60代から80代の城端住民には広く知られている。この伝説から、縄ヶ池は、龍神が存在する畏怖の対象であったことがうかがえる。

3-2. 縄ヶ池祭

次に、縄ヶ池の龍女を祀る縄ヶ池祭についてふれることにする。龍女は「御女郎様」^{おじょうらさま}縄ヶ池にもともといる龍だと言われているが、上記の龍神伝説では、俵藤太が放流した龍の子ではないかとも言われている。この祭りは毎年7月15日に縄ヶ池と、縄ヶ池近郊の蓑谷^{みのだに}という地域の旧公民館前に存在する石碑(次ページの写真2)の前で行われる。



写真 2. 蓑谷旧公民館の石碑

縄ヶ池祭は7月15日の午後から始まる。まず旧公民館前で、蓑谷の住民と、蓑谷に隣接する北野という地域の住民、神社の宮司^{くうじ}を合わせて30名ほどが集まる。宮司が太鼓を鳴らし、祈禱を挙げた後、参加者全員が石碑の前で二礼二拍手一礼をし、玉串を捧げる。その後、宮司が少し縄ヶ池祭の由来について話し、縄ヶ池へと移動する。縄ヶ池に着くと、全員で縄ヶ池の祠^{ほくら}まで掃除をしながら進み、祠に着くと旧公民館前と同じ流れで儀礼をおこなう。儀礼が終わると全員で供え物のお神酒や赤飯のお裾分けを食べてつ歓談して、祭りは終わる。

3-3. 「縄ヶ池からみる」水に対する観念

縄ヶ池に住む「御女郎様」は、人が縄ヶ池に石やゴミを投げたり、縄ヶ池を粗末に扱ったりすると、川の氾濫が起きるくらいの豪雨を起こすが、住民にとっては親しみ深い存在であることが、いくつかのエピソードから読み取れる。

たとえば、城端の中心にある善徳寺という寺の宝物を虫干^{むしぼし}する季節には、「御女郎様」が寺に訪れて説法を聞いていくという昔話がある。城端は善徳寺という寺を中心に栄えた寺内町であるので、人々にとって寺の説法は身近なものとなっている。人々にとって身近な寺の説法を聞いている「御女郎様」は、人々にとって身近な存在であったことがうかがえる。また、縄ヶ池には「鏡岩^{かがみいわ}」と呼ばれる大岩があり、「鏡岩」で「御女郎様」が髪を梳かしていたという逸話も残っている。この逸話では髪を梳くという女性らしい行為と、「御女郎様」が髪を梳いているときは、その行為を覗いてはいけないという「御女郎様」の気恥ずかしさ、人間らしさから親しみを抱くことができる。

「縄ヶ池」の女神として神格を持っていた「御女郎様」は豪雨を起こすことから「水の象徴的存在」とも言える。城端の人々は、いつ天災を起こすか分からない象徴的存在と、敵対し反発しあうのではなく、むしろ気恥ずかしさすら見せる人間らしさを持つ親しみ深い存在として見ていたことがうかがえる。

しかし、現在では、徐々に認識が変わってきているようである。30 代ぐらいの世代の住民から以降は、家庭の中で親から話を聞くのではなく、学校の先生から地域学習の一環として縄ヶ池の話を聞くようになり、民間の伝承として話を聞く機会が少なくなってきた。縄ヶ池のことは知っていても、「御女郎様」のことを知っている若者や子どもは少なくなってきた。このため、縄ヶ池を通じて水について深く考える機会がなくなってきた。また、実際に縄ヶ池祭に参加していた人も、「池に祈る」のではなく、「池を大切にする」考えを抱いている。これらのことから、縄ヶ池は「畏怖心を持ちつつも親しみを持っていた存在」から、「放置していたらなくなりかねない保護の対象」に変わりつつあると言えるだろう。

4. 風についての観念

風は大気の動きであり気象現象の一つである。そして風は空気の流れであり我々の視覚では捉えられない。雲の流れとその形、木々の葉や稲穂が揺れる様子、海の波立ちと煙突の煙など、何らかの媒体をとおしてのみ認知できる存在であったため、コントロールすることは難しい。しかし、日常生活の中では、風は台風、竜巻、季節風などとなって、風害や火災などを引き起こし、農作物や家屋に被害を与え、場所によっては生活それ自体にも大きな影響をもたらしてきた。砺波平野では、昔から南風が強く吹いていたため、8章で触れられる屋敷林のように様々な対応策がとられてきたが、同時に、「風」は「目に見えない」もの故に、人知を越えたものとして、祈りの対象となっていた。「見えないもの」が持つ破壊力への畏怖の念は、人々に「風神」を想起させ、これに祈りを捧げる「祭り」を行ってきたのである。富山県の場合、砺波地方から新川地方の山麓地域にかけて点在する「不吹堂」の存在がそれを示している。ここでは、城端北部の是安という農村地域にある越中五社大明神不吹堂級長戸辺神社から、住民の風に対する認識をみていくことにする。

4-1. 越中不吹堂級長戸辺神社について

越中不吹堂級長戸辺神社(以下「不吹堂」)の創立は江戸の初めて、風害がひどかったため住民が各村々と団結し、加賀藩主から土地をもらって創建した。地域を守護する神は、通常「氏神」といい、「氏神」の守護している地域の範囲内にいる住民でその「氏神」を祀っている住民を「氏子」という。しかし不吹堂に「氏子」はなく、「敬神会」という団体が運営をしている。「敬神会」は城端から北部に進んだ場所にある福光という地域の住民が中心に昭和 26 年に発足した法人団体で、神社の改築などにも積極的に関わっている。

祭神は龍田大社の級長戸辺大神を主祭神であり、伊勢神宮の天照大御神、石清水八幡宮の誉田別命と、春日大社の天児屋根命、丹生川上大社の罔象女神の五大明神が

祀られている。主祭神の級長戸辺神は天と地の間、大気、生氣、風力を司る神で、「風神」と呼称される。風といっても、生命は呼吸によって始まり、音声を出すには空気の振動が必要不可欠なため、呼吸と音声も司っている。また、級長戸辺大神を崇敬し、神が所持している水を飲めばどんな病も完治するといわれており、生命力をも司っている。

現在の級長戸辺神社の境内の入り口は写真 3 のような景観となっているが、昔は木が生い茂っており、入口から神社の本殿が見えず、畏怖する心からか天狗が出ると伝えられていた。



写真 3. 級長戸辺神社の入り口

4-2. 不吹堂と地域住民のつきあい

不吹堂では 7 月 15 日に風鎮祭があり、その祭りは敬神会に所属している人が優先的に集められるが、地域住民も気軽に参加することができ、地域の住民からはこの祭りは「ふかんどうぼん不吹堂盆」と呼ばれている。「不吹堂盆」では敬神会に昔から参加している地域の中から年毎に担当の地域を決め、担当の地域の子どもたちが「ミコ」と呼ばれる踊り手として、神に風鎮を祈願して舞を踊る。そして、近隣の 70 代から 80 代の住民にとっては、この「不吹堂盆」が一年の中の楽しみだったらしい。また、昔は神社の境内に土俵があり、人が集まればそこで相撲をとっていたが、祭りでは相撲の大会が開かれていた。相撲大会で優勝した人は表彰されたが、神社の本殿の中には、年毎に優勝した人の名前が残されている。

しかし、「不吹堂盆」について、40 代から 60 代の住民はこの祭りに詳しくなく、親しみも持っていないようであった。また、この祭りは毎年新聞に掲載されるほど有名ではあるが、年々記事の扱いが小さくなってきている。徐々に、風を祭る神社や祭りと住民の関係が薄れてきていると言えるかもしれない。

4-3. 風に対する観念の推移

もともと目に見えない風は、よくわからないうえに人間には対抗できない異常な力によって建築物を壊し、作物をなぎ倒していたので、風に対して畏怖することは自然なことであった。どのようなことが効果的であるか不明だったため、神に祈り風を鎮めようとし、他にも、農業で重要な道具である鎌を使って風の力を弱めようとした。鎌は風を切り裂き、風の力を弱めると言う逸話が全国的に存在するのと同様に、城端でも家の四隅に鎌を置き、家を守ろうとした逸話が残っている。このように、風に畏怖を感じながらも風に逆らうのではなく、鎮める、あるいは力をそぐと言ったように、柔軟に対応する姿勢が見受けられる。

しかし、建築技術の発展に伴い、人々は、徐々に風に対して意識を向けなくなっている。現在でも、台風が来たときには注意が呼びかけられるが、建築技術の発展に伴って日常的に特別な風害対策をとる必要はなくなってきた。農業が生活に密着していた時代では、強風は生活を脅かすものとして恐れられていたが、現代では少々の風害は脅威ではない。

5. 城端の神社からみる郷土に対する観念

次に城端の神社からみることができる郷土に対する観念についてふれる。神社は八百万の神々、つまり多くの神々を信仰する神道を信仰している。そのため、「不吹堂」のように風に対処したいなどの、歴史的に地域の住民の必要や希望を反映してきた。城端には数多くの神社が存在するが、ここでは神明社、秋葉神社、また、一柱の神しか祀っていない稲荷神社についてふれることにする。

5-1. 神明社からみる郷土に対する観念

神明社は、神道の中心の神である天照大御神を主神とする神社である。天照大御神は天空を統べる神であり、五穀豊穰ごこくほうじょうの御利益をもたらす神である。しかし、神主は、「何らかの御利益がある神だからその御利益にかなったお願いしかできないのではなく、神、ひいては神社は人々の心の拠り所であるべきである。そのため、例えば学問の神に安産を願っても、本人が納得しているならばいいのではないか」という考えを持っている。この考えは、神道に多くの神々が存在し、神社には三柱から五柱の御神体があるのが通常であることも関係している。また写真4は本殿であるが境内に、妙義神社という違う神社がもうひとつ存在する。



写真 4. 神明社本殿

神明社では五月中旬に春季例祭として曳山祭を、九月には秋季例大祭をする際に祭りを賑やかにするために五箇山の人に学んで麦や節の踊りを踊った。しかし春季例祭は近隣の住民の仕事の都合で、中旬から五月の連休に日程がずれた。また、むぎや祭に至っては例大祭とは徐々に離れて、独立していった。曳山祭も麦や祭も、観光客を集めるため、人に魅せるため、そして自分たちが曳山祭やむぎや祭を純粹に楽しむために行われるようになったが、地域の住民たちは真剣に祭りに取り組んでいる。しかし本来は、神明社の神の御利益を皆にいきわたるように行われていた祭りに様々な要素が盛り込まれた結果である。ただ、そういった変化を神社側としては悪くないことだと考えている。時代が変われば人と神社の接し方、人と神のかかわり方も変わってくるのが時代の流れに沿った自然の形であると考えられているためである。

5-2. 秋葉神社と近隣の住民とのつきあい

秋葉神社は、城端駅から出てすぐにある国道 304 号線を左折し、道なりに直進して曳山会館の 50 メートル先を右折した位置にある、規模が少し小さい神社である。秋葉神社では火伏^{ひぶせ}の神が祀られており、次ページの写真 5 のように小さい砂利が敷き詰められており、祠の周りは掃除されていた。



写真 5. 秋葉神社

明治 31 年（1898 年）に城端では大火事が起き多くの建物が焼け落ちたが、現在の秋葉神社の場所で鎮火した。そのため、その場所の縁起がいいとして火の脅威から守ってくれる神にいてもらうために神社を創建した。

また、小さな神社のため、神主が在住していない。そこで場所の掃除等は近隣の住民が行っている。以前は近隣で銭湯を営んでいた T 氏が、引越しをしてからも遠くから通って掃除等を行っている。しかし、神社の近くに住んでいる住民たちのなかには、秋葉神社が創建された理由や整備を誰が行っているのか、どんな神社なのかといったことを知らないばかりか、存在すら知らない人も少なくない。これは、近隣関係が希薄になり、神社をよく知っている住民との会話が少なくなったことと関わっていると推測される。

5-3. 稲荷神社と近隣の住民とのかわり

稲荷神社は全国でもっとも多い神社であり、商売繁盛や災厄を退けるといった御利益があるとされる稲荷神が祀られている。城端にも神社自体の数は多く、城端の東西南北どこに進んでも必ず一つは存在する。

しかし、稲荷神社は通常の神社との違いが多い。稲荷神社の場合、御神体は、他の神社とは異なり一柱のみであり、鳥居も一般的な神社は無地であるが、稲荷神社は朱塗りが施されている場合が多い。また、多くの神社では鳥居の前を狛犬が守っているが、稲荷神社では稲荷神の眷属である狐が守っていることが多い。もちろん例外も存在する。たとえば、次ページの写真 6 は縄ヶ池祭があった蓑谷の外れにあった神社だが、鳥居が朱塗りではなく無地の石柱であった。他にも、城端駅からすぐに南進したところにある農村部では鳥居の前を狐ではなく狛犬が守っている神社がある。



写真 6. 稲荷神社

稲荷神社は全国的にも数が多く、特徴的な形をしていることが多いため、知名度は高いが、近隣の住民にはそれほど知られていないようである。稲荷神社のことについて、大きな稲荷神社の近くに住んでいる 40 代の男性は、「そういえば一年に一度大きな例大祭があったと思うけどそれ以外は知らないなあ」と語る。城端の稲荷神社は他の神社と比べ、滑り台やシーソーといった子どもの遊具がおいてあることが多いので、神社というよりは市民の憩いの場として、「公園」としての意味が大きいのかもしれない。

5-4. 近隣の神社からみる城端の郷土観

神明社からは、春と秋に行っていた大きな例大祭が、もともと神の御利益を様々な人に分け与えることが目的であった祭りから、住民自体が楽しむ祭りとして、住民に直接的な利益が還元される祭りに変化していった。昔の住民は生活すること自体が大変だったため、生活を滞りなく出来ることを神に祈っていた。しかし、生活が豊かになるにつれて生活自体を滞りなくすることよりももっと楽に出来る生活や、楽しさを住民は追求し始めた。その結果、祭りに対する認識も変わってきたと考えられる。

秋葉神社からは、大火事のように大きな脅威にさらされた人間は、その脅威が鎮まった理由を神に関連付ける、あるいは今後、同様の脅威を鎮めてくれるよう神に祈った。このことから大きな脅威から守ってくれる神にいてもらうために祠や神社を創建したと考えられる。しかし、脅威が忘れられてくるにつれて神社に対する感謝の気持ちや、神社を大切に想う気持ちが徐々に抜け落ちてきてしまっていることが分かる。神社が目に見えるくらい近くに住んでいる住民は、神社を掃除するなどの形で感謝の意を示していることが多いが、近所に住んでいても神社について考えるきっかけがない住民は全く神社を意識することが出来ない。これは現代社会の横のつながりが少なくなったため、神社に親しみを持っている人間との会話が少ないことも無関係ではないだろう。

稲荷神社からは、一昔前には近隣の住民が神社に対して親しみを持って接していたこ

とが分かる。子どものための遊具が存在したことは上記の通りだが、これらは市内と郊外の神社の両方に存在していた。市内の神社は他の神社が近くにあり、手入れはあまりされていなかったが、遊具と石を加工した椅子がいくつか用意されていた。郊外の神社は、稲荷神社だが狛犬が置かれている珍しい神社で、手入れはよく行き届いていた。このように、市内のように少しずつ発展が進んでいる地域では憩いの場としての機能が薄れてきているが、郊外に出ると昔ながらの憩いの場として手入れされ、今も近隣の住民の憩いの場として機能していることがうかがえるからである。

6. まとめと考察

40代から50代くらいの住民は子どもころに聞いた昔話を少し覚えているが、最近の子どもに伝えていないのが現状である。例えば、縄ヶ池の例からも分かるように、池に石を投げたりして粗末に扱うと水害が起こると言われていた。これは、池を粗末に扱おうと生活用水が汚れ、生活が不便になるため、水を大切に扱わせるようにしたと考えられる。つまり、昔話や逸話には何らかの教訓が含まれていて、直接的には指示しなくても、人に指示を与えてきたと考えられる。ストーリーがあることによって、より人々に対する説得力があったとも考えられる。

また、元来は合理的な判断にもとづいた習慣を持つ行事として、神明社の春の例大祭である曳山祭が挙げられる。曳山祭りでは、通常の神輿ではなく、山車と呼ばれる地域住民が様々な要素を盛り込んだ神輿を曳くことになるのだが、その際に下駄を履いて行るのが良いと言われている。舗装道路が普及した現在では下駄は歩行に適しているとは言えないが、昔は整備されていない道路で山車を曳いていたため、踏ん張るには下駄が適していたのである。このように祭りでは、一見効率が悪くても時代背景、状況、思想を考えると実に合理的な行動が選択されていることが多い。

このように、昔話や逸話、行事には、昔の住民の合理的判断や説得方法といった価値観が読み取れる。

しかし、「不吹堂」からも分かるように、創立当初は風を鎮めることが主な目的ではあったが、徐々に相撲をとるといった地域住民が楽しむことが集まる目的になってきた。これは、5・4で取り上げたように、生活に余裕が生まれたこととは無関係ではないだろう。このように生活に大切な存在より、住民の楽しみを大切にするなど、価値観は徐々に変容してきている。

水や風といった自然現象に対する接し方にしろ、近隣にある神社にしろ、近くの祭りにしろ、人間の認識が変われば価値観も変わってしまう。もともと大切に扱っていた水や風でも、身近で大切な存在ではあるものの、生活が豊かになってきたことによって、もっと生活を豊かにすることに意識するか、楽しく生きる大切さが強くなってきたため、あまり重要な存在ではなくなってきたと考えられる。大切なのは今をどう楽しく生きるか。そして時代の流れに合っているかである。昔ながら確かに残っている価値観はある

し、価値観は徐々に変容するため、一概に言うことは出来ないかもしれないが、この二点にかなったものが人間の社会に残る郷土観なのだろう。

末筆ながら、調査に協力して下さった城端の方々の今後のますますの発展、幸福をお祈りし、お礼の言葉とさせていただきたい。

参考文献

石崎直義、『とやまの民話 第二集』第一刷

城端町教育センター、1978、『輝く城端 第二集』

城端ふるさと研究会、1956、『城端町の伝承 昭和五二年度』

『風宮不吹堂五社大明神級長戸邊神社御由来』

松村明、山口秋穂、和田利政、1998、『旺文社 国語辞典[第九版]』

7. 城端の食文化におけるナレズシ

木山 侑希

1. はじめに

城端地区の中心に位置していると言える城端別院善徳寺は、「別院」と地域の人から呼ばれている。その「別院」では、毎年7月22日から28日の夏の期間に、寺の宝物を、虫干をかねて御殿や座敷に展示する虫干法会^{むしぼしほうえ}が行われる。この虫干法会の陰の名物となっているのが鯖^{さば}のナレズシである。この鯖のナレズシは、虫干法会に訪れた客にお^{とき}齋（食事）の副食として出されているものである。

本格的に城端地区について調査する前に、私はあるお店の前で「別院風の鯖のなれずし有ります」という看板をみつけ、鯖のナレズシが一般にも売られているものだと知った。そのことから、鯖のナレズシがどのような城端の食文化であるのかということに興味を抱いたのが調査のきっかけである。

私は、城端地区の人々がこの鯖のナレズシに対してどのように思っているかということなどを中心に、聞き取りによって調査を行った。具体的には虫干法会を運営する善徳寺の人々、鯖のナレズシを作る人々、そして城端地区の住民の人々を対象にして、現在の城端の食文化の中で鯖のナレズシがどのような位置にあり、どのように認識されているかについて明らかにしていく。

2. すしと鯖のナレズシ

まず鯖のナレズシについて述べる前に、簡単にすしの分類について説明し、城端の鯖のナレズシと全国のナレズシを比較しておきたい。

2-1. すしの分類

現在、日本で食べられている「すし」と言われる料理は、大きく分けると「早ずし」と「発酵ずし」に区別される。「早ずし」とは、飯と魚に酢を用いて酸味を得るもので、ふだん私たちがよく食べる握りずしはこちらに分類されている。一方、飯と魚に酢を用いずに自然発酵によって酸味を得るものが「発酵ずし」である。この「発酵ずし」の起源は東南アジアであるとされており、それが日本に伝わり、国内で変化したものが「早ずし」と言われている。また、「発酵ずし」はナレズシとも呼ばれる。ナレとは「馴れ」、つまり発酵・熟成されたという意味である。「発酵ずし」がいつから日本で行われ始め

たかは定かではないが、平安期の書物には「塩と米とで醸した（魚の）漬けもの」という意味の「^{ずし}鮮」という文字があったことからこのころには存在したと考えられている。当時は魚を冷凍することはできなかったため、「発酵ずし」は、魚肉がとれなくなる時期に動物性のタンパク質を得られるようにするため、熟成発酵することによって長期保存するようにしたものであった。

平安期の「発酵ずし」は、塩味をつけた魚肉を大量の飯に漬け込んで、乳酸菌の働きにより飯がドロドロになるまでに発酵させるという方法で作られていた。また、食べる際には、魚の周りの飯はそぎ落としていた。この方法で食べられるものがホンナレである。さらに時代が進み、室町時代になると、ホンナレよりも短い発酵期間で、そして魚肉の周りの飯も一緒に食べるナマナレという方法が発生した。ナマナレでは、飯に酸味がでるかでないかのところで発酵をとめる。早い場合は3日から4日後に食べ始め、遅くても1月から2か月程度で消費する。ナマナレでは魚肉がまだ生々しく、飯も粒の状態を保っている。ナマナレはナレが「生」である意味であり、ホンナレという言葉は「本馴れ」という意味で、ナマナレという当時の言葉に対して現代に作られた造語である。その後17世紀末、江戸時代初期になると、発酵ずしよりも時間がかからず早く食べられる「早ずし」がつくられるようになった。「早ずし」では乳酸発酵による酸味の生成を待たずに、飯や魚に酢を加えて手軽に味付けを行うため、すしの多様化が進んだ。その後、19世紀前半の江戸で握りずしが流行し、現在、私たちが多く口にするすしの形となった。

このように「すし」は「発酵ずし」として日本に伝来し国内で改良され、現在では「早ずし」という形で多くの人々に食べられている料理である。しかし、「発酵ずし」（ナレズシ）も日本にはまだ各地に存在している。城端の鯖のナレズシもその一つである。

2-2. 城端の鯖のナレズシ

城端では、夏に城端別院善徳寺で行われる法要の「虫干法会」で訪れた客にお斎（食^{とき}事）として鯖のナレズシが出されている。お斎には鯖のナレズシのほかに、野菜の煮物やこんにゃく、お味噌汁、白いご飯が一緒に出される。

この鯖のナレズシは、城端地区の魚商組合の人々によって漬け込みが行われる。まず、魚商組合員によって5月22日までに、およそ1200本の鯖が三枚におろされ、同じ塩度の塩水につけられる。その後、5月22日に善徳寺で代々漬け込みに使われてきた桶の中に敷き詰めていくという漬け込み作業が行われる。漬け込み作業が完了したのち、およそ90日間熟成発酵させ、7月の夏の虫干法会が行われている間にお斎として鯖のナレズシが出されるのである。お斎として出される際には周りのペースト状になった飯をそぎ落として器に盛り付けられる。また出される量は鯖を幅1センチほどに細く切ったものを3切れから切れ程度で、一緒に出された白いご飯の副食として鯖のナレズシを食べる。山椒の葉を漬け込みの際に香りづけとして入れているが、それもわずかな量である。このような食べ方を見ると、城端の鯖のナレズシは先に述べたホンナレに近いと

言える。

なお、鯖を保存食としてナレズシにする方法はもともと五箇山の集落の家庭で作られていたものが伝わったと言われている。かつて五箇山では家庭で鯖のナレズシを漬けていたという話も聞いたが、確認することはできなかった。

また、南砺市井波にある、善徳寺と同じ真宗大谷派の寺院である井波別院瑞泉寺でも、夏の法要の期間に鯖のナレズシがお齋として出される。瑞泉寺のナレズシは漬ける時期や鯖の処理方法は同じであるが、善徳寺のように米と魚と山椒だけではなく、^{こうじ}糴と赤トウガラシも加えられる。食べる際に飯の部分こそぎ落とす食べ方は善徳寺とほぼ同じであるが、糴を加える点は善徳寺とは異なっており、そのため味も善徳寺のものとは異なっているようである。

全国各地にあるナレズシのなかでは、滋賀県の琵琶湖沖島の^{ふな}鮒ずしが有名である。鮒ずしには、主として4月ごろの産卵期前期のニゴロブナのメスを使う。ウロコや内臓を取り除くが、卵は体内に残したまま、腹に食塩を詰め、桶中に並べて食塩をかけて何層にも重ねた状態で重石をする。約1年後、夏の土用の前に取り出し、塩を全部洗い流したのち、フナの腹に飯を詰め込んで桶に並べる。そのうえに飯を積み重ね、さらにその上から重石をのせる。

この鮒ずしのほかにも、滋賀県に鯖街道朽木谷の鯖のナレズシ、福井県の若狭湾にもへしこ（鯖、あじ、いわし、ふぐなどの魚）のナレズシ、さらに和歌山県、石川県にも鯖のナレズシがある。材料や熟成期間などに差はあるが、どれもすしの原型となったナレズシ（「発酵ずし」）である。なお、ナレズシは、北陸地方や近畿地方に多い。

3. 虫干法会と鯖のナレズシ

鯖のナレズシが供される虫干法会について、概略を紹介したい。

3-1. 城端別院善徳寺と虫干法会

城端別院・善徳寺では毎年7月22日から28日までの一週間のあいだ、加賀藩前田家から伝わって来た宝物や富山県指定文化財の一部を、虫干を兼ねて御殿や各座敷に展示し、公開する虫干法会が行われる。虫干期間中はそれぞれ展示されている御殿や各座敷で宝物の由来などの説明を聞くことができ、本堂では勤行・法話・

蓮如上人御絵伝絵解き・^{れんにょしょうにんごもくぞうごかいちょう}蓮如上人御木像御開帳が勤まる。また、期間中の催し物として善徳寺のお上台所で生け花展なども行われる。

城端別院善徳寺は浄土真宗の大谷派の寺で、開基は本願寺代八代蓮如上人である。

善徳寺は室町時代の文明3年（1471年）に、加賀国境の^{かほくぐん い け}河北郡井家の^{しょうすなごさか}庄砂子坂（現在の金沢市砂子坂）に創設された。その後永禄2年（1559年）に城ヶ鼻城主荒木

大膳の請を受けて、この地に寺を建立したと伝えられている。

善徳寺で虫干法会が始まったのは 1896 年（明治 29 年）である。当時は交通機関も発達していなかったため、善徳寺は虫干のために遠くから訪れた客が泊まるための宿坊の役割も果たしている。遠来からの客をもてなすためにお斎をふるまったとみられている。

3-2. 鯖のナレズシの由来

本来、寺では肉食は禁じられている。しかし、もともと浄土真宗のなかでは、基本的な立場として中心にあるのは信心のみであるとされたきて、肉食妻帯は厭われないために、真宗では魚を食べることに対する罪悪感は薄かったと言われる。また、明治以後、北海道から富山の井波地区に北前船によって入ってきた塩鯖やにしんは、城端地域の当時のごちそうであった。そのため、虫干法会のために遠方からお参りに来た人々を接待するために鯖が出されたのが始まりといわれている。

4. 魚商組合と鯖の漬け込み

先にも触れたように、虫干法会で出されている鯖のナレズシは城端の魚商組合によって漬けられている。ここからは、魚商組合と善徳寺の関係を説明し、今年行われた魚商組合による鯖の漬け込みの様子を紹介する。

4-1. 城端魚商組合と善徳寺の関係

城端魚商組合は城端地区の魚屋の組合であるが、城端以外の地域から参加している組合員もいる。現在、組合員は 7 名で、年齢は 30 代から 70 代と幅広い年齢層である。魚商組合は、善徳寺から依頼されて、虫干法会でお斎として出される鯖のナレズシの鯖の買い付けや仕込みを行っている。鯖のナレズシの漬け込みは江戸時代の藩政時代から、当時の魚商組合と言える「魚太子講仲間」が関わっており、その伝統が現在の魚商組合に継承されている。

また、魚商組合の中には個人的に鯖の漬け込みを行い、自分の店で鯖のナレズシを販売している人もいる。ただし、材料として、山椒の代わりに昆布やナンバ（とうがらし）を入れるなど、それぞれの店で独自のナレズシの味を出している。また、販売時期も店によって異なり、虫干法会と同時期に鯖のナレズシを販売する店もあれば、一年中販売している店もある。

4-2. 鯖の漬け込み

鯖の漬け込みは、魚商組合員によって朝から善徳寺にある鯖ズシ小屋（写真 1）で行

われる。作業はまず、鯖を漬けこむ桶を洗うことから始まる。この桶は善徳寺が所有しているもので、全部で8個あり、代々鯖の漬け込みに使用されてきたものである。そのため、桶には乳酸菌の白い塊が多く付着している。そして、3人ほどで桶洗いを済ませた後、いったん休憩し、組合員で朝礼が行われる。朝礼の後、米を洗う係、山椒の葉を枝から取る係などに分かれ、鯖ズシ小屋で漬け込みが行われる。

漬け込みでは、最初に、桶と小屋の床に神酒を撒き、桶のなかに塩水でほぐした飯(写真2)を桶の中に撒いていく。次に、鯖が隠れるか隠れないか程度の飯を上的一面に撒き(写真3) その上に鯖を隙間なく敷き詰めていく。一面に鯖を敷き詰めたら、またさらに飯を撒き、その上に山椒を散らしていく。この作業を桶が埋まるまで繰り返していき、最後に立^{たて}汐と呼ばれる塩水を入れ、その上に濡らした薄板を敷く。そして、レンゲと呼ばれる縄で桶のふちを塞いだ後、重石をのせて、写真4のような形で作業を終了し、そのまま、およそ90日間発酵させる。



写真 1. 鯖ズシ小屋と桶



写真 2. 飯を塩水でほぐす様子



写真 3. 鯖の上に撒かれた飯



写真 4. 重石をのせられた桶

虫干法会用の桶で漬け込みをおこなうほかに、鯖ズシ同好会用の小さな桶を使って、後日、時期をずらして漬け込みが行われる。鯖ズシ同好会とは、全国にいる真言宗大谷

派の僧侶で、鯖ズシを好んでいる人たちによって作られた会である。鯖ズシ同好会用の鯖の漬け込みも虫干法会用の鯖ズシと同様に、善徳寺から頼まれて魚商組合が行っている。

5. 城端の住民と鯖のナレズシ

調査では、城端に住む人々は鯖のナレズシをどのように考え、どの程度城端の食文化として認識しているのかについて、聞き取りを行った。ここでは、城端の住民の語りに、善徳寺を運営している人々、そして魚商組合の人々の語りを加えて、城端の住民と鯖のナレズシの関係を考察してみたい。

5-1. 城端の住民の語り

城端の住民を対象に「鯖のナレズシを好きか嫌いか」という質問をしたところ、50代から80代の中高年層では、「好き」と答えた人と「嫌い」と答えた人がおよそ半々であった。「好き」と答えた50代女性は「大好きです、夏場に冷やして熱いご飯と食べるとおいしい」と語った。さらに、60代の女性も「鯖ズシは好き、酸味があって夏はさっぱりする」と話していた。しかし、「好き」と答えた人でも、食べるのは虫干法会の時期だけという回答が多く、店で買って食べるという人はごく少数だった。一方、「嫌い」と答えた80代の男性は「若いものはまったく食べない、自分みたいな年寄りでも好き嫌いは分かれる」と語った。さらに60代の女性は「鯖ズシは苦手、酸っぱいから」と話し、別の60代女性も「食べたことはあるけど、好きにはなれない、塩辛すぎる、でも別院のなら食べやすくして少しは食べられる、昔の食べ物だから年配の人は好き」と言う。嫌いな理由は、酸っぱい、塩辛いという味覚の問題にあるようである。また、城端に住む70代の女性は「食べたことがない、知らない」と話していた。

上の語りのように、中高齢者からは、「若いものは食べない」という話をよく聞いたが、実際、聞き取りをおこなった小学生から40代の人々の間で、鯖のナレズシを好きだという回答は聞くことができなかった。ある30代の女性は、「人からもらったら食べるが、基本食べることはない、まず子どもがたべないので」と話し、30代の男性は「城端の食文化として鯖ズシを認識はしているが、実際は頻繁には食べない。生臭いところが好きではないし、友人も食べないと聞く」と言う。さらに、小学生や20代から30代の女性に鯖のナレズシを知っているかと尋ねると、ほとんどが「知らない」と答えていた。

以上から、世代が若くなるにつれ、好き嫌いの以前の問題として、鯖のナレズシを食べなくなっていることが分かる。この原因について、ある60代の男性は「若いものの舌が変わってしまったから、甘いものしか食べないようになった」と話していた。高齢者の語りからも分かるように、鯖のナレズシには独特の味があるが、

この数十年の間に食文化が大きく変わり、現代の味覚に合わなくなっていることが、40代以下の世代が鯖のナレズシを口にしない原因だと推測される。そして、家庭で口にしなくなったため、より若い世代では鯖のナレズシの存在さえ、忘れられるようになっていっていると言えよう。上の30代の男性のように、城端の伝統的な食文化として認識している人もいるが、40代以下の世代の住民にとっては、鯖のナレズシは日常的には食べることのない「昔の食べ物」なのである。

5-2. 善徳寺の人々の語り

それでは虫干法会で鯖のナレズシを出している善徳寺を運営している人々や虫干法会にやってくる人々は、鯖のナレズシをどのように思っているのだろうか。

善徳寺の事務所で働く60代女性は「鯖のナレズシは寺の名物」と語った。虫干法会に来ていた70代男性は「鯖のナレズシがないと愛想もない」と話していた。これは鯖のナレズシが食事で出てこないと言物足りないと言う意味である。同様に、50代女性で「毎年虫干に来ており、鯖のナレズシが大好きで、それを楽しみに来ている」と語る人もいた。このことから、鯖のナレズシは虫干法会では寺の名物となっていて、やってくる人の中に食べるのを楽しみしている人たちがいることは確である。

なお、善徳寺では、鯖のナレズシを売ってくれと頼まれても、売ることはしない。善徳寺に拠れば、「(鯖のナレズシは)商売でやっているのではなく、客をもてなすためにお斎として出しているのだから売ることはできない、寺にご飯を食べに来たら出します」ということであつた。

5-3. 魚商組合の人々の語り

善徳寺から鯖の漬け込み任されている魚商組合の人々は鯖のナレズシをつくる作業をどのように思っているのだろうか。

魚商組合員の60代男性のAさんは、個人でも鯖の漬け込みを行い、自分の店で鯖のナレズシを販売している。彼は鯖の漬け込みに対して「昔から受け継がれてきたもの、虫干法会でおいしいものを出すことができたら喜ばれたら、自分の店もありたい」と話す。また、同じく魚商組合員で個人的に漬け込みを行い、自分の店で販売している50代男性も「(鯖の漬け込みは)昔からの流れで、代々親子に受け継がれていく、親ができなくなったら次は自分となった」と語っていた。さらに彼は「漬け込み作業は組合の行事ごとのようなもので、大変だが楽しくやっている、別院から組合の飲み食い代をもらってそれも楽しみでしている、それによって組合員の団結もはかれる」と話してくれた。また、Aさんの息子で、同じ魚商組合員である40代男性のBさんは漬け込み作業について「強い気持ちではなく、仕事の一環として考えてはいるが、自分の代では終わらせたくないものだとは思っている。でも、子どもが継いでくれるかはまだわからない」と話す。また、鯖のナレズシに

対しては「大事な城端の食文化だとは思っているが、別院も魚商組合も高齢化で大変で、これから続いていくのかどうかはわからないという漠然とした不安はある」と語った。先に述べたように、現在、魚商組合の組合員は40代が二人いるだけでその他の組合員は60歳以上である。

魚商組合員にとって、鯖の漬け込みは大変な作業ではあるが、昔から受け継いできた仕事であり、仲間と交流する機会でもある。しかし、上の語りのように、高齢化が進む一方で後継者が確保できるかどうか分からない現状では、鯖のナレズシの継承が困難になっていくことも予想される。

しかし、一方で、鯖のナレズシが昔からある城端の食文化としてあらためて取り上げようとする試みもある。たとえば、城端商工会の青年部によって企画されたイベント「なんと彩菜まつり」の一環で行われた「まち巡り食べ歩きツアー」では、鯖のナレズシが食べ歩きのメニューの中に取り入れられた。参加者の中には、鯖のナレズシを気に入ったという参加者も少なくなかったと言う。Bさんは、「昔からあった鯖のナレズシを新しい意見を取り入れて改良し、また新しいものとして魅力のあるものにならないかと漠然と思っている」と話す。若い世代によって現代の食文化に合うかたちで、鯖のナレズシが変化を遂げる可能性もあると言えよう。

6. まとめと考察

鯖のナレズシは、善徳寺や善徳寺の虫干法会に訪れる人たち、そして漬け込みをおこなって制作する魚商組合の人々にとっては伝統的な料理であり、城端の住民の中にも城端独特の食文化として認識している人も少なくない。しかし、洋食の普及など食文化の変化によって、城端のなかで鯖のナレズシが一般に食べられることは少なくなり、とくに若い層では存在さえ知らない者も多い。城端の日常的な食生活の中では鯖のナレズシは食されることはほとんどなく、虫干法会という非日常的な行事の際に一部の人たちによって食される食物なのである。さらに、作り手の魚商組合員が高齢化しつつある現状では、今後、消滅する可能性もある。しかし、その一方で、現代の食文化に合わせて、鯖のナレズシを改変して、継承していこうという動きもある。鯖のナレズシが、城端の新たな伝統的な食文化として生まれ変わる可能性もまたあると言えよう。

謝辞

最後に、今回の調査に協力していただいた方々へ感謝の意を記したいと思います。調査では、普段の生活ではお会いすることのできない人とお話しをさせていただいたり、経験することのできない体験をさせていただいたりすることができました。

快く協力して頂いた善徳寺の方々、魚商組合の方々、そして今回資料を提供してくださったり、アルバイトをさせていただいたりなどあらゆるお世話になった南真司様とご家族の皆様、その他多くの城端地区住民の方々、本当にありがとうございました。お忙しいところを、調査のための観察や聞き取りにご協力いただき、本当に感謝しております。

参考文献

日比野光敏、『すしの事典』、東京堂出版、2001 年

石毛直道、ケネス・ラドル、『魚醬とナレズシの研究—モンスーン・アジアの食事文化』、岩波書店、2007 年

藤井建夫、『魚の発酵食品』、ベルソ・ブックス、成山堂書店、2001 年

8. 農村部と町部の家屋構造と居住者の認識

石附 かおり

1. はじめに

私は昔から人の家を見るのが好きだった。そのため、今回の実習調査では、城端独自の家屋について関心を持ち、家屋の構造をテーマに調査をおこなった。ただし、調査を始めてみると、同じ城端であっても田畑に囲まれた農村部（「里」）と江戸時代から絹織物生産や商業で栄えた町部（旧町）とでは、ずいぶん家のつくりが異なっていることがわかった。そこで、農村部と町部のそれぞれで一軒一軒民家を訪問し、観察と聞き取り調査をおこなった。主に聞いて回った事としては、家の間取りがどのような構造になっているのか、住んでいる人は住み心地をどのように感じているのかなどについてである。この章では、聞き取りと観察から得られたデータをもとにして、農村部と町部の家屋の構造の違いや居住者の家屋に対する認識について報告する。

2. 調査地の概要

まず農村地域の家屋の調査地として、是安^{これやす}という地域を選んだ。是安は城端駅の北に位置し、東に山田川が流れ、西には県道城端福野線が通る（図 1）。調査時点で人口は男性 150 人、女性 155 人の計 305 人、世帯数は 87 世帯であり、ほとんどの世帯が農業を営んでいる。是安では、家屋が水田を挟んで点在し、家屋は広い敷地の中にある。



図 1. 是安の位置

次に、町部の家屋の調査は、主に西新田町でおこなった。西新田西新田町はいわゆる

「町屋造り」(後述)の家が立ち並び、農村部とは対照的に家と家とが隣接している。西新田町の人口は、調査時点で男性 180 人、女性 205 人の計 385 人、世帯数は 141 世帯である。ただし、西新田町の調査だけでは十分なデータが得られなかったために、周辺の東上町、東下町、東新田町、大工町などの家々についても調査をおこなった(図 2)。これらの地域も、西新田町と同じく、家屋が隣り合っている。ただし、東新田町では西新田町に比べて横幅が広い家がいくつか見られた。

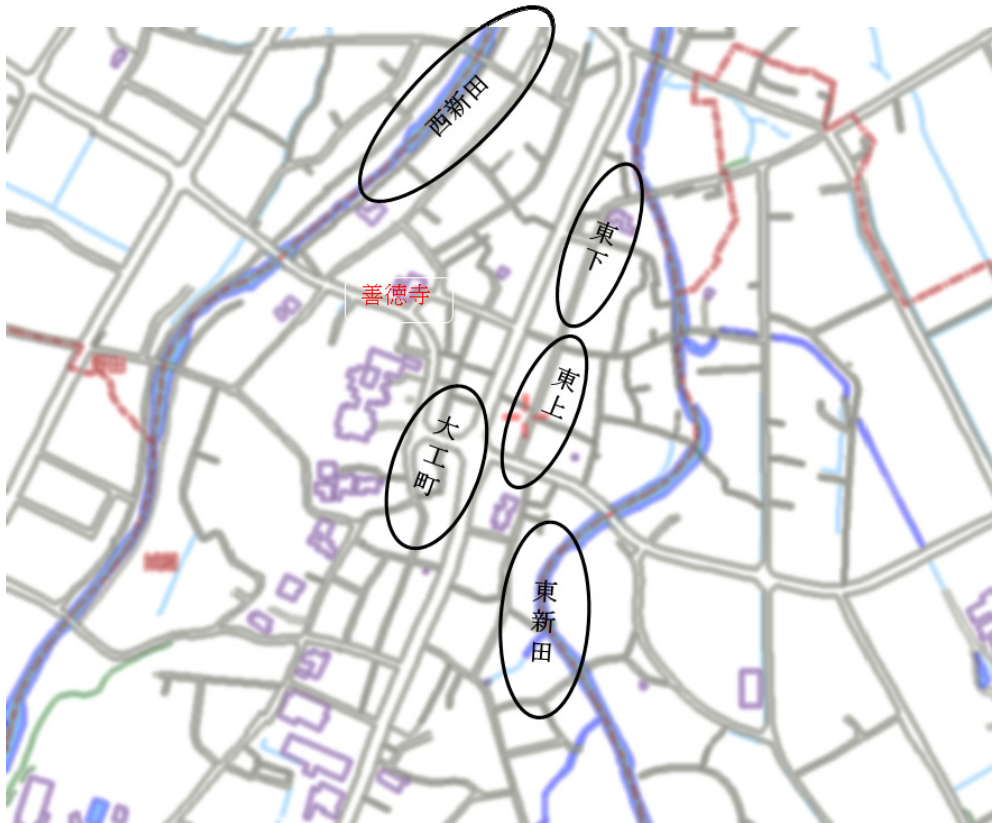


図 2. 町部の各町

3. 農村部の家屋

3-1. 農村部の家屋の概要

まず、農村部の家屋について紹介する。是安は、各家との間に水田があり、また家が広い敷地の中に建てられているため、各家が離れて建っている散居村となっている。図 3 に示したように、敷地の中には、家の他に、蔵、納屋、畑などがある家が多い。是安では農業を営んでいる世帯がほとんどであるが、納屋には農作業用具が置かれている。蔵は、住民によると、昔の座布団などが入っているそうで、普段は使わないものをしま

っている。また、ほとんどの家が西を向いて建てられている。農村部で調査した家屋は1961年から1980年までに建てられた家が多く、もっとも古い家は築約160年、新しい家は築約20年であった。どの家も、何回か改築増築をして今に至っている。改築は、トイレの水洗化や、台所、風呂、居間、天井、玄関など、主に生活に直接に関わる場所で行われている。写真1は家の外観である。

表 1. 農村部の家の築年数

築年数	建てられた年	戸数
20 年以下	1991 年 ~	1
21 年 ~ 30 年	1981 年 ~ 1990 年	0
31 年 ~ 40 年	1971 年 ~ 1980 年	4
41 年 ~ 50 年	1961 年 ~ 1970 年	3
51 年 ~ 60 年	1951 年 ~ 1960 年	2
61 年 ~ 70 年	1941 年 ~ 1950 年	3
71 年 ~ 80 年	1931 年 ~ 1940 年	0
81 年 ~ 90 年	1921 年 ~ 1930 年	2
90 年以上	1920 年以前	2

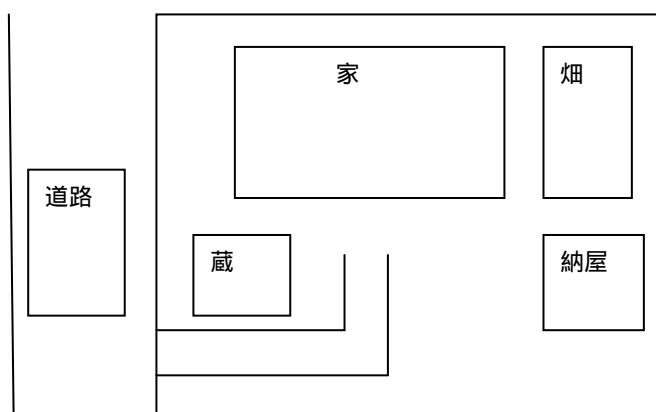


図 3. 敷地の中の建物の例



写真 1. 農村部の家屋

3-2. 間取りについて

是安で家屋の調査を続けていると、多くの家屋に共通する部屋や間取りが見られた。図 2 で示したのは、是安で多く見られた一階の間取りの例である。一階には 10 部屋から 12 部屋ある。大まかに間取りを説明すると、まず玄関から入ってすぐ正面に廊下が伸びている。その廊下の左手側には広い畳の部屋がいくつかつながっている。そして、廊下の右手と突き当りには、台所や風呂や居間など、日常生活で使う部屋となっている。また奥にはウラ玄関があり、ちょっとした畑仕事の際はウラ玄関から出入りする。トイレは玄関から入ってのすぐ右手側にある家が多い。また、嫁いできたときに与えられる部屋が仏間の後ろの部屋だったという家も何軒があった。二階には 2 部屋から 4 部屋があり、寝室や、物置、子ども部屋などの部屋として使われている。昔は二階には部屋はなく、「アマ」と呼ばれ、わらやまきを置いておく物置の空間になっていた。現在ではそれを改築して、部屋にした家が多い。次からは、農村の家屋の特徴的な部屋について詳しく見ていく。

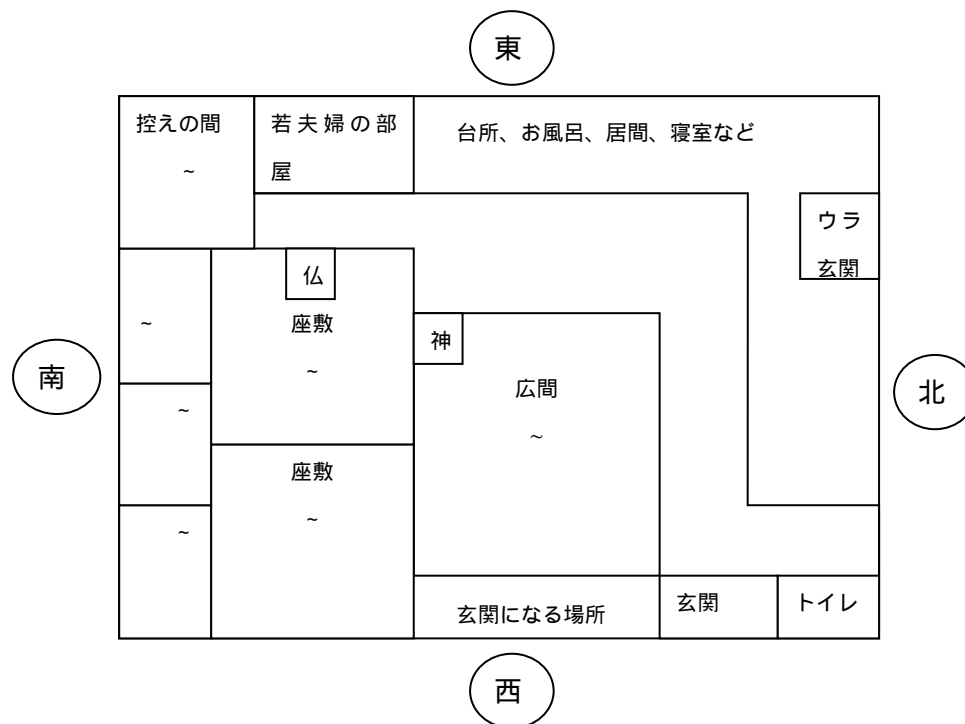


図 4. 農村部の家の間取りの例

数字は畳数

3-3. 特徴的な部屋

3-3-1. 座敷、広間、玄関

まず、是安の家屋の特徴として挙げられるのは、図 4 で分かるように、玄関から入って左側に広い畳の部屋が二つから四つ並んでいることである。まず、「広間」と呼ばれる 8 畳から 15 畳の部屋がひとつあり、その横に二つ 8 畳から 12 畳の「座敷」と呼ばれる部屋がある。座敷は玄関側に近い方がクチノザシキやクチザシキ、その奥にある方がオクザシキと呼ばれている。この広間、座敷の部分は家によっていくつかのばらつきがある。図 5 で示しているように、広間がなくそのかわりにクチザシキ、オクザシキが二つずつある家や、座敷が二つではなく、広い座敷が一つだけという家などである。座敷と広間は繋がっており、戸を外すと一つの広い部屋として使うことができる。この部屋は、結婚式やお葬式や地域の寄り合いなど、何かものごとがあり大勢の人が集まるときに使っていた。しかし、最近は結婚式や葬式を自宅でおこなうことが少なくなったため、大勢の人が集まる部屋として使われることは少なくなったと言う。また、神棚や仏壇が置かれているのもこの空間である。神棚は広間か、広間と呼ばれていない部屋でも、玄関にもっとも近い畳の部屋の角に置かれていることが

多い。仏壇はオクザシキに置かれていることが多い。また、これは町部も同じなのだが、神棚の上は歩けないようになっており、二階があっても神棚の上にあたる場所は人が通れないようになっている。

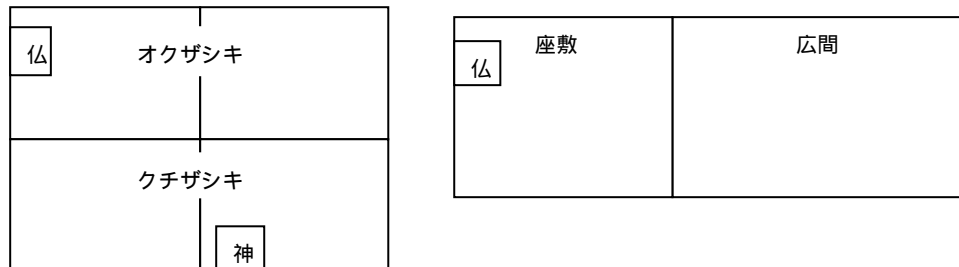


図 5. 座敷、広間の並びの例

3-3-2. 広間につながる玄関

図4に示しているが、農村の家屋は玄関の横にもうひとつ玄関になる場所がある。ここは普段は戸が入っているが、戸を外せば外から直接広間や座敷へ上がれる仕組みになっている。これは、先に触れた広間や座敷で法事や結婚式などを行う際に多くの人が出入りできるためのものである。現在では、この玄関も使われなくなり、普段戸は閉まっている。写真2のポストがある玄関脇の木が立てかけられている部分がそうである。



写真 2. 広間につながる玄関

3-3-3. 控えの間

是安の多くの家屋で見られたのが、控えの間と呼ばれる部屋である（図4参照）。こ

れは座敷の奥に繋がっているか、あるいは座敷と廊下を挟んで向かい合う場所にある。6 畳から 8 畳ほどの部屋で、床の間がついていることが多い。この部屋は、法事の際などに来訪した僧侶が休憩する場として使われている。

3-3-4. オモテエン

控えの間の下で、座敷の隣には同じ大きさの部屋が三つ並んでおり、子ども部屋や寝室として利用するか、または物置として使われていた。昔は、客を泊めるのに使うこともあったと言う。また 3 つ並ぶ部屋の一番奥の部屋を控えの間としている家もある。この同じ大きさの部屋が 3 つ並ぶ造りは、控えの間ほど多くの家では見られない。この部屋がない家は、部屋にあたる場所が縁側となっている場合が多い。また、以前はあったが改築した際になくしたという家もある。この場所は「オモテエン」と呼ばれる。またこの部屋の上に位置する屋根は「ギア」と呼ばれる。

3-3-5. アマ

先にも述べたが、昔は二階を人がいるための部屋として使わず、わらやまきなどを置くスペースとして使っていた。その場所をアマという。昔は納屋がなく、またあっても小さかったために家の二階を利用したと考えられる。今では、改築され二階は普通の部屋となっている家がほとんどだが、まだ二階の一部がアマの状態に残っている家もある。

3-4. 居住者の認識

ここまで農村部の家屋について、その間取りや部屋について記述してきたが、実際に住んでいる住民は家屋をどのように感じているだろうか。ある 60 代の男性は「何回忌などの法事以外では特に座敷、広間などは使わない。広いと掃除が大変」と語る。また、70 代の女性は「今は（家で）ものごとを全然しない。こんな大きな家より小さい家がいい」と話す。現在では、使わない部屋が多く、広すぎる家を維持するのが大変な様子が見えてくる。一方で、60 代女性の「不便ということはないけど、住んでいて快適だということもない。こんなもんだなと住みなれている」という語りや、70 代女性が「不便は特にない。昔から田舎に生まれたもんで百姓だから（住む所は）変われん」と話していたように、特に不便さや快適さを感じることなく、住みなれている今の我が家を当たり前として受け入れている語りもあった。

3-5. 農村部の家のまとめ

是安の家屋は、南側に座敷、広間、控えの間、オモテエンといった普段の生活では特に使うことはなく、人が集まる場、外と交流する非日常的な空間がある。また仏壇や神棚が置かれていることから、家屋の中では神聖な場所だともいえる。一方、北側には台所やお風呂、居間など、家族の日常的生活空間となっている。このように家の中に、外と交流するための空間と、住民が住まうための空間の二つに分かれているのが、是安

の家屋の特徴だと言える。しかし、現在では、自宅で結婚式や葬式をほとんどおこなわなくなっているため、生活する人たちにとってそれらの部屋の重要性は薄れている。広間に子どもの遊び道具が置かれ、遊び場の部屋になっている家もあった。現在では、二つの空間の境界が曖昧になってきていると言えるだろう。

4. 町部の家

4-1. 町部の家屋の概要

町部の家は近接して建てられ、家屋の横幅は短く奥行きがあるのが特徴である（写真3）。このような「うなぎの寝床」のような家屋の構造は、一般に「町屋造り」と呼ばれる。写真3で示しているのが、町部の家の外観である。二階は、一階と同じだけの広さがある総二階となっている。さらに、町部には中庭のある家が多い。表2で示しているが、今回調査した家は築30年から80年の家が多く、どの家屋も何回か改築していた。水回りを下水につなぐ際に、風呂、トイレ、流しなどを改築した家が多く見られた。



写真3. 町屋造りの家屋

表 2.町部の家の築年数

築年数	建てられた年	戸数
20 年以下	1991 年 ~	3
21 年 ~ 30 年	1981 年 ~ 1990 年	1
31 年 ~ 40 年	1971 年 ~ 1980 年	3
41 年 ~ 50 年	1961 年 ~ 1970 年	2
51 年 ~ 60 年	1951 年 ~ 1960 年	2
61 年 ~ 70 年	1941 年 ~ 1950 年	1
71 年 ~ 80 年	1931 年 ~ 1940 年	3
81 年 ~ 90 年	1921 年 ~ 1940 年	0
90 年以上	1920 年以前	2

4-2. 間取りについて

町部の家屋は先に触れたとおり、間口が狭く奥行きが深いのが特徴である。ここでは町部の多くの家で見られた間取りをもとに説明したい。図 6 に示したのが、町部でよく見られた家屋の間取りである。玄関を入れて正面は廊下、片側に 6 畳から 8 畳の部屋が二つか三つ続いている。玄関から二つ目の畳の部屋は仏間であることが多いが、一階には置く場所がないために二階に仏壇を置いている家も少なくない。神棚も二つから三つ並んだ畳の部屋の一室に置かれるか、二階に置く家が多かった。廊下のつきあたりの部屋には居間、台所、風呂、トイレなどがある。また西新田の家でよく見られたのは、図 7 で示したような、道路に面した側に車庫があり、その奥に玄関がある構造である。聞いた話によると、このあたりは昭和 40 年代に建て替えられた家が多く、その頃はちょうど車をもつ家が増えた頃でもあったため、改築の際に車庫をつくった家が増えたということであった。

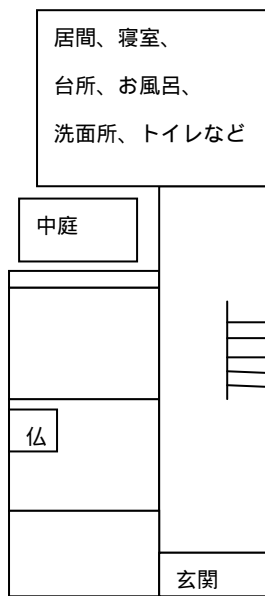


図 6. 町部の家屋の間取りの例

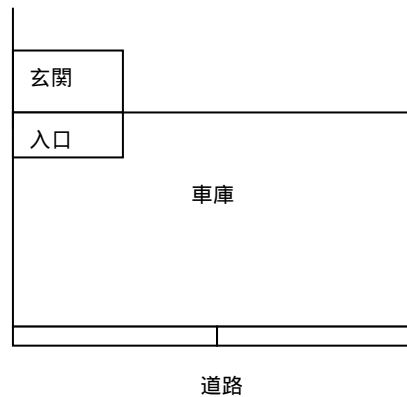


図 7. 西新田で見られた車庫の中に玄関が入っている例

4-3. 表に面した部屋

町部の家は玄関に入ってすぐ横に畳の部屋が、玄関側から家の奥に向かって続いている。この部屋は、来客や冠婚葬祭の際や、あるいは祭りがある地域では祭りの際に使う部屋となっている。祭りが無い地域では、家族がくつろぐ部屋として使う場合もある。また、これらの部屋はふすまを外すと一つの広い部屋になり、昔はそのようにして自宅で葬式や結婚式に使っていた。しかし、是安と同じく、現在では自宅で冠婚葬祭をおこなうことはなくなっている。

この部屋には、いろいろな呼び名がある。まず図 8 に示したように、通りに面している方から順にマエベヤ、ナカノマ、オクノマと呼ばれる。この話を聞いた図 8 の家は東下町で、この町内は、祭りの際にはこのマエベヤ、ナカノマ、オクノマを使うことがある。図 9 と図 10 で示した家屋は東新田町で、この町内は祭りで部屋を使う習慣はない。図 9 の家では、道路に面した畳の部屋をミセと呼び、その奥の部屋をオイノマと呼んでいた。図 10 の家は、道路に面している部屋が 3 つ並んでいるが、玄関に近い部屋からミセ（店）ノ間、ツギ（次）ノ間、コ（小）間と呼ばれる。

図 6 で触れたが、祭りで家を使う地域では、部屋の間取りに祭りが関わっている。第 2 章で詳しく記述している曳山祭の山宿となる部屋は表に面していて奥行きのある畳の部屋であり、その部屋の奥には中庭があるのが好ましいとされている。そのような部屋を持つ家屋の住民に話を聞くと、「新築するときには山宿をできるような家にした」や「山宿のことを考えて建ててある」と語る人もいれば、「今の家は山宿のことは考えず

に建てた」と話す人もいた。また、「昔はお家でものごとをしていた。山宿以外にも使うことはあった」という語りもあり、曳山祭に参加する 6 町の住民でも、家を建てる際に祭りを意識する人たちだけではないようである。

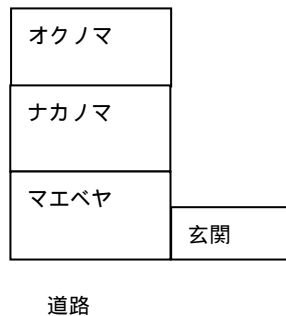


図 8. 表に面した部屋の例



図 9. 表に面した部屋の例

4-4. 居住者の認識

これまで町部の家屋について説明してきたが、住民は家屋をどのように感じているのだろうか。住んでいて不便なこと、快適なことはあるか。また、住まいについてどのように感じるかを聞いてみた。まず、住んでいて不便に感じることにについては、70 代の男性の「不便なことは狭い。もうちょい広く、物置がほしい。物を置くとき二階に行くので面倒」、60 代男性の「不便なところは雨漏りがすることと、ハクビシンが出ること」といった語りが挙げられるが、概して、家が狭いことや収納場所が不足していることや家が古くなり傷んでしまっていることに住民たちは不便さを感じている。一方、80 歳過ぎの女性は「昔から慣れているから楽」と語り、70 代の男性も「不便はない。周りが静か」と言う。こういった語りからは、住み慣れた家屋と周囲の環境に満足している様子がうかがえる。全体で言うと、不便と感じる住民と快適と感じる住民の割合はちょうど同じ程度であった。

4-5. 町部の家のまとめ

町部の家は横幅が狭く、奥行きがある。そして、通りに面した側に大勢の人を迎えるためや冠婚葬祭などの際に使う部屋があり、奥に風呂や台所などの生活スペースがある。つまり、通りに面した手前側に非日常的な祭礼のための部屋があり、奥が日常の生活空間となっている。ただし、冠婚葬祭でそのような部屋を使うことは現在では無く、曳山祭のためにのみ使われている。曳山祭に参加しない町では、構造は同じでも、そのような部屋を居間として使っていることもあり、曳山祭に参加する町の住民と参加しない町の住民では、部屋の使用や位置づけに違いが見られる。家屋に対する住民の認識は、狭いということや古いということに不満を感じている一方で、とくに不満はないという人たちも多い。

5. 農村部と町部の住居の比較と考察

これまで農村部の家と町部の家について記述してきたが、ここで比較しまとめたいと思う。表 3 に示したように、家屋の形状は、農村部は大きく横に広い家で、町部の家は狭く縦に長い家になっている。そして、農村部の家屋の二階が一階に比べて小さいが、町部では二階は一階と同じ面積の総二階である。

さらに、農村部では、南側に冠婚葬祭や地域の寄り合いなどの際に使い、仏壇などを置く非日常的な行事に用いる部屋があり、北側と東側に日常的な生活空間がある。一方、町部では、通りに面した側に冠婚葬祭や曳山祭に使う非日常の行事の部屋があり、家の奥に生活空間がある。

表 3. 農村部と町部の家屋の比較

	面積	全体の形状	二階	庭	祭礼の部屋	生活の部屋
農村	比較的広い	横長	狭い	家の周囲	南側	北側、東側
町	比較的狭い	縦長	総二階	中庭	通りに面した側	(通りに向かって)奥

このように、農村部の家と町部の家は大きさ形ともに大きく異なっているが、家屋が、祭礼のための非日常のスペースと生活のための日常的なスペースの二つの空間に分かれているのは共通している。しかし、農村部の家屋や曳山祭に参加しない町部では、冠婚葬祭を自宅でおこなうことがなくなったため、その区別は曖昧になりつつある。唯一、曳山祭に参加する町部の家屋だけが、非日常的な用途の部屋という性格を明確に残している

最後に、農村部と町部の家屋の形や間取りはなぜ違っているのか考えていきたい。まず、農村部と町部の人口密度が関わっていると考え。是安の人口は 305 人、西新田の人口は 385 人である。農村部では広い土地に少ない人のため、一人辺りの土地に大きい面積が取れる。そのため各家の敷地は大きく、家屋も町部に比べ広がっている。それに対し町部では面積が狭い上に人口が多いため、家の敷地を多くとることはできない。そのため、家同士の距離は近く、または住まいの面積を取るため二階が一階とほぼ同じ面積とになっている。農村部では一階だけで十分な居住空間がとれるために、二階はおおよそ 2 部屋から 4 部屋で、かつてはわらやまきを置く物置であった。さらに、農村部では、農作業を行うスペース、農作業道具を置く納屋が必要であり、こうした面からも広い敷地が必要となる。それに対して町部では、勤めにでるか、商店を営んでいる世帯が多い。店を持つ場合、店は住居と一体であり、通りに面した場所が店となり、奥が生活空間となる。立地や生業の違いが、町部と農村部の家屋の構造の違いをもたらしたと言える。またが、町部については、

通りに面した部屋は人や神を迎える場所という位置づけがなされたと考えられる。

謝辞

最後に、今回城端で調査にするにあたり協力していただいた皆さまにお礼を申し上げます。農村部と町部の皆さまには、突然の訪問にも関わらずお話を聞かせていただいたり、お家の中を拝見させていただき本当に感謝しております。ありがとうございました。皆さまのご協力のおかげで、無事調査を行うことができました。

そして宿泊場所を提供してくださった大村家のみなさん、本当にお世話になりました。大村家のみなさんと過ごせたことで、大変楽しくまた充実した合宿生活を送ることができました。いつもいつも親切にさせていただき本当にありがとうございました。

調査を通し城端でたくさんの人と触れあうことができ、おもしろくまた貴重な時間を過ごすことができました。城端の皆さま、ほんとう本当にありがとうございました。

9. 国道の拡幅と再開発による住民生活の変化と住民の城端像

河合 智香

1. はじめに

城端町の市街地を通る国道 304 号線は、かつては、観光バスが入ることが出来ないほど狭く、また、国道であるにも関わらず市街地には狭い道路で直角のカーブが二つ交互に繋がるクランクや一方通行の場所があった。そのため、平成 7 年から道路の幅を広げる事業が始まり、周囲の家々を取り壊して、車が走りやすい道路が整備され、広い歩道もつくられた。ところが、工事後の現在も、この道路沿いには、昔ながらの外観の家々が多く立ち並んでいる。これは、城端駅など昔からの姿がそのまま残っている建物を除けば、多くは道路工事後に建てられた家屋である。なぜ、古い町並みを残すようなかたちで家屋が再建されたのだろうか。また、国道 304 号線は、その道沿いが商店街だということもあり、かつてから住民の生活と密接な関わりをもっていた。家屋は古いかたちで再建されたが、街の中央を広い道路が通るようになったことで、住民の生活にどのような変化が生じたのだろうか。

この報告では、道路の拡幅によってもたらされた住民の生活変化と、街並みづくりからうかがえる住民が自分たちの住む城端に対して抱くイメージについて、聞き取り調査をもとに考察したい。

2. 国道の拡幅と住民

まず、住民と深い関わりのある国道 304 号線が拡幅し、大きく変化したことによって、地域住民の生活がどのように変化したか、また、拡幅に対して住民はどのように感じたかについて、記述したい。

2-1. 国道 304 号線と拡幅事業の概要

国道 304 号線とは石川県金沢市の森本 IC 入り口の交差点から、富山県南砺市の下梨交差点までを結ぶ、総延長 40.4 キロメートルの道路である（図 1 の A と B の区間）。この道路は途中、城端駅前や城端市街地を通っている（図 2）。道路を拡幅する前の幅員は約 5 メートルであったが、拡幅事業によって幅員が 17 メートルと約 3 倍に広がった。

拡幅事業は 1980 年に国が都市計画案を決定したことを機に始まった。その都市計画案を受け入れるか否かは当時の城端の人々に任された。もし、都市計画案を受け入れな

かったら城端町の外にバイパスを作るという話があり、町のなかには、もし町の外にバイパスができたら自分たちの町がゴースタウンになるのではないかと懸念する人々もいたと言う。一方、住み慣れた家を取り壊してまで道路を広げるべきかという意見もあり、議論の末に町を活性化させるために都市計画案を受け入れることを決定した。そして 1995 年から、第一期工事として善徳寺前の交差点から拡幅工事が始まり、その後、西上下口、西下、東上、出丸と工事が進み、第二期工事として大工町、新町、南町の拡幅がおこなわれて、2008 年に出丸から南町までの 1340 メートルにおよぶ拡幅整備が完了し、幅員が現在のように 17 メートルとなった（表 1）。



図 1．国道 304 号線



図 2. 城端市街地を通る 304 号線

表 1. 304 号線拡幅事業経過

1980 (昭和 55) 年	国が都市計画案を決定
1995 (平成 7) 年 3 月	路線、幅員の発表 別院前交差点より着手
1998 (平成 10) 年	西上町下口着手 東上町内着手 西下町内東側着手
1999 (平成 11) 年	西下町内西側着手 東上町内竣工
2000 (平成 12) 年	大工町町内着手 新町町内一部着手
2002 (平成 14) 年	大工町町内竣工
2003 (平成 15) 年	出丸町竣工
2004 (平成 16) 年	南町町内着手 新町町内竣工
2005 (平成 17) 年	南町町内ほぼ竣工
2006 (平成 20) 年	拡幅事業完成

(国道 304 号城端市街地道路整備促進期成同好会の事業経過記録をもとに作成)

2-2. 道路拡幅により住民が認識している変化

写真 1 と写真 2 は拡幅前後の JR 城端駅から旧町に向かう出丸の坂を登ったあたりの道路である。二つの写真を比較すると、道路拡幅によって道路がかなり大きくなり、同

時に歩道も広がっていることがわかる。



写真 1. 拡幅前の道路（出丸）



写真 2. 拡幅後の道路（出丸）

それでは、国道が拡幅されたことによって生活のどのようなところが変わったと住民たちは感じているのだろうか。

まず、最も多く得られた語りは、「交通が便利になった」というものであった。たとえば、城端で生まれ育った 70 代の女性は「徐々に道が整備されていき、歩きやすくなった」と語った。また、304 号線沿いに住む 60 代の女性は「冬に除雪車が通れるし、救急車などの緊急自動車も通れるので安心できる」と言う。「歩道が広いので散歩するのに便利である」とか、「車の運転がしやすくなった」と話す住民もあり、住民たちは車の運転も、歩行も便利になったと感じていることがうかがえる。道路沿いで商店を営む 60 代の男性は「車がたくさん通るので活気がある。しんとしといたら何もないし」と交通量が増えたことによって活気が出たと語る。また、道路拡幅を機に城端に戻って

きて住み始めた人もおり、整備されたことによって城端が都市化したと感じている住民もいた。また、道路拡幅の影響は城端の祭りにも影響を与えているようだ。曳山祭りに関して 80 代の女性は「以前に比べて曳山をまわすのが楽になった」と語り、むぎや祭りに関しては「道の広さをカバーするために”じゃんとこいむぎや”が登場した」と町はずれに住む 70 代の男性は話す。このように道路の拡幅は交通の面での変化だけではなく、城端に活気を与えたり、祭礼にも変化をもたらしたりしたことがわかる。

しかし、一方でこれらの語りとは全く反対の語りもあった。まず、交通の面に関して「交通は便利になったが、渡りづらくなった」と 40 代の女性が語り、「交通事故が増えた」と 40 代の男性が言う。また、80 代の女性が「夜に歩くのが怖くなった」と話す。このように交通が不安になったと感じている住民もいるのである。また車がたくさん通るので騒音がうるさいと感じている住民もいる。

また、道路が渡りづらくなったことにも関係するが、向かいの家が遠くなったことをさみしく思う住民もいた。80 代の女性は「道路が広くなって隣が遠くなった。人との縁が遠くなりさみしい。それに近所づきあいも悪くなった」と語り、50 代の女性も「向かいに渡るのが大変になった。それに向かいや近所の人々の笑い声も聞こえんし。隣にだれが住んでいるのかよくわからなかったりする」と語るように、道路が拡大し、空き地ができたり、向かいの家が遠くなったことで近所の人たちとの関係が薄くなったと住民たちは感じているようだ。また、拡幅のために国道沿いに住む住民は土地を国に売らなければならなかった。そのために家が狭くなったという住民もいれば、土地を手放してしまったために今は道路沿いを離れ、違う地区にある全く別の家に住んだ住民もいる。さらには、工事の際に城端を出ていき、近隣の砺波市や福光町に移り住んだという人も少なくない。とくにサラリーマン世帯が、商店街に住んでいると祭りや街灯などの経費がかかることもあって、道路の拡幅を機に他の地域に移り住むことが多かったと言う。なかには、60 軒ほどあったのが 50 軒程度に減ってしまったという町内もある。4 章でも触れられているが、そのため、むぎや祭りに出られない町があったり、祭りのときに他の地域から人を借りたりしないと人が足りないという状況になっている。こうして空地が増えたり、人が減ったために、過疎化を心配する声も少なくない。

また祭りとの関連では、60 代の男性が「曳山と道のバランスがわるくなった」と語った。以前は曳山が道いっぱいのために曳山が大きく見えて迫力があったが、今の広い道路だと曳山が小さく見えてしまう。これを住民の人たちは残念に思っており、曳山に対しての親近感が薄くなったり、曳山が通る際の迫力がなくなったことにさみしさを感じたりしているようである。

商店街の人たちは、商売がやりづらくなったと感じている。商店を営むある 70 代の男性は「道が広くなっても通り過ぎていくだけ。流れ客がいなくて暇」と語った。交通が便利になり、交通量が増えたがほとんど車で通り過ぎるだけで、城端の商店で買い物をする人は多くないそうだ。また城端に住む若者は車で近隣の店に買い物へ行くことが多く、商店街を利用するのは固定客ばかりのようである。このため、交通の便が良くな

っても売り上げが伸びていないと言う。

住民の中には特に生活に変化を感じていない人もいる。このような人たちは、城端旧町からやや遠い地域の住民に多かった。住民に聞き取り調査をした結果、これまで見てきたように、多くの変化を住民が感じていることがわかった。道路拡幅は、交通の面での変化だけでなく、同時に、近隣関係や祭礼、商業などにも影響を与えている。言いかえれば、国道の拡幅は沿線で暮らす住民たちの生活のあらゆる面に変化をもたらしたのである。

2-3. 拡幅に対する住民の反応

ここまで、住民が道路の拡幅により生活にどのような変化があったと感じているかを見てきたが、ここからは道路拡幅を住民がどう感じているのかを見ていきたい。

先に述べたように拡幅事業は、昭和 55 年に国からの都市計画案が出されてから城端の住民たちが何年も悩み、議論した結果、施工された。道路拡幅が城端の住民にとって大きな決断だったことが住民の語りからもうかがえる。

まず、拡幅の話を聞いたときの反応である。80 代の女性は「建て直しなどしなければいけないと聞いてびっくりした」と語り、70 代の男性は「ええー。ほんまになるんかな、と信じられなかった」と当時のことを話す。やはり車が行き違うのが困難なほど狭い道路が約 3 倍にも幅員が拡大することは最初は想像できず、かなり驚いたようだ。

次に、実際に拡幅工事を終えての住民の反応であるが、「拡幅して車がたくさん通るということは活気があるということ。しんとしとったら何もないしねえ」と 60 代の男性が語るように、拡幅の目的である活気のある町になったと感じていたり、都市化したと感じているから拡大して良かったと考えている住民もいる。また、「じゃんとこいむぎや」のような今まではなかったものが生まれたから良かったなど、拡幅による変化を肯定的に捉えて、拡幅に満足している住民たちがいた。

一方で、今でも拡幅の必要性に疑問を感じている住民もいた。20 代の男性は「広げる必要はなかった。正直不評だと思う」と語り、70 代の女性も「前の方がよかった」と語っている。これらの語りから現在も拡幅に対する考えは尾を引いていること、以前の町に強い思いを抱いている住民たちがいることがうかがえる。

また、他にも「交通は便利になったけど、危険が増えたし、100%よいとは言えない」と 60 代の男性が語り、「(拡幅が) プラスだと思わないとやってられない」と 40 代男性が語った。この語りからは拡幅してよかった点もあるが、悪い点もあり、どちらもどっちだと感じている住民もいれば、もう拡幅してしまい以前の町は戻ってこないのだから拡幅してよかったと思わなければならないと感じている住民もいることがわかる。聞き取り調査では、拡幅してよかった、または拡幅しなくてもよかったとはっきり感じている住民よりも、拡幅したことでよくなったこともあるが、不便になったこともあるので一概には言えないという語りが多く得られた。人によって拡幅への感じ方は様々であると言える。

3. 再開発と住民

城端は古い町並みや風情が京都に似ていることから「越中の小京都」と呼ばれている。城端の市街地では、304号線の拡幅した沿線上や、そこからつながる細い道沿いには昔風の外観をした建物が多くみられ、写真3のような土蔵景観が並んでいる。これらの建物のほとんどは拡幅による建ての直しの際に行われた再開発によってつくられたものである。近年、観光客を集めるために町並みを整備する地域が多いが、城端ではどのような意図で昔ながらの景観が保存されているのだろうか。ここからは、再開発に伴って行われた景観保存からみられる住民の城端への認識についてみていきたい。



写真 3. 城端の土蔵の景観

3-1. 再開発の概要

1995年から着手された国道304号線の拡幅事業に伴い、城端町では町の再開発を行った。先にも述べたように、景観への取り組みは再開発の一環である。再開発は各町内で結成された組合によって進められた。ここからは城端の各町の中でも土地の再配分など特徴的な事業を行った西上地区の再開発に焦点を当てて行きたい。

西上地区は善徳寺前交差点周辺の地区で、拡幅によって道路が大きく変わった場所のひとつである。この地区では拡幅事業が着手された1995年の7月に西上地区再開発準備組合を28名で設立し、翌年に協同組合えびす商店街を設立した。表2で示したように、再開発事業を進めるにあたり政府からさまざまな承諾を得て、1998年に事業がすべて完了した。再開発を進めるうえで、協同組合えびす商店街は善徳寺前の交差点付近をA、B、Cの3つのブロックに分け（図3）、善徳寺前交差点の善徳寺側で城端駅寄りのブロックをAとし、五箇山側のブロックをB、Aブロックの304号線の向かいをCとした。

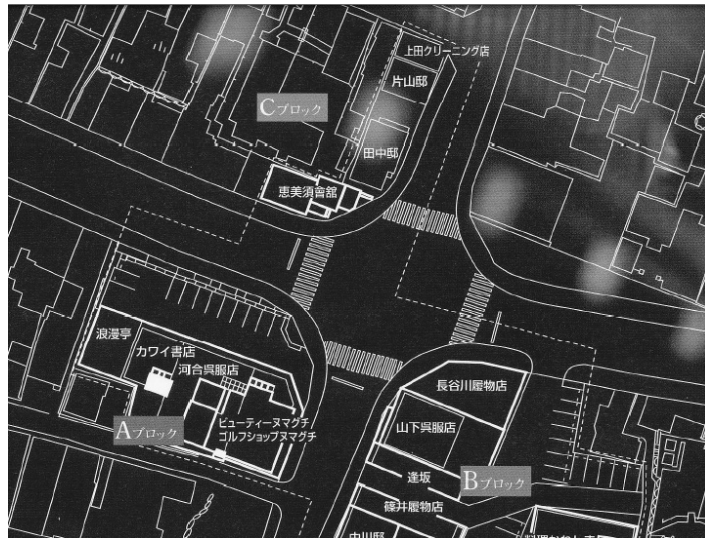


図 3. A・B・Cブロック（西上地区）

A・Bブロックでは優良建築物等整備事業および小売商店街近代化事業を導入して再開発を進めた。優良建築物等整備事業とは市街地環境の向上と、良質な市街地住宅を確保することを推進するために国や地方公共団体が必要な整備助成を行う制度である。また、小売商店街近代化事業は小売商業を活性化するため、計画に基づいた高度化資金を活用して道路を舗装するなどの近代化事業を行うものである。Cブロックでは小売商店

街近代化事業に基づいた個別建て替えを行い、「恵美須會館^{えびすかいかん}」というコミュニティ施設を建てた。これは、拡幅事業が決定してからさまざまな場所を視察した結果、決定した。また、協同組合えびす商店街は拡幅に伴う土地の減り方にばらつきがあるため、土地の再配分を行った。また、隣接する土蔵景観と調和する町並みにするため町並み景観協定を定めた。さらにA・Bブロックではこれに建築協定を締結している。ここで注意しておきたいのは景観協定があくまで申し合わせであり、強制ではないことである。また、再開発のための補助金はあったが、景観保存に対する補助金はなかったようだ。周りの土蔵景観と調和させるためだけではなく、曳山に合う景観を目指すため、曳山を作る際に世話になった大工の棟梁に集ってもらい町並みの景観基準を定めた。しかし、この規則は家屋の細部まで決められているものではなく、基調とする色や、袖看板、おおよその外観のつくりについてのおおまかな規制である。

つまり、城端の景観整備は観光客を誘致するためのものではなく、自分たちの祭礼や町に対するイメージにあわせて住民が自主的に行ったものなのである。

表 1. 再開発事業の経過（西上地区）

1995（平成 7）年 3 月	国道 304 号路線発表
4 月	国道 304 号改良工事着手
7 月	西上地区再開発準備組合設立
1996（平成 8）年 3 月	物件補償額提示 事業区域の決定
5 月	配分面積の決定 市街地総合再生計画大臣承認 優良建築物等整備事業着手
9 月	配置案決定、事業計画検討
12 月	(協)えびす商店街設立総会
1997（平成 9）年 1 月	(協)えびす商店街設立登記
2 月	建築協定の決定 女性部会発足 転出者説明会
5 月	コミュニティ施設設置決定
6 月	除去工事完了
7 月	建築協定認可
8 月	商店街近代化事業の認可 起工式
11 月	共同施設事業認可
1998（平成 10）年 3 月	恵比寿会館竣工 優良建築物等整備事業竣工 竣工式

3-2. 住民のもつ城端像

ここまで、城端では住民たちの祭礼や、自分たちの町を大切にする気持ちから町並みが整備されたことがわかった。ここからは住民たちが自分たちの町をどのように認識しているのかみていく。

ある 70 代の女性は「自分の家は現代風だが、古い町並みのイメージがある」と語り、60 代の男性が「静かな街ってこと」と話すように、城端は静かで、情緒のある町であるというイメージが住民たちの間で共有されているようだ。他にも「都会のように発達していないけど、曳山祭のように華やかな祭りもあるし、いい所」と 90 代の男性が語るように、曳山祭またはむぎや祭といった祭りのある町だという認識も持っている人が多い。さらに、善徳寺のような立派な寺のある町という認識もあるようだ。これらの

語りから小京都だという城端像をもつ住民が多いのは、善徳寺や祭、古い町並みなどが京都とゆかりのあるものだと考えているからではないだろうか。一方で、小京都だと言われているが、そのことに疑問を感じている住民もいた。また小京都というイメージではなく、のんびりした町であるとか、70代の男性が「車がなくても近くに必要なものがある。町がコンパクトだ」と語るように市街地にはさまざまな商店があり、必要なものがおおよそ入手できる便利な町であるとか、自然が多い町だと認識している住民もいた。

3-3. 再開発に対する住民の意識

これまでは住民たちが自分たちの町に対してどのような認識を持っているのかを見てきた。ここからは住民の持つ城端像が再開発における景観保存にどのように生かされているのかを再開発への住民の反応からみていく。

「(町並みを)なるべくそろえるようにしている。曳山祭の山宿のことも意識している」と70代女性が語るように、町並みをできるだけそろえようと意識している住民が多かった。しかし、町並みをそろえる理由は、そろえた方がきれいだからとか、町並みをそろえた方が人が来そうだからなど様々なものがあつた。実際、町並みをそろえたおかげで人が来るようになったと、手ごたえを感じている住民もいた。また、土蔵景観を作ろうとした理由を尋ねると、40代男性は「曳山に合うようにした。変な町にはしたくなかった」と語った。このように近年建替えを行ったにも関わらず土蔵景観が残っているのは、住民たちが城端像でも持っているように城端は善徳寺や祭り、情緒のある町という認識が反映されているからだと思われる。

ところが中には「町並みを変えるのに抵抗があつた」と70代男性が語り、「小京都を意識した外観をほとんど半強制された」と60代男性が語るように土蔵景観に合った家を建てるのに消極的だった住民もいた。しかし、概要でも述べたように、町並みへの取り組みは強制ではなかったため、土蔵景観にこだわらず、現代風の家を建てた住民もいる。このため、土蔵景観の中に現代風の家が点在しており、「もっとそろえた方が良かったかも」と60代の女性が語っている。

4. まとめ

国道304号線の拡幅はその沿線に住む住民にとって大きな出来事であったことが今回の調査でわかった。多くの住民が、拡幅によって交通が便利になったと感じていると同時に、拡幅に伴って近隣の地域に移住する人が多かつたために人口が減ってしまったことや、空き地が増えたり向かいが遠くなつたりしたこと近所の人と以前より疎遠になつてしまったことが寂しいと感じていた。また、店を営む住民は、車が通り過ぎて行くだけで客が増えるわけではなく、むしろ近隣の大型の店舗に買い物へ行く住民が多いため客が減つてしまい商売が大変になつたと感じている。さらに、国道の拡幅は普段の

生活だけではなく、むぎや祭に「じゃんこいむぎや」を加えるきっかけとなったり、曳山祭では曳山がまわしやすくなった一方で、曳山と道幅のバランスが悪くなったりするという影響を及ぼしている。

景観については、近年多く見られるように観光客を誘致するために行政側が景観の整備を行ったのではなく、拡幅事業と共に行われた町の再開発のなかで、住民たちで構成された組合を中心に申し合わせ事項として行われたものであることがわかった。景観協定に対して否定的な住民もいたが、強制ではなかったにも関わらず、古い町並みを意識した家に建て替える住民が多かったのは、自分たちが抱く城端像にふさわしい町をつくらうとしたからであろう。

10. 生活施設に関する意識調査から見る城端のイメージ

田村 駿裕

1. はじめに

はじめて城端を訪れた時、石畳の道路や家と家の間にある小道といった独特の景観が印象に残った。同時に、町の規模に対して、スーパーやコンビニ、娯楽施設といった、地元住民が利用できる生活施設が少ないのではないかと感じた。このような印象から、古い町並みを持つ城端の住民が、日常的にどのような場所で買い物をしたり、余暇を過ごしたりしているのかということに関心を持ち、調査をおこなうことにした。

具体的には、城端の住民が城端にある施設や商店をどれほどの頻度で利用し、どのように利用をしているのかについて聞き取り調査をおこなって、住民の行動範囲や城端での生活のあり方を考察した。さらに、住民が城端で生活をしていて不便に感じている点はあるのか、城端にどのような施設・商店があればいいと考えているのかについて、また、住民たちが城端に対してどのように認識しているのかについても、聞き取り調査をおこなった。この報告では、施設・商店に関わる人々や住民の語りをもとに、施設に焦点をあてて、城端の住民の生活と城端に対するイメージを明らかにしたい。

2. 城端住民の施設・商店の利用状況について

まず、城端内の施設や商店をどれぐらいの頻度で利用しているのか、また、どのように施設を利用しているのかという問いに対する住民の語りを、世代別に見て比較してみたい。

2-1. 10代から20代

ある女子小学生は「ふだんは神社やスーパーとか町中で友達と遊ぶ」と話し、中学生の男子は「城端の外に遊びに行くことはほとんどない。ほとんど友達の家でゲームをして遊んでいる」と話していた。小学生や中学生は神社やスーパー、友達の家など、城端の中で過ごすことが多いようである。また、小学生からは、城端の中の体育施設で運動をするという回答もあった。

一方、ある男子高生は「コンビニくらいしか利用しませんね。他に利用するようところも城端にはないですし」と話し、10代の男子大学生も、「城端内の施設とかは、ほとんど利用しないですね。高校生ぐらいになると、遊ぶところもないからいつも、

福光・福野にカラオケしに行ったりはします」と語るように、城端に若者が楽しめる娯楽施設がないため、高校生以上になると、福光や砺波といった城端の外に出かけていくことが多いようである。またある高校生は「土日も部活があるので、城端の中にいる時間が少ないかもしれない」と語っていたが、城端内に高校がないため、高校生たちは多くの時間を城端の外で過ごしている。

2-2. 30代から40代

30代の男性で会社員は、「あまり城端の施設は利用しないかな、夏の間息子と温水プールに行くか行かないかという感じ。土日には車で、金沢や砺波のほうまで買い物に出かけているよ」と話し、ある30代の女性も「城端のお店はほとんど利用しません。近くのスーパーも値段が高くて、品ぞろえも悪いからいつも車で福光の安いスーパーまで買いに行っています」と語るように、30代から40代では自家用車を持っている人が多いこともあって、買い物は城端でせず、金沢や砺波に出かけていく人が多い。また上述の会社員は、「休みの日には、毎週金沢とかに子どもが喜びそうなレジャー施設に連れて行っているよ」と述べ、高校生と同様に、娯楽についても、城端の外に出かける傾向がある。

しかし、ある30代の主婦は、「城端にあるお店は結構利用しています。スーパーは2日に1回は行くし、ベビー用品を買いに地元の商店にも行きます。やはり手軽に、パッと買い物できて便利ですね」と話す。この世代でも、時間をかけずに、地元の商店やスーパーで買い物をおこなう人もいないわけではない。

2-3. 50代以上

ある60代の女性は「買い物は近所のスーパーで済ませています。そこに行けば友達にも会えるし。もう年ということもあって、ほとんど城端の外に買い物に出かけるということはほとんどないですね」と話す。同じく60代の女性も「行きつけの地元商店や、顔なじみの個人病院があるので、いつも利用しています。個人病院だと、ほんの小さな用事でも行きやすいし、親切にしてもらえるので助かります」と語るように、50代以上の世代では、若い世代とは対照的に、城端の商店やスーパーや病院をよく利用しているようである。その理由の一つに、体力的に城端の外に出かけていくことが大変という語りも多くあったが、90代男性の「介護施設に行って、友人とおしゃべりするのが楽しいよ」という語りや、80代女性の「温水プールの施設があって、週二回は行きます。健康のためというのもあるけど、そこで友人に会えるのも楽しみ」という語りから、高齢者の住民にとって城端の施設や商店は、友人との交流を楽しむ場となっているといえる。

2-4. まとめ

以上のように、世代によって城端の施設、商店の利用状況や利用する理由は様々であることがわかった。10代から20代では、小学生や中学生は城端内で過ごすことが多く、スーパーなど城端の施設を利用する機会が比較的多い。それに対し、高校生以上になると、娯楽施設を求めて城端の外に出かけることが多い傾向がある。このように小、中学生と高校生以上では、行動範囲が異なっているようである。

30代から40代の全体の傾向としては、高校生や大学生と同様に、城端内の施設を利用することは比較的少ないようである。城端で得られないモノやサービスを求めて、金沢や砺波などの娯楽施設や大型のチェーン店に出かけていっている。高校生などと違って、自家用車を利用して移動するため、行動半径は広い。

50代以上になると、自家用車を持っていないことや、体力的な問題から城端内のスーパーや個人病院を利用する機会が多く、10代から40代までの若い世代と比べると、その行動範囲は狭い。しかし、顔なじみの店があるなど地元商店と密接な関係を持っていたり、そこで友人とのおしゃべりを楽しんだり、城端の施設や商店は、高齢者のコミュニケーションの場となっている。

3. 城端の生活施設と住民

ここでは、住民の「城端にどのような施設や商店があればいいと思うか？」という問いに対する語りを見ていきたい。また、そこから住民が生活において不便に感じている点も見ていきたいと思う。ここでも、世代別に比較していく。

3-1. 10代から20代

先に触れたように、10代から20代の高校生、大学生は娯楽施設を求めて城端の外に出かけていくことが多いが、砺波の高校に通う男子高生は「やっぱりボーリングとか、なんでも遊べるような娯楽施設が欲しいですね。いつも砺波とかに遊びには行きますが、正直いちいち出かけていくのは面倒な時もありますね」と語り、城端内にも娯楽施設があれば良いと感じている。また、ある女子中学生は、「公園とか、気軽に暇をつぶせる場所が少ない気がする」と話し、城端には時間をつぶせるような場所が少ないと感じているようである。他にも、コンビニエンスストアを求める声もあった。

3-2. 30代から40代

30代から40代では、自家用車を持っている人が多いため、生活に不便を感じている人は少ないようである。しかし、主婦や女性から「車があれば特に不便はしないけど、冬は雪がひどくなるから、もう少し買い物ができるところが欲しい」、「子ども向けの本を買いたいので、大きな本屋があればいいかも」といった話を聞いた。また、会社員の30代男性は、「地元の商店は営業時間が短いから、仕事帰りに寄りたくても寄れない。

もう少し営業時間を長くしてもらいたい」と、午後八時前後にはほとんど閉店してしまう城端の地元商店に対する要望を述べていた。

3-3. 50 代以上

「大きな総合病院がないのが不便。南砺市まで行かなきゃいけないから」（60 代女性）や「病院がないのが少し不便だねえ」（90 代男性）といった、健康に配慮しなければならない高齢者が、総合病院が城端にないことを不便に感じているという回答がいくつかあった。一方で、「南砺にある病院は、以前、城端にあった病院に比べるとだいぶ（診療）科も増えているし、きちんと整備されていて、医療環境は今のほうが充実しているのではないか」という語りもあった。自家用車が自由に使える場合は、40 代や 30 代の住民と同様に、生活に不便は感じないということであろう。

また、「買い物などの用事はほとんど城端内で済ませることができるし、とくに今の環境に不便は感じないし、こういう施設や店が欲しいというのも思いつかない」と話す人もいた。若い世代と違って、とくに娯楽や買い物に遠出をしなければならない必要がない高齢者にとっては、城端に現在ある商店や施設で十分なのであろう。

3-4. まとめ

世代によって、城端に求めるものは異なっている。10 代から 40 代までの世代の住民たちは、娯楽施設や大きなスーパーができれば、移動時間を短縮できて便利だと考える傾向がある。しかし、このような希望は、あくまで、あったら便利だという程度のもので、ぜひとも城端に欲しいといった要望ではない。50 代以上も同じように、大きな病院がないのを不便に感じているという語りもあったが、城端から城端外にある病院行きのバスが出ていることもあり、差し迫って、不自由に感じている人はいないと言える。

4. 城端のイメージに対する語り

ここまで、城端にどのような施設、商店が欲しいかに関する住民の語りについてみてきたが、その語りの中には、娯楽施設や大型のスーパーができることで、城端の景観が壊れてしまうならば必要ないというような、城端のイメージに対する語りが多く見られた。

そこで、これからは、住民の城端に関する語りから、住民が城端に対してどのようなイメージを持っているのかについて見ていきたい。

4-1. 城端の文化について

30 代の女性は「大きなデパートとかできればいいと思うけど、むぎやや曳山の情緒あるイメージを壊してしまうかもしれないから無理には必要ないかも」と、施設よりも麦屋祭や曳山祭といった城端ならではの文化を優先すべきではないかと語る。ほかにも

麦屋や曳山に関する語りは多くみられ、「城端は、麦屋や曳山がある文化性の高い場所。だから他にはない強みを生かした施設を作るべきだと思うよ」(50代男性)「城端は都会のように発達はしていないけど、曳山祭のように華やかな祭りもあるし、いいところだよ」(90代男性)といった語りがあった。

4-2. 城端の景観、雰囲気について

むぎやや曳山といった祭礼だけでなく、城端の雰囲気や景観に関する語りもあった。10代の男性は「カラオケのような娯楽施設ができては仕方ない(役に立たない)と思います。この夜が静かな城端にそういうものができてもうるさいだけ。静かな雰囲気を壊してしまうと思います」と話す。確かに、城端は地元商店の営業時間が短いこともあってか、午後8時ごろには町中も非常に静かである。ある男子高生も「娯楽施設ができてほしいと思う反面、この城端の昔ながらの街並みや、静かな雰囲気が崩れてしまうのも嫌だなと思います」と話していたが、城端の静かな町並みのイメージは高校生のような若い世代にも共有されているようである。こうしたイメージが住民に共有されているために、カラオケのような娯楽施設や大規模な施設が欲しいという思う反面、特に必要はなく、城端の外で楽しめればよいという結論や行動に結びついているのだと言える。

5. 施設や商店の人々の認識

これまでは、住民の語りを中心にみてきたが、次に施設、商店側の語りについてみていきたい。

まず、地元商店の経営者に利用者の年齢層を尋ねたところ、地元の高齢者や観光客の利用が多いという回答がほとんどであった。理容店を営む男性は「利用者はほとんど地元の高齢者だねえ。若い人たちはみんな車を持っているし、砺波とか金沢とかの城端の外に出かけて行っているんだろうね」と語り、若い世代の多くが、城端の外の店を利用していることを認識しているようだ。また地元スーパーでは、夫婦で暮らしている高齢者が多いため、惣菜一パック当たりの量を、半分にして販売するという工夫を行っているという。

また地元商店では、カヤの木の实をつぶしてつくる「がや焼き」(写真1)など城端ならではの商品を扱った店が多くある。スーパーでも、南砺市の特産品コーナーが設けられ、城端の食品会社で作られた商品も並んでいる。スーパーの店長によれば「地元の人達を買っていく場合もあるが、イベントが多い城端だから、観光客に向けて売り出しているという部分もある」とのことだ。



写真 1. がや焼き

(<http://hokuriku.biz/sweets/%E3%81%8C%E3%82%84%E7%84%BC%E3%81%8D.html>より)

もし、城端に新たに、スーパーや飲食店などのチェーン店作られるとしたら、どう思うかと尋ねたところ、商店を営む女性は「城端は小さな町だから、他のチェーン店が進出してくると地元商店に影響が出て困りますね。わたしもふだんは、知り合いの店で買い物をするようにはしています」と、チェーン店や大きなデパートができることによって地元商店が受ける影響は大きいと語った。また互いに商店を利用し合うなど、地元商店同士のつながりも強い。

文化施設で企画などを担当する男性は「城端で大きなデパートのようなものを作っても、人が少ないから難しいと思う。そういうものは金沢とかに行けばあるし、わざわざ外から人が来るとは思えない。それよりも、麦屋とかの城端ならではのものや、他にはない独自の強みを生かした施設を作るべきだと思うよ。そうすれば外から人も来ると思うし」と、一般の住民が抱いているのと同じ麦屋や曳山といった城端のイメージを施設に反映させるべきであると語った。実際にこの文化施設では、様々なイベントを積極的に催しており、富山市や金沢市といった南砺市外の客も多く来館しているという。

商店で高齢者向けに商品のパッケージングに工夫を施すなど地元住民が利用しやすいような配慮をしたり、買い物をするときでもお互いの店を利用したりするなど、城端は、施設、商店と住民、また施設、商店同士といった相互のつながりが強い地域だといえる。また城端の歴史的な資源を生かした商品や、イベントを企画することによって、城端の外からの顧客を増やそうと考えている人もいる。

6. 行政担当者の視点

最後に、行政のまちづくりの施策について触れておきたい。

6-1. 行政側と住民側の比較

行政の担当者に城端に新しくチェーン店などを作る予定はあるのかと尋ねたところ、行政側からはとくに誘致は行っておらず、現在、城端にあるチェーン店も企業側のマーケティング戦略で建てられたものだという回答であった。また、住民からの施設、商店に関する要望も、とくにないと言う。実際に住民の中には細かい要望はあるものの、行政側への要求には至っていない点や、住民の城端の景観や文化の保存を重要視する点から、住民と行政の間に大きな相違はないといえる。また、高齢者向けに、外に出かけなくても買い物ができるようにチラシを見て商品を注文してもらう買い物支援サービスを計画するなど、高齢者へのケアも行われているようだ。

6-2. 行政側と商店側の比較

行政の街づくりに対する姿勢は、地元商店に寄り添うということであるようである。、具体的には、たとえば、商店街支援事業の一環として行われている「恋する城端」育成振興事業がある。

「恋する城端」は平成 21 年度より取り組んできた事業で、本年度で最終年度を迎える。事業内容としては、城端のイメージキャラクター（図 1）を活用したり、スタンプラリーや食べ歩きツアーなどで地元商店や施設を紹介したりするなど、城端ならではの観光資源を活かして、商店街、そして個別商店の魅力を来訪者に発信していくというものである。このような情報発信によって、観光客の増員や再訪を狙い、商業基盤の再生を図るのがこの事業の狙いである。また、今後の政策として、観光客や若者向けに、最新の携帯機器を用いて、地元商店などの情報を得られるサービスを計画しているなど、行政側は観光事業に積極的に力を入れている。



図 1. 城端のイメージキャラクター

(http://www.geocities.jp/johana_inlove/index.html より)

行政側は、商店街支援事業や観光事業に力を入れるなど、地元商店や施設と連携することで、城端の歴史的資源や独自性を来街者に発信し、商業基盤の再生を図る方向を目

指しており、これは、施設や商店の人々や一般の住民の城端の将来に対する考え方と共通している。

7. まとめと考察

住民にとって、城端は金沢や砺波といった、いわゆる都会に比べると、娯楽施設や、医療施設といった面では不足していると感じる点は少なからずある。しかし、その分、城端には、他の地域にはない夜の静かな雰囲気や、麦屋、曳山など独自の景観や文化を持った場所であるという認識が、世代を越えて住民の中にあり、また、そのイメージを壊してはならないという意識を持っている。また、行政や施設、商店側もその城端ならではの資源を生かしたイベントや施設、商品などを企画している。

城端の一般住民、施設や商店、行政は、城端の独自の歴史や文化をもとに、城端の将来像を描くという点で一致しているのである。

感想

最後に感想を記したい。個人的な話になるが、私の家は富山市のはずれにある農村地帯にあり、家の周りにはコンビニやスーパー、娯楽施設もないという環境で生活している。そのため、私は、近所にコンビニや娯楽施設ができてくれることを切望している。

城端の個人的な第一印象も、コンビニなどが少ないというものだったので、調査を行う前は、私と同年代の人たちも、買い物できる場所や娯楽施設ができることを切望しているのではないかという勝手な憶測をしていた。だが、実際に話を聞いてみると、高校生や大学生の人も城端の景観や雰囲気についてのイメージをそれぞれが持っており、娯楽施設などよりも、情緒ある景観や夜の静かな雰囲気を優先すべきだと考えていることが印象的であった。しかし、私も実際に城端で合宿生活をしてみて、そのイメージをある程度理解することができた。城端では、午後八時前頃には、通りの地元の商店もほとんど閉店し、夜は静かな情緒のある雰囲気に包まれるのである。この環境で生活していれば、騒がしくなったり、明るくなったりする商店や施設はとくに要らないと考えるのも、自然なことだろうと感じた。

しかし、これはあくまでよそ者である私の個人的な感想であるが、もし行政側がこのまま観光化を推し進めることによって、現在よりも多くの観光客が城端を訪れるようなことになれば、城端の夜の静かな雰囲気が失われてしまうかもしれないと、やや危惧している。

11. 絹織物に対する住民の意識と生産者の取り組み

近藤 奏絵

1. はじめに

近年、後継者不足や需要の低下、消費者の嗜好の変化に伴い、伝統産業が低迷している。伝統産業の一つである、絹織物業についても、農林水産省生産局特産振興課の「養蚕に関する参考統計」と「^{さんし}蚕糸業需給・価格動向調査」によると、絹織物を支える養蚕

農家戸数は2000年3280戸から2005年には1591戸、^{まゆ}繭生産数量も1244トンから626トンと減少している。その結果、絹織物の工場が廃業に追い込まれたり、他の会社による合併や吸収が行われたりしている。

城端も古くから絹織物の産地であったが、やはり、最近は衰退の傾向にある。しかし、現代の趣向に合わせて、絹を使った製品を製造することで絹織物の伝統を守っていくという試みが行われている。この報告では、聞き取りを行った絹織物に携わる人々と絹織物の町であった城端の一般住民を対象に、絹織物についての認識を記述し、両者を比較し、現代の城端と絹織物の関わりを明らかにしてみたい。

2. 絹織物の概要

この報告書の冒頭でも触れられているように、県南西部に位置する城端は、善徳寺の門前町として、また近隣の産物が集まる市場町として栄えてきた。城端で絹織物がはじまったのは、戦国時代末期と伝えられている（『城端起源伝記』に拠る）。城端は、絹の原料となる繭や生糸の産地であった五箇山と隣接しており、絹織物の産地としての環境は整っていた。

しかし、城端だけではなく日本全国で事情は同じであるが、現在、使われている絹は輸入に頼っている。織物工場は平成の大合併以来、吉村絹織と松井機織場の2軒が続いている。

2-1. 絹織物の歴史

城端の絹織物は、今から約430年前、天正5年（1577年）畑氏によってはじめられたと伝えられている（『城端絹起源伝記』）。その後、当時、城端地域を治めた加賀藩前

田氏により保護され発展してきた。周囲から移り住む人が増え、町もにぎわいを見せていった。元禄 6 年（1693 年）城端の人口やそこに住む人々の職業などを記した「元禄^{げんろく}品々帳^{しなじなちょう}」には、総戸数 689 戸のうち 375 戸が絹織物関係する職業であったと残されている。人口の半数以上が絹織物に関わっていたことになり、当時の盛んであった様子が分かる。城端で作られた絹織物は、加賀藩の特産物として、京都の間屋で取引されていた。京都へ送られた後、多くは加工され、産物が多く集まる江戸へ送られた。このように、上方だけではなく、江戸へも広がっていき、絹織物業は城端の経済を支えていた。

2-2. 絹の現状と国内生産との比較

下の表 1 からわかるように、現在の日本では、絹の原料である繭は群馬県を中心に生産されている。群馬県の生産量は全国の半分近くを占め、福島県、埼玉県と続いている。しかし、群馬県を中心に生産している繭は、全国の絹の需要の 1 割にとどまっている。その他の 9 割は外国からの輸入に頼っている。最大の輸入国は中国で、ブラジル、ベトナムなどからも輸入している。

全体の 9 割を輸入に頼っているのは、国内の養蚕家^{ようさんか}が減少したためである。また、国内生産の場合、様々な安全点検や審査が必要で、手間や時間がかかる。一方、輸入された絹は、そのような点検や審査を通過してから入ってくるので、すぐに使うことが出来る。調査では、コストの面でも、中国産の繭は安価で手に入れやすいという話を生産者から聞いた。自家生産でやっていきたいが、多くの労力と時間がかかるのだと言う。

表 1. 全国の繭の生産量と絹織物の生産量

全国（t）	625	全国（t）	3,026
群馬県	278	京都府	1,729
福島県	75	福井県	184
埼玉県	54	新潟県	182

全農 2005 年全農販売繭数量実績、農畜産業振興機構 2005 年全国絹織物産地における生糸玉糸消費状況

（「大日本蚕糸会」より作成 http://www.silk.or.jp/kaiko/kaiko_okurimono.html）

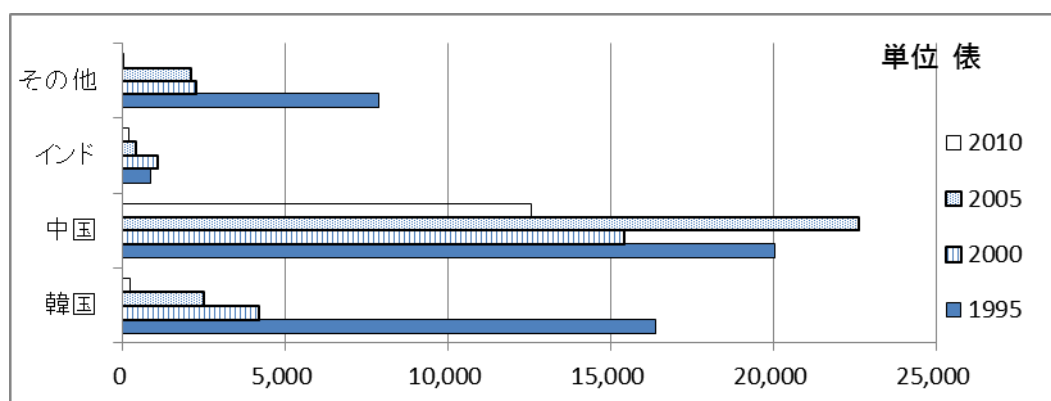


図 1. 国別上位 3 か国の絹織物輸入数量の推移

(「(社)日本生糸問屋協会」より作成)

<http://homepage1.nifty.com/nittonkyo/orimonoyunyuukuni8.htm>)

2-3. 絹織物に関する活動

城端の絹織物に目を向けてみよう。毎年の春と秋に、城端の中心部に位置する水月寺^{すいげつでら}

で天神講^{てんじんこう}という祭りが行われている。水月寺は絹業繁栄の神として崇敬されている。近年、繊維産業の中心が化合繊維やニットに変化していることもあり、現在は城端近隣の繊維に関わる人々が中心に守っている。また、この水月寺は、菅原道真公を祀ることから、水月庵天満宮とも呼ばれている。菅原道真は文章博士であったことに由来し、天神講に合わせ、小学生による書の奉納も行われている。これには、城端小学校の児童が参加し、選ばれた児童に対して、水月寺本堂で表彰式が行われる。この大会は大正 4 年から続いており、昨年、10 月に行われた書の奉納は 100 回を超える。

この競書大会について、小学 5 年生 4 人と 3 年生 1 人の女子に話を聞いた。彼女たちは、「小学 1 年生から 6 年生まで全校生徒が学年ごとに異なる題を書いて、その中で字の上手な人が選ばれ祭りに参加する。出展できなかった人でも、祭りには参加できるよ」と言い、「城端の小学生はみんな（天神講の祭り）知っているよ」と話していた。この水月寺の天神講は、城端で絹織物を始めて以降、絹業を生業とする人々が多く参詣し、現在も毎年行われている。

3. 住民の絹織物についての語り

前述のように、現在の日本では絹の原材料となる繭は、多くは中国やブラジルといった外国からの輸入に頼っている。また、絹織物の生産量も減少している。城端でも、合

成繊維やその他の新素材の発展により、かつての工場は新しい繊維会社に合併されたり、廃業に追い込まれたりしている。

3-1. 住民の認識

住民への聞き取りを行うと、かつて城端では絹織物が盛んであったことは知っているが、絹織物業に直接に関わったことのある人はほとんどいなかった。城端に 60 年近く住んでいるが、絹織物に関わったことがない 70 代の女性は、「城端と言えば絹織物で本当に盛んだった。いくつも工場があって多くの人が働いていたね」と話す。60 代以上の住民は城端に絹織物の工場がいくつもあり、盛んだった当時の様子を知っている人が多い。70 代の男性は絹織物の衰退について、「現代は着物を着ず、洋服を着ているから」と言い、「昔は上新田町にはいくつもの工場があって、盛んだった」と話す。また 70 代の女性は、「昔は絹織物の工場が沢山あった。今は着物をめったに着ないね」、「絹織物は盛んだったと聞いているが、私の祖母の代の頃が一番栄えていたと聞かされた」と言う。年配の住民たちには、昔の城端は絹織物が盛んであったと当時のことを話した後に、時代の変化で和服を着る機会がなくなってきたので絹織物産業が衰退したと話す人が多い。

70 代の女性 Aさんは、直接に絹織物と関わった人である。Aさんは、中学卒業後、絹織物工場で働いていた。Aさんによれば、「工場では娘から嫁の年代の人が多く働いていた。中には城端に住んでいる人だけではなく、周辺の百姓の娘から中年まで幅広く雇っていた。30人から50人の従業員の工場もあれば、多いところでは100人近くの人働いていた工場もあった」と言う。またAさんは、「城端中心が特に栄えていたけれど、町外れに行っても機織りの音が聞こえていた」と言い、「40年以上前には十数軒の絹織工場があったのだけどね」と話していた。また、「子どもの頃、夏用や冬用の着物を持っていて冠婚葬祭や祭りの時に着ていた」と言う。しかし、「今も着物を持っているが、ほとんど着ていない」、「洋服の方が楽だから」と話す。

別の70代の女性Bさんも絹織物工場で働いていた経験を持つ。Bさんは昭和34年から定年までの30年以上を女工として働いていた。「朝6時から夜10時まで朝と夜の二交代制、週替わりの仕事だった」、「娘時代から結婚後の期間働いていたそうで、1度辞めたとしても、再度復帰できるほど、仕事が十分にあった」と話す。Bさんが勤めていた工場では、中学卒業から60代までの70人から80人の女工が働いていたと言う。

一方、若い世代の住民は、60代以上の人たちのように、かつて絹織物業が盛んだった時代は直接には知らない。40代の住民に、機織り体験や絹の関連商品の販売している織館という施設に行ったことがあるかと尋ねると、40代女性は「城端の絹織物は知っているが、直接は関わらないよ。お客さんや親戚が来て行くところがないと言う時に連れて行く程度」、「私は入ったことはないけど、子どもが機織りの体験をしたことがあるくらい」と言う。また、もう一人の40代女性は、「この辺りの地元のお母さん方は直接（絹織物に）関わることはめったにないと思うよ。織館に勤めるか、工場か、どこ

かで働いている人以外は関わらないね」と話す。これらの語りから、40 代以下の世代では、絹織物業は過去のものであると同時に、強い関心を持つものではないことがうかがえる。

3-2. 絹織物に関わっている施設や行政の認識

絹織物に関わっている施設、組織、行政で聞き取りを行った。

先述の織館という施設では、絹の関連商品を陳列するとともに機織りの実体験もできる。職員の一人は、「麦屋祭の時期が年間で最も観光客が訪れるが、祭が終わると冬に近づいていくに連れ、減ってくる」と言う。そして「城端の絹織物は昔から有名で、所有する会社が変わっても、機織りを続けてほしい。手作りという温かさを感じて欲しい」と話す。

富山県南部^{けんじん}絹人織織物構造改善協同組合である。絹織物の組合として明治 42 年に設立され、以来、名称は何度か変わったが、現在まで続いている。この組合の女性職員は、「昔は絹産業が中心であったが、次第にニットや合成繊維が力を付けてきた。けれども、それらの会社もなくなってきており、現在は 10 社以下になっている」と言う。組合は設立 100 周年を迎え、記念文集の制作にあたっている。「実際は組合が設立され、100 年以上経っているが、昔の人や大学教授などの組合に関わる文章が発見されたため、記念の文集を作ることになった」と話す。また、この組合では、後述する絹織物業の松井機業場を見学したいという観光客に対してサポートを行っている。

南砺市役所城端庁舎観光課では、「歴史と文化が薫る町づくり」という事業があり、ものづくりとして織物を行政が取り上げたことがある」と言う。観光パンフレットでは、織物や織館を取り上げているが、しかし、産業の活性化のための施策はないようである。



写真 1. 絹の関連商品 絹飴（左）と入浴剤（右）

4. 絹織物工場

現在、吉村絹織と松井機業場の 2 軒が城端の絹織物の伝統を受け継いで操業している。吉村絹織は主に夏用の着物を、松井機織場では、和紙にしけ絹という絹を使ってふすまを生産している。最近では、絹の生地を利用し、室内のインテリアとしてシェードを新たな生産にも取り組んでいる。従来の着物の織物の生産だけではなく、ふすまやシェードといった、形を変えつつ現代に絹を残している。

また、10 年ほど前からシルクパウダーを使い始めている。これは、織物の際に出る糸くずを集め、酵素分解し粉末にしたものである。絹にはタンパク質とアミノ酸が含まれていて、20 数年前、当時、信州大学の平林潔教授が国から糸くずを利用できないかという相談を受けて研究し、開発されたものだと言う。現在では、シルクパウダーは、調味料や入浴剤、せっけんの原料として使われている。



写真 2. 販売されているシルクパウダー

4-1. 吉村絹織

吉村絹織は現在、従業員 5 名で、主に夏用の着物（蠟地^{ろうぢ}）を製造している。作られたものは 100 パーセント京都の問屋へ出荷し、その後、全国へ送られている。吉村氏の奥さんは、「昔（50 年ほど前）城端で育った人は、例えば、母親が工場で働いているなど、何かしら絹織物と関わっていた」と話す。

シルクパウダーについて、社長の吉村氏によると「（平林教授によってシルクパウダーを製造、開発し、実用化すると）発表されてから、町おこしの材料として使えないかという目的で、各地で使いはじめた。シルクパウダーは織物の産地である丹後（京都府北部）^{ごせん}五泉（新潟県）などへ配られた」、「最初に丹後が目を付けたのではないか」と

言う。その理由として、吉村氏は、「丹後は和裁が盛んな地域。織物に関して、丹後は問屋制家内工業的な方法で行っていて、各家で織ったものをまとめ京都へ送っている形態を取っていた。（城端は、一つの工場で何十台もの機械で織っていた。）そのため経営が難しくなり始め、シルクパウダーに目を付けたのではないか」と話す。丹後でシルクパウダーを使いはじめた頃、城端では、シルクパウダーを使うことに関して、「城端は織物一本でやろうと決めていたため、そのことに関しては保守的だった」と話す。

しかし、その数年後、城端でも使ってみようという動きが始まった。「絹織物がなくなってから絹の関連商品を売り出すのでは遅すぎる。減少しているが、まだ生産しているうちに取り組んだ方がいのじゃないか」という意見があった。町長から「何かできないか」と言う話を持ちかけられた。その時、すでに、丹後やその他の地域でシルクパウダーを使った商品やセリシンを取り出して作られた化粧品などが出回っていた。吉村氏は「今更やっても陳腐なものと思っていたが、やっても面白いのではないかという勧めもあり、シルクパウダーの関連商品を考え出した」と話す。そして城端でも、10 年ほど前から活用するようになった。

「始めは、味噌汁や酢の物、コーヒーに入れていた」と言う。「ある時、お茶会の席で、抹茶に入れて出してみた。すると「まるやか。」「美味しい。」と好評だった」、「このことがきっかけとなり、シルクパウダー入りの抹茶を作り始めた」と話す。吉村氏は、現在、シルクパウダー入りの 4 種類の抹茶を販売している。「商品名には絹、衣に関する名前を付けている」と言う。

また、「当時（丹後が活用し始めた頃）（機織りの際に出てくる）糸くずで作られていたため、若干、不純物が入ることもあったが、その後、改良され不純物を取り除かれるようになった。しかし、次第に、全国的に織物が衰退し、多くの糸くずを回収することができなくなった。現在は中国からの輸入に頼っている」と話す。約 90%が中国から、その他、ベトナムやブラジルなどから仕入れている。「城端でも（絹の原料となる繭を）作れなくはないが、中国の蚕を使用している」、「（輸入されたものは）保健所で安全性が確認出来、安価で手に入るため」と言い、「五箇山で作られた繭を原料として

使っていたのは、江戸時代の終わりごろまでではないか」と話す。

城端の絹織業に関して、吉村氏は、「昭和 40 年代には、12,3 軒の工場があったが、徐々に合成繊維の工場に合併されたり、廃業になったり、平成の大合併の時には、2 軒（吉村絹織、松井機業場）だけになっていた」と言う。「織物はなくなっても、シルクパウダーの商品は残していきたい。城端から発信していきたい」と話す。シルクパウダーを広めるために何か行っていることはあるかと聞くと、「以前は、楽天やその他のサイトでシルクパウダーの通信販売をやらないかと言われ、一時やっていたことがあった。しかし、受付から発送までの時間と手間がかかり、一人でするにはとても大変で、現在は行っていない。通信販売は良い方法だけど、手伝ってくれる人や後継者がいてくれたら」と話す。

城端ではシルクパウダーを取り入れることに反対で、織物だけでやっていこうと言う意見があったと言う。伝統的な絹織物の産地としての誇りがあったことがうかがえるが、しかし、現在ではシルクパウダーを積極的に売り出すことが考えられている。吉村氏は「若い人たちは着物を着ることはめったにないでしょ」、「着物を着る人は限られているけど、シルクパウダーの活用は、幅広い人たちに通じる」と語り、「ここ（城端）から（シルクパウダーを）発信していきたい」と話す。

4-2. 松井機業場

松井機業場では、現在、従業員 7 名である。「しけ絹」という繭を使用した絹でふすまや夏用の着物を製造している。通常は 1 頭の蚕から 1 個の繭しか取れないが、「しけ絹」は 2 頭蚕から作られた珍しい繭である。「（しけ絹を扱っている業者は）北陸地域では、他に福井県に 1 つ扱っている店がある。かつては福光から玉繭、縦糸を、五箇山から生糸、横糸を仕入れていた」と話す。「ふすまは、福井県産和紙にしけ絹を貼ったものを生産している。北陸地域の家は比較的、大きな家が多いため、製造したふすまは主に北陸地域で使われている」と言う。また、松文と言う松井機業場で製造された、しけシルク（城端絹） 絹紙等の販売を行っている会社を経営している。

松井氏によると「夏用の着物（絹）は新潟県五泉市から技師を招いて技術を学び、作り始めた」と話す。

松井機業場でもシルクパウダーを使っており、松井氏は、「絹を活用し、目に見えるものとして、何かやりたいと思い、まず、はじめに絹に含まれる良質なタンパク質を使い、入浴剤の開発を始めた。それは、2000 年頃、完成し販売しはじめた」と話す。その入浴剤には含まれるセリンという成分は肌を保湿する成分が含まれているそうだ。その後、今度は石鹸を作りはじめた。「第一弾の石鹸 3000 個は完売した。現在、入浴剤と石鹸のセットになった商品も販売している」と言う。

また新たに、松井氏はシェードを製造している。「シェードは節絹の糸の特徴を利用し、2 枚重ねにすると 1 枚目と 2 枚目の糸の違いから様々な模様に見える。（作ろうと思ったきっかけは）絹は主に和装に使われるが、和装の全国的な需要が低下してきて、

何か和装に代わるものはないかと考えはじめた。(ふすまに関して)住宅の間取りも、間縁の狭い窓に変化し、和室を作るにはお金がかかる。そこでインテリア関係の人に絹を使い何かできないかと相談し、シェードを作ったらどうかと言われ作りはじめた」と話す。「住居空間が変化し、ふすまの需要が少なくなった。かつては今よりも大家族であり、冠婚葬祭も家で行っていた。そのため(冠婚葬祭を家で行っていた時代は)広い和室が必要だった。現在は、和室を造るにもお金がかかり、また和室がある家さえ減ってきている」と言う。「(新たな試みに対し)従業員や家族は方向転換には、協力的だった。シェードはお客様には面白いと好評」と話す。

以上見てきたように、城端に残っている絹織物業では、絹を様々な商品に利用し、織物だけではなく、広く受け入れられる商品を開発し、顧客を開拓しようとしている。城端の絹織物の伝統を守りつつ、新たな試みで現在に適応しようとしているのである。



写真 3. シェード(上)としけ絹ふすま(下)

株式会社 松井機業場ホームページより (<http://www.shikesilk.com/>)

4-3. シルクパウダー商品

先に触れたシルクパウダーについて、詳しく見てみよう。シルクパウダーを扱っている店の人は、ともに「シルクパウダーを使い始める時、入れる分量に苦労した」と話し、「絹の産地として、シルクパウダーを使った商品を出すことは、町おこしになっていいのではないか」と言う。

シルクパウダーを入れたビールを扱っている店の 20 代女性従業員は「“麦やエール”や“はかまエール”（シルクパウダー入りのビールの商品名）は（2005 年国際ビール大賞で）金や銀賞を受賞してから人気になって、求めに来る人も増えた」と話す。このビールは町のスーパーマーケットにも売られている。

精肉店では、調味料として、シルクパウダー入りのコロッケを販売している。「何度も試作し続け、ようやく完成した」と言う。また、和菓子を主に販売している菓子店でも、原料にシルクパウダーを使ったソフトクリームと饅頭を販売している。「分量に苦労し、試作を重ねた」、「城端は絹が有名だから、（織物以外の）別の商品となるものと思って（シルクパウダーを使った商品作りを）はじめたのだけど、はじめはどのくらい入れていいかわからなくて、一層作らない方がいいのではないかとということもあってね。少しずつ減らして出来あがった。今は目分量で入れて作っている」と話す。

5. まとめと考察

はじめに述べたように、社会や文化の変化に伴って、絹織物業が衰退して長い年月が経っている。一般住民に対する聞き取りでは、絹織物はかつて栄えていた産業で、今の城端には関係がないととらえる住民が多いことがわかった。このような意識は特に年齢が若くなるにつれて、強く見られる。しかし、60 歳以上の住民には、かつて絹織物が栄えていた頃の記憶が強く残っている。町を歩くと機織りの音が聞こえていたという情景の記憶がこの世代にははっきりと残っている。

一方、生産者は、時代に合わせて、絹産業を再興する努力を重ねている。絹を用いたさまざまな新製品を開発している。また、町の菓子屋や精肉店などでも、町おこしの一環として絹を利用している。全体としてみるなら、城端は、絹の町という住民の記憶に残るイメージをもとにして、新たな伝統産業を産み出す過程にあると言える。

謝辞

今回の城端の調査では、多くの方々に協力をいただきました。滞在の際、お世話になった大村様、アルバイトをさせて頂いた河合様、そして様々な資料を提供し、何でもお話を聞かせて頂いた吉村様や松井様をはじめ、お話を聞かせて頂いた多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

12. 理休地区における水車と住民の関係

佐野 あずさ

1. はじめに

城端の町の中心部から東の方に歩き、池川と言う五箇山地方から流れる川を超えるとなだらかな傾斜の続く農村地帯にたどり着く。この農村地帯は理休(りきゅう)と呼ばれる地区であるが、この地区は「水車の里」と言う別名を持っている。この地区は一見どこにでもあるような農村地区だが、少し歩き回るだけで、水車を何基も見ることが出来る。それぞれの水車はそれぞれ特徴を持っていて、たとえば回転に合わせて組み込まれている人形が動く水車があったり、高さが2メートルもある大きな水車があったりする。私は初めて理休地区を歩いた時に水車がいくつも回っている風景を見て、この理休地区になぜ水車があるのかということに興味を持ち、調査をおこなうことにした。調査を進めていくうちに、水車をきっかけとして誕生した人々の集まりが存在することがわかった。この報告では、理休地区と城端の他の地域で行った聞き取り調査をもとにして、水車が理休地区の人々の結びつきに果たしている役割を明らかにしたい。

2. 理休の概要

図1のように理休地区は城端の中心地から見て東に位置している。理休集落は古くは「利久」と記されていた。「利久」が現在の「理休」に変わったことについては加賀藩の祖前である前田利家の兄、前田利久に遠慮して理休の字に改められたと言う説と、戦国時代に城端城城主である荒木大膳が現在の理休地区のあたりに利久庵と言う茶室を作ったことに由来すると言う2つの説がある。

理休地区の用水のほとんどの水源は6章で詳しく述べられている縄ヶ池^{なわがいけ}から引かれている。この池は渇水期にも比較的水が多く、用水にも利用されていたため、古くから水車に水を供給していた。また、100年ほど前は理休地区のほとんどの家は茅葺^{かやぶき}の合掌造^{がっしょうぞう}りであった。合掌造りの萱屋根は20年毎に葺き替えるための共同作業が必要だった。この作業には多くの人手が必要だったため、かつての理休の人々は相互で助け合って作業を行っていたと言う。また、理休は城端の中でも農村地帯でありかつての農繁期

れた。結成の当時は理休地区の男性だけで構成されていたが、理休地区に水車が増えて、会の活動の範囲が広くなると、「水車の会レディース」という女性の組織がつくられた。1991年に理休地区内に第一号水車を完成させ、その後も「交通安全水車」、むぎや祭りを再現した「笠踊り水車」、富山県南砺市の五箇山^{ごかやま}に伝わる伝統芸能のこきりこ節を再現した「こきりこ水車」(写真 1)などの特色のある水車が続々と制作された。写真 2 は理休にある水車の一例である。

表 1. 水車に関わる活動

1991 年 3 月	水車を復活させると話がもちあがる。
1991 年 5 月	第 1 号水車誕生、その後続々と水車がつくられる。
1992 年 4 月	理休「水車の会」が誕生する。水車のある道沿いが「水車ウォッチングロード」と命名される。
1992 年 7 月	女性たちの「水車の会レディース」が結成される。
1992 年 8 月	地方万博「ジャパンエキスポ富山」に水車を出展する。
1992 年 9 月	むぎやパレードに「水車の会レディース」が出場する。
1993 年 2 月	「水車音頭」が作られる。
1993 年 7 月	「93'城端水車まつり」が開かれる。
1994 年 7 月	水車公園が建設される。
1994 年 10 月	「水車の会」が第 4 回「富山県ふるさとづくり賞」奨励賞等を受賞する。



写真 1. こきりこ水車



写真 2. 理休の水車の一例

理休の水車は、子どもたちに交通安全を呼びかけるものや水車の回転に合わせて城端や五箇山の祭りを再現するものなど、様々である。取り付けられた人形が動く水車などが評判となって、小学生が学習の一環として水車を見学するようになった。1992 年 4 月 19 日、水車の会は、城端理休地区を「城端水車の里」と命名した。同年 8 月に地方万博である「ジャパンエキスポ富山」に理休から水車 10 基を出展した。その年の 9 月に初めて城端の祭りであるむぎや祭り（4 章で詳述されている）のパレードに「水車の会レディース」の女性たちがおそろいの浴衣を着て初出場した。この年には、水車の会の人数は 25 名まで増加しており、水車の数も 22 基に増加していた。そして 1993 年 2 月に理休の水車を題材にした「水車音頭」が作られた。1994 年 7 月、富山県が補助をおこなって、理休神社の境内に「水車公園」が建設された。同年 10 月、水車の会は、第 4 回「富山県ふるさとづくり賞」奨励賞等を受賞し、また、「あしたの日本を創る協会」主催平成 6 年度「ふるさとづくり賞」主催賞の集団の部で入賞した。

1997 年頃から理休地区の水車を取材したいとテレビ取材の依頼が来るようになった。この頃から現在まで、地元の富山テレビをはじめ、NHK や大阪ほんわかテレビ、また県内外の新聞社などに水車が頻繁に取材されるようになる。水車の会は、このような取材の対応もおこなってきている。こうして、地域内外で「水車の会」の活動が広く知られるようになった。しかし、2008 年 7 月に豪雨のために水車が流されて、45 基あった水車が 20 基にまで減ってしまった。

図 2 は現在の理休地区における水車の位置である。図でわかるように道沿いに水車が配置されている。ただし、図に示した以外の地域にも水車はつくられている。また、図で示した水車の中には、上述の豪雨の影響で破損してしまったものもある。



図 2. 城端地区における水車の位置

3-2. 水車の会の活動について

現在、「水車の会」は男性 30 人女性 20 人の 50 人で構成されており、最高齢の会員は 83 歳の男性である。「水車の会」の活動も男性と女性で異なる。理休地区の水車製造は昔ほどの勢いは見られないが、現在でも会の活動は活発に続いている。総会が 5 月に開かれ、年に 2 度旅行が催されて、会員同士の親睦の機会となっている。

会の男性たちは理休地区に点在する水車のメンテナンスをおこなったり、水車公園や広場の清掃をおこなったりする。また、水車を見に訪れる観光客を案内したり、「水車の会レディース」の活動資金のサポートもおこなっている。メンバーは随時募集しており、理休地区の人々だけでなく、城端の他の地区の住民もメンバーとなっている。

女性たちの組織である「水車の会レディース」の活動は男性の活動にくらべ「水車」とは直接結びついていないものが多い。老人ホームに訪問し踊りを披露するなどの社会福祉活動を主として行っている。8 月に催される理休地区の夏祭りでは、模擬店を出展しステージ上で踊りを披露し、9 月のむぎや祭りのパレードには揃いの浴衣と花を頭に挿し婦人会の女性達とともに出場する（写真 3）。



写真 3. 夏祭りの水車レディース

4. 水車の会の人々の語り

ここからは「水車の会」のメンバーの人々の、会に対する認識についての語りを紹介する。城端で唯一の水車職人の 80 代男性は「最盛期の 17 から 18 年前には水車の会だけでも 70 人ほどいたが、今は父が水車の会の人間だから自分も水車の会に入ろうと考える者は少ない」と語る。また、「当時は 3 人ほどほかに職人がいたが今はもう 1 人になってしまった。もともと水車の復活を始めようと思ったのは『楽しみながら長く続き、仲間も増えそうなことをしよう』と言うこと」とも語る。水車を作り出して間もない頃は「くだらんことをしとる」と批判されたこともあったらしく、最初は個人で水車の資金を負担していた。しかし、水車が増えるにつれ理休の水車が話題になりテレビの取材を受けるようになった。また、「水車の作成の依頼があると理休の水車を見回りでできない。だから、水車をひとつにまとめた水車ウォッチングロードを作った。昔は一軒にひとつは水車があったんだけどね」と話す。

自宅の前に直径が 2 メートルほどの大きな水車を設置している 60 代の男性は「水車の維持には年間 15 万から 20 万ものお金がかかる。でも国から表彰をうけたりしていた時期もあった。今は水車の会を発足させた当時の人々もどんどん亡くなって随分すたれてしまった」と語る。また、水車の会の会員である 60 代男性は「メンテナンスが大変で高齢化した水車の会の人では辛い。若い人が不足している。予算が不足していてなかなか水車を回せない。でも水車の会の仲間はみんな仲がいい」と語った。水車の会の 50 代男性は「水車の会は 20 年近く続いている。こんなに続くのはなかなかないからすごいことだと思う。いつまで続くかわからないが元々水車が好きなもん同士が始めたことだから続けていかなくちゃいけないと言ったことはないんじゃないか。水利を利用して水車を回していたのだけれど、最近は水の勢いがすごくてどうしていいかわからない。予算もかかるし困っている。もし水車職人がいなくなったら水車がもう作れな

くなってしまう」と語った。また、理休地区の区長である 60 代の男性は「水車の維持管理が大変だよ。水に水車が浸かり続けるから水車がさびたり壊れたりする」と語った。このように、水車の会の男性たちは、水車を取り結ぶメンバー間の交流を評価しつつも、水車自体の維持に不安や危惧を持っている。

4-1. 水車の会レディースの人々の語り

水車のメンテナンスや維持に苦労していると語った水車の会の男性たちに対して、水車の会の女性たちはどのような思いで「水車の会」の活動を行っているのだろうか。ある 60 代の女性は「水車は理休の人々の親睦を深めてくれている。地域のボランティアや納涼祭の時期は踊りの練習などで毎日のように集まって忙しい」と語った。また、別の水車の会レディースである 60 代女性は「みんなで集まってわいわいしながらする水車の会レディースの踊りの練習がとても楽しい」と話し、30 代女性は「踊りを踊ることがとても好きで依頼があれば老人ホームなどでも踊ります。9 月にあるむぎやパレードにでるから今はその練習をやっているんですよ」とにこやかに語ってくれた。また、別の 60 代女性は「水車の会は声がかかれば団結し人の集まりがいいので地区のつながりが感じられる。水車が出来て、水車の会が生まれ地域のつながりも出てきたと思う」と語った。このように女性たちは、水車を媒介にした地域の中の女性どうしのつながりを重視し、活動を楽しんでいることがうかがえる。

4-2. 城端の人々の理休地区の水車に対する語り

城端の町部で理休地区の水車に対する様々な話を聞くことができた。城端地区に住む 70 代女性は「全部水車がきちんと回っていればいいのにね。最初はものめずらしさで人が見に来ていたが今は気が薄れたんじゃないか」と語った。また城端に住む 70 代男性は「何台ももう外してしまっている。実用性がない。昔の水車は実用的だった」と実用性が低いことを指摘した。50 代男性は「もう流行りすたれてしまった。有名ではない。昔は理休のおっさん達が遊んでいるなどという思いで見ている。今はお客さんが来て見に行きたいといったら見に行く程度かな」と話した。このように、理休以外の地域では、客観的に水車や水車に関わる活動を見ている。

しかし、一方で水車に対して好印象を抱いている人々も少なくない。70 代女性は「人がたくさん見に来るので良いことではないか。祭りがなくても人が来るから良い」と語った。また、60 代男性は「あれは大人の遊びやね。観光より自分達の遊びの為にやっているのだろう。初めてみる人はびっくりするだろうね。そば引き水車で作ったそばやうどんを食べたことがある」と笑って話した。60 代女性は「風情があってなかなか良いと思う」と話し、80 代女性も「水の流れを利用した発想が良い」と水車を復活させたことに肯定的である。また、小中学生は「生まれた頃からずっと水車が回っていて水車があることが当たり前になっている」、「ずっと見ていると目が回ってしまって面白い」、「部活が終わった後水車の水の音を聞くと癒される」と水車が生活の一部となっ

ていることを語ってくれた。このように、水車に遊び心や風情を感じたり、風景の一部となっていると感じる人々もいる。

また、水車を創ったのは地域の結びつきを強めるためだとする語りもあった。ある60代男性は「昔水車が理休地区に水車が実用的に回っている姿を見たことがあるのは自分くらいじゃないかな。理休はかつて大きな村だった。かやぶき屋根でユイをするのに協力が必要だった。葬式や誰かが倒れたときなんかにグループ行動が必要だった。火ことがあった時は協力して鎮火にあたり救急車がない時代は戸をはずしそこに患者を乗せ男達で担いで最寄りの医者まで運んだ。このように共同作業を通して村全体に絆ができていた」と話し、「近代化が進みユイなどの作業は衰退し生活が便利になるほど水車は消え村が孤立してしまった。村の人達はきっと『あいそんない』と思っていたはずだ」と「あいそむない」と言う富山県独特の方言をまじえて語ってくれた。「あいそむない」と言う表現は富山弁で「寂しい、物足りない」と意味である。農村時代の結束を取り戻すために、水車のある風景を再現したのではないかという推測である。このような推測は、結果的には、水車の会の活動が結果的に理休の地域の結びつきを強めていることと一致していると言えよう。

5. まとめと考察

農村地帯であった理休地区は、かつて、農業や家屋の維持のための人手を必要とする共同作業が多くあり、住民同士の絆は強かった。しかし、その後、機械化が進んで、住民間の関係は以前と比べて希薄になっていった。水車のある風景の復活とともに、水車を通して地域の住民が交流する機会が生まれることになった。ただし、男女で比較してみると、直接、水車の維持に関わる男性たちが、水車自体の存続に注意を向けて活動するのに対して、女性たちは、水車を一つのきっかけとしてさまざまなかたちで交流を深めている。

男女の間にこのような違いがあるのは、一つは、女性と男性の組織のあり方の違いがあるからかもしれない。男性の集団は、もともとの目的に即した現実的な活動を行う傾向があるが、女性の場合は、もともとの目的から離れて自由に活動をおこなう傾向があると考えられるのである。

いずれにしても、新しく生まれた「水車の会」が、いったんコミュニティのつながりが薄れた理休地区にとって住民どうしの新しい交流の場となっていることは確かなことである。水車という歴史的遺産をもとにして、コミュニティが復活しつつあるのが、現在の理休地区の姿だと言ってよいだろう。

謝辞

今回、理休地区の「水車」と「水車の会」を調査するにあたって「水車の会」の方々と傳栄寺の大村様の家族に大変お世話になり、誠に感謝しております。また、「水車の

会レディース」のみなさまには、むぎや祭りの準備や踊りの練習でご多忙だったにも関わらず、快く調査に協力していただき、ありがたく思っております。ありがとうございました。

参考文献

城端水車の里 2000 年度 『「地域づくり表彰」(現地審査資料)』

中嶋實(編) 『理休昔ばなし』、2010 年

<p>地域社会の文化人類学的調査 21 平野の小宇宙 – 富山県南砺市城端の生活文化</p>
--

発行日：2012 年 2 月 10 日

編集：竹内 潔

発行：富山大学人文学部文化人類学研究室

〒930-8555 富山市五福 3190 富山大学人文学部

Tel. & Fax 076-445-6186

E-mail anthro@hmt.u-toyama.ac.jp

印刷：なかたに印刷（株）

富山市婦中町中名 1554 – 23

